

平成26年度 スーパーグローバルハイスクール事業

研究開発名

国際機関へキャリア選択するグローバルリーダーの育成 Awakening the Whole Person to Become Global Leaders of International Organizations

研究開発完了報告書課題研究成果報告書 2014~2015(第1年次)



2015 (平成 27) 年 3 月

玉川学園高等部・中学部(東京) Upper & Lower Secondary Division, Tamagawa Academy, Tokyo

平成 26 年度指定

スーパーグローバルハイスクール事業

研究開発完了報告書課題研究成果報告書

第1年次

平成 27 年 3 月 玉川学園高等部・中学部

玉川学園スーパーグローバルハイスクール(SGH) 研究開発完了報告書・課題研究成果報告書(第1年次・2014~2015)

目次

1	事業の実施期間	3
2	指定校名	3
3	研究開発名	3
4	研究開発概要	3
5	管理機関の取組・支援実績	3
	(1) 実施日程	
	(2)実績の説明	
6	研究開発の実績	
	(1) 実施日程	
	(2) 実績の説明	
	◆課題研究について	5
	①グローバルキャリア講座	5
	②「Tamagawa Academy Super Global Leaders 48」認定制度への登録	10
	③12年公民科選択科目「ワールド・スタディーズ」「World Studies in English」	13
	⑤自由研究「グローバル・スタディーズ」の履修	18
	⑥ラウンドスクエア玉川国際会議の企画・運営・参加	24
	⑦-1 ドイツ・ゲーテ研修への参加 1	28
	⑦-2 ドイツ・ゲーテ研修への参加 2	30
	⑧模擬国連の実践を通した外交・国際協力の理解	34
	⑨A.学内 LAN による広報	35
	⑩B.日本語および英文ホームページの作成による広報	36
	⑪C.研修参加生徒による生徒発表会や展示発表の実施	38
	◆課題外研究について	40
	1. 評価/検証	40
	2.英語力	46
	A.英語検定と TOEIC 受検の奨励を行い、GTEC(ベネッセ)導入を検討する	46

B.11 年生選択科目「英会話 I 」、12 年生選択科目「O C Ⅱ」のコンテンツグロ	ーバル化
	47
C.学内レシテーションコンテストの実施	48
D.アカデミック・スキル・キャンプ	49
3.大学とのグローバルな高大連携科目の設定	50
4.グラハム・パイク氏による教員研修	53
5.ダイアログ・イン・ザ・ダークを通した関係性(エコロジー)の探究	53
6.海外トップ大学生たちとの交流	54
7.10 年次「玉川アドベンチャープログラム(TAP)」の必修化および自由研究「	゙リーダー
シップ (TAP) 」の履修	55
7 目標の進捗状況、成果、評価	57
External Evaluation for the Academic Year 2014-2015	66
【参考資料】	
グローバルキャリア講座詳細	89
生徒成果物① アフリカン・スタディーズ参加生徒プレゼン資料	95
生徒成果物② ドイツ・ゲーテ校研修参加生徒プレゼン資料	113
生徒成果物③ ヨーロッパ国際機関&ドイツ・ゲーテ校研修参加生徒プレゼン資料	131
平成 26 年度 K12 国際交流実績	143

平成27年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都町田市玉川学園 6-1-1 管理機関名 学校法人玉川学園 代表者名 理事長 小原 芳明 印

平成26年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を,下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成26年4月1日(契約締結日)~平成27年3月31日

2 指定校名

学校名 玉川学園高等部・中学部 学校長名 小原 芳明

3 研究開発名

国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成

4 研究開発概要

国際機関や国際 NGO でリーダーとして活躍するために必要な、多様な文化を理解し、世界の諸問題に興味を持たせる。その上で、正しい判断をし、強い意志を持って実行するためのコミュニケーション能力・語学力とリーダーシップを育成する。

- 5 管理機関の取組・支援実績
- (1) 実施日程

業務項目						実施	日程					
未伤识口	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11月	12 月	1月	2月	3 月
専任の支援スタッ フの雇用			実施									
海外研修プログラ ムの実施支援				実施						†		

学内ネットワーク による広報支援		実施						
日英ホームページ 等制作支援			実施					—
SGH 事業の進捗管 理		実施						
CIS 加盟						実施		
BLES プログラム 告知						実施		—

(2) 実績の説明

● 専任の支援スタッフの雇用

➤ 指定校において、SGH 事業の充実した取組推進および円滑な運営を図るため、海外諸機関との連携交渉等を担当する海外交流アドバイザー(非常勤職員)1名と、経理事務や資料整理等の事務作業等を担当する事務補助員(非常勤事務員)1名を雇用した。またTAとして(非常勤職員)大学院生を1名雇用した。

● 初等中等教育部門および法人部門との連携協力

- ▶ 指定校における海外研修プログラムの実施にあたっては、初等中等教育部門の海外研修 プログラムの企画・調整・運営を担当する学園国際交流センターが支援を行った。
- ➤ 指定校の研究開発成果の普及に関する取組において、学内ネットワークによる広報については、初等中等教育部門のコンピュータ・ネットワークの管理運営を担当する総務部学園情報システム課が全面的に支援した。また、日本語・英語ホームページ制作およびFacebookページ開設については、玉川学園ホームページを総括して管理運営する教育企画部キャンパスインフォメーションセンターの連携協力のもと実施した。
- ▶ 非常勤職員・事務員の雇用、委託費の管理、物品の調達等については、法人部門の総務 部、人事部、経理部との連携により、適正な運用を図るべく実施した。

● SGH 事業の進捗管理

- ▶ 管理機関の責任者および担当者は、毎月開催される実行委員会に出席し、管理機関として、連携や視点への助言を行ったほか、円滑な指定校運営がなされるよう学内諸機関・会議への協力要請等も機動的に行った。
- ▶ 今年度は運営指導委員会を平成27年3月4日に1回開催し、海外・国内の有識者から、本事業の進捗、課題、今後の計画等について専門的見地から指導・助言を受けた。

● 玉川学園 (K-12) としての取組み

- ➤ 平成 26 年 12 月 22 日、兼ねてから申請中だった世界的な学校連盟である Council of International School (CIS) に、一条校としては初めて、メンバー校として認定を受けた。メンバー校には、高校生と CIS 加盟大学を結ぶ世界イベントへの参加や CIS 国際生徒賞への応募などのベネフィットがあり、本学の更なる国際教育の充実を図る。
- ▶ 平成 28 年度から、幼稚部および小学校課程に、日本語と英語によるバイリンガル教育を 導入(BLES プログラム)し、国際化する社会において責任のある行動をとることがで きる人材の基礎を育てることを目指していく。このプログラムは、既に中等教育段階で 実施している国際バカロレア・プログラムの準備教育として、国際化する日本や世界の 大学への進学の起点としての使命を果たすものと位置づけ、平成 26 年 12 月から平成 28 年度入学生に向けた広報を開始している。今後は、平成 27 年 8 月に文部科学省教育課程 特例校指定申請を行う予定である。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

光水石口						実施	日程					
業務項目	4月	5 月	6月	7月	8月	9月	10 月	11月	12月	1月	2月	3 月
①グローバルキャリ ア講座			準備	実施		実施	実施	実施	実施	実施	実施 検証	
② Tamagawa Super Global Leaders 48			計画	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施 検証
③ワールド・スタディーズ、World Studies in English	実施	実施	実施	実施		実施	実施	実施	実施	実施検 証		
④アフリカン・スタデ ィーズ	広報 • 生徒募集	参加生 徒決定	事前 指導	事前指 導/実施	実施	事後 検証	事後 検証					
⑤自由研究「グローバ ル・スタディーズ」	準備	準備 (実施)	準備 (実施)	実施	実施	実施	実施	実施	実施 検証			
⑥ラウンドスクエア 玉川国際会議※H26 準備年	企画	企画	ガイダンス	準備	準備	準備	実施					
⑦ドイツ・ゲーテ高校		生徒 募集	準備	準備	準備	実施	検証	検証	検証	検証		
訪問							生徒 募集	事前 学習	事前 学習	実施	まとめ	発表
⑧模擬国連、MUN 部	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施 検証	準備	

(2) 実績の説明

◆課題研究について

①グローバルキャリア講座

【参加者】【日 時】【場 所】【内 容】延べ参加生徒数 1335名

高校生へ具体的な国際機関でのキャリア選択に対するイメージを付与することと、個人研究テーマの深化をねらった年間を通して行われた連続講座であった。参加できる生徒をできるだけ最大化するために次の4つの方式で行った。

1. 学年単位講話方式

今年度は実質7月からの開始であったため年間カリキュラムのなかでなかなか学年単位での 実施日時と施設調整が困難で、各学年ともに年1回にとどまった(①④⑤⑦回目)。

2. 授業内実施方式

講師や講義内容によって100分単位の講義時間を希望された場合があり(⑧⑪⑬回目)、2時限連続授業のワールド・スタディーズや自由研究の時間を使って実施をした。

3. TED 方式

放課後が忙しい生徒たちでも共通して時間がとれる昼休み (12:35-13:15) を利用した約 30 分の講義形式で、生徒は昼食をとりながら講師の話を聞く形式を導入した。詳細は後述するが、任意参加で参加人数の見込みが実施前はなかなか立たず不安であったが、実際には、目的意識の高い約 40~50 名の生徒が毎回集い、終了時間ぎりぎりまで質疑が行われ、大変活況であった (③⑥⑨⑩②⑭⑤⑩回目)。

【グローバルキャリア講座 2014 の講師一覧】

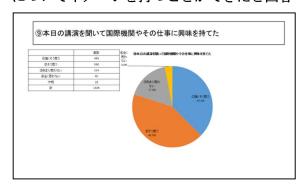
日付	時間	講師(敬称略)	所属	形式	略歴【テーマ分野】	参加 者数
① 7/16(水)	3 時 限目	伊藤 光子	元外務省国 際機関人事 センター長	12年 学年	元外務省機関人事センター所長、海外安全相談センター室長歴任。その後在インドネシア大使館、ニュー時ランドのオークランド総領事館に赴任。 OECD 日本政府代表部勤務 【外交】【国際協力】	220
② 7/28(月) ~30(水)	9:00~ 12:00	ステファン・ジョンソン ポール・カニングハム	立教大学異 文化コミュ ニケーショ ン学部	オンサイ ト集中 講義	立教大学で3日間英語による集中講義形式の講座。1日目は「貧困削減への国際協力」、2日目は「外交におけるコミュニケーション」、3日目は「批判的思考と異文化理解」をテーマに実施 【貧困】【外交】【国際協力】	26
③ 9/24(水)	12:45- 13:15	小野山 亮	日本国際ボ ランティアセ ンター (JVC)	TED 方式	スリランカ内戦や津波被害の支援をする複数の国際 NGO にて勤務した後、 2012年より JVC アフガニスタン事業統括 【人権】【外交】【国際協力】	49
④ 9/27(±)	3 時 限目	関谷 武司	関東 学院学院学院学院学院学院学院学の 法人カカラの協 カアシーの で も で も で は も で に り に り に り に り に り に り に り に り に り に	11 年 学年	国連ポランティア計画(UNV)と協定をむすび、国連学生ポランティアプログラムを実施。2004 年から約 60 名の大学生を派遣 【国際協力】	216
⑤ 9/27(土)	3 時 限目	小林 さより	国境なき医 師団	10 年 学年	国際 NGO「国境なき医師団」小児科医・ケニア南スーダンなどへ派遣し現地の医療活動に携わる 【貧困】【環境】【国際協力】	211
⑥ 10/9(木)	12:45- 13:15	林 達也	関西学院大 学総合政策 学部 4 年・ 国連ボラン ティア派遣	TED 方式	大学在学中に国連ボランティア(UNV)へ参加・關谷ゼミ生 【国際協力】	49
⑦ 10/11(土)	3 時限目	内海 旬子	JCBL 地雷 廃絶 日本キャン ペーン理事	9年	外資系企業勤務後「難民を助ける会」「日本キリスト教海外医療協力会・障がい者インターナショナル日本会議」他 立教大学、昭和女子大学非常勤講師 著作他多数 【貧困】【環境】【国際協力】【外交】	180
⑧ 10/24(金)	3~4 時限目	セム・ソワンタ	NGO アンコ ール障がい 者協会設立 者	ワール ト*・スタ テ*ィス*	1990 年カンボジア兵士として戦闘中に地雷被害に遭い両足を失う。その後 苦しい生活を余儀なくされるが、2003 年 NGO を立ち上げ自分と同じような 障がい者とその家族を支援する 【人権】【環境】【外交】	26
⑨ 10/30(木)	12:45- 13:15	浦輝大	国際協力機 構(JICA) 職員	TED 方式	元米プロフットボール・ハワイアンアイランダーズ所属、2 年間協力隊として バヌアツ・タンナ島派遣 【環境】【国際協力】	66
⑩ 11/13(木)	12:45- 13:15	関 健作	青年海外協 カ隊隊員 フォトグラフ ァー	TED 方式	2007 年から 3 年間ブータンに体育教師として小中校に赴任。著作「ブータンの笑顔」、http://kensakuseki.com 【貧困】【人権】【環境】【国際協力】	54
⑪ 11/14(金)	14:25- 16:15	ミシェル・ チクワニネ	元子ども兵 士 Free the Children (FTC)	自由 研究 &IB	1988 年生まれ。5 歳のときに誘拐され子ども兵士として紛争に巻き込まれる。その後難民認定を受けカナダ国籍を取得、16 歳でカナダへ移住。FTCカナダのモチベーション・スピーカーとして活動を始める。 【貧困】【人権】【国際協力】	131
⑫ 12/11(木)	12:45- 13:15	寺田朗子	NPO 法人 国境なき子 どもたち (KnK) 会 長	TED 方式	ストリートチルドレン、人身売買や性的搾取の被害、自然災害などの影響を受けた青少年などを支援。特に援助機関による支援の枠から外れがちな子どもたちを重点的にサポートした活動をしている 【貧困】【人権】【外交】【国際協力】	40
⑬ 12/16(火)	3~4 時限目	坪井 健	駒澤大学文 学部教授	ワール ト`・スタ ディス`	「ヒューマンライブラリー」の活動を通して、多様性への寛容な心を育てる 取り組みをしている。特に自分たちの社会に存在するマイノリティーを通して 人権問題や自己の偏見への理解を深める 【人権】【国際協力】	25
⑭ 12/16(火)	12:45- 13:15	駒澤大学文学部 坪井ゼミ生	駒澤大学文 学部	TED 方式	カンボジアスタディーツアーへ参加して考えたこと、感じたこと、今高校生へ 伝えたいことを若者の視線で語る 【人権】【国際協力】	24
⑮ 1/15(木)	12:45- 13:15	清水 俊弘	日本国際ボ ランティアセ ンター理 事・前事務 局長	TED 方式	JCBL 地雷廃絶日本キャンペーン理事・設立者、JCBL は 97 年にノーベル 平和賞を受賞した ICBL の構成団体のひとつ。クラスター爆弾禁止を目指す 活動をしている。著書多数 【外交】【国際協力】	23
⑯ 1/22(木)	12:45- 13:15	太田 美帆	玉川大学文 学部比較文 化学科准教 授	TED 方式	国際協力、農村社会開発、生活改善普及、エンパワーメントを専門とし、関連著書多数。青年海外協力隊としての経験も持ち、近年は震災復興のプロジェクトにも積極的に関わっている。 【貧困】【人権】【国際協力】	30
⑪ 2/5 (木)	12:45- 13:15	小原 一仁	玉川大学教 育学部教育 学科准教授	TED 方式	高等部卒業後渡米し、セントマイケルズカレッジ、ボストンカレッジ、UCLAを卒業。約10年間異文化のなかでの学習、研究経験を持つ。教育学博士(UCLA)。高等部出身。 【人権】【国際協力】	38

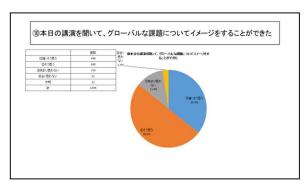
4. オンサイト方式

スーパーグローバル大学に選出されている立教大学との連携により人権、環境、貧困をテーマとした「Super Global Summer Course」を3日間実施した。講義は立教大学のキャンパスを会場とし、全て英語で行われた。担当は、異文化コミュニケーション学部のポール・カニングハム教授とステファン・ジョンソン准教授で、各日定員10名満員であった(②回目)。事前リーディング課題に取り組み、研究課題へ対する理解を深めた。

【成 果】

① 80%の参加生徒が国際機関やその仕事へ興味を持てた、86%の参加生徒がグローバルな課題 についてイメージを持つことができたと回答





グローバルキャリア講座では毎回参加生徒全員にアンケート調査を課しており、その結果を鑑みるに、概ね今年度の講座実施の目的は達成されたと結論づけることができると考える。全17回の延べ参加生徒は、1335名であった(全校生徒数902名)。事前に講師との内容の打ち合わせや入念な準備が毎回なされ、30分のTED方式であっても中高生へしっかりとメッセージが届くように調整してきたので、次年度でも継続していきたい。以下生徒の感想である。

病院で1台のベッドに3人の患者さんがいること、ハエが無数についている、難民キャンプでは気温が47度など、私たちの普段の生活では想像もつかないようなことに驚きを感じました。 (⑤国境なき医師団小林氏の講演を聞いて)

サモアが求めているボランティアと日本がしてあげているボランティアが必ずしも同じという 訳ではないというギャップゆえに、国際協力はデリケートな問題だという話が意外だった。 (⑥国連ボランティア計画派遣大学生林氏の講演を聞いて)

日本のニュースや新聞では一部しか報道されていないが、その裏にはさまざまな悲しい事件や貧しい人々が沢山いることを知った。

(⑪元子ども兵士ミシェル・チクワニネ氏の講演を聞いて)

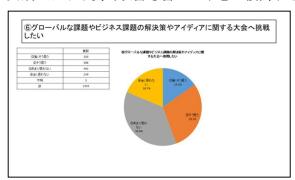
② YouTube を利用した講演データベースの構築

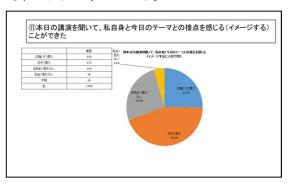
講演当日に参加できなかった生徒と興味のある保護者を対象に、全ての講演の様子をビデオで録画し、YouTube を利用して講演の記録をデータベース化した。公開は、学内関係者のみの限定公開とし、該当の URL を学内 LAN (CHaT Net) にて広報をし、アクセスする形をとっている。YouTube を利用することにより、その URL を知っていればスマートフォンでもアクセスすることができ、利便性が高いと判断した。

【課題】

1. 社会課題の内在化と自己の日常における実践とのキャップ

多くの生徒がグローバルな社会課題についての具体的なイメージを持つことができ、国際機関でのキャリア形成に関して、一定の興味関心の喚起に成功した一方、生徒自身とグローバルな社会課題とのつながり、また実際に自分の実力を大会やコンテストで試してみようという「外」の世界へ挑戦してみようという意欲と実践については、まだ大きな格差が本学生徒においてあることが明らかとなった。グローバルな社会課題を身近なローカルな課題としてとらえる視点といかに養うか。また「内向き」ともとれる生徒の傾向に関して、いかに挑戦させていくか。国際機関へキャリア選択をしようという人材は、常に未知の問題へ挑戦する気質が必須である。内向きかつ安全志向からある程度のリスクをとれる勇気をいかに滋養出来る人材へ育てるかは、TAP や諸実践における質的改善も含めて早急に検討する必要があると考えている。





参加者内訳

実施形式	12年	11年	10年	9年
参加者内訳	1	4	5	7
	7/16	9/27	9/27	10/11
9年男子	0	0	0	74
9年女子	0	0	0	106
10年男子	0	0	81	0
10年女子	0	0	128	0
11年男子	0	89	0	0
11年女子	0	127	0	0
12年男子	88	0	0	0
12年女子	132	0	0	0
計	220	216	209	180

World S	Studies
8	13
10/24	12/16
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
5	4
21	21
26	25

実施形式					TED	形式									
参加者内訳	3	6	9	10	11)	12	14)	15)	16	17)	小計	学年計	男	/女	
	9/24	10/9	10/30	11/13	11/14	12/11	12/16	1/15	1/22	2/5					
9年男子	0	2	4	4	9	3	2	2	4	2	32	96			
9年女子	4	4	9	7	11	6	6	6	5	6	64	90	田 フ 100	女子424	
10年男子	2	4	9	5	12	3	3	1	2	6	47	199	男子128	女士424	
10年女子	10	19	19	17	33	13	7	10	10	14	152	199			
11年男子	2	5	2	3	16	1	1	1	1	1	33	140			
11年女子	13	6	12	12	35	8	4	3	8	9	110	143	23%	77%	
12年男子	4	9	1	0	2	0	0	0	0	0	16	114	23%	/ /%	
12年女子	14	49	10	5	13	6	1	0	0	0	98	114			
計	49	98	66	53	131	40	24	23	30	38	552				

昼休みを使用して実施した TED 形式のグローバルキャリア講座の参加者は、10 年生がいちばん 多かったことがわかる。男子 23%、女子 77%と男女差に大きな開きがあり、来年度は男子生徒に 興味を持ってもらう施策が必要である。 ※②は「大学とのグローバルな高大連携」P50~に記載、⑪講義形式

◆グローバルキャリア講座受講後のアンケート

実施形式	12年	11年	10年	9年		World S	Studies						TED?	形式				
①現在、学校外でオ	_			_		_				·	^	^ [^	^	^	^	^	○ I +u A I
①強くそう思う	① 23	<u>4</u>	<u>5</u> 21	7 17	<u>割合</u> 10%	8 8	(13)	割合 31%	③ 13	<u>6</u>	9 24	10 24	① 45	12	13	①5 15	16 14	14 40%
②そう思う	45	36	28	30	17%	3	5	16%	17	12	16	16	41	11	7	4	7	12 29%
③あまり思わない	71	58	70	49	30%	10	8	35%	11	8	19	10	26	9	3	4	6	9 21%
④全く思わない	81	99	89	82	43%	5			8	7	7	3	16	2	1	0	3	3 10%
計	220	216	208	178	100%	26	25	100%	49	49	66	53	128	40	24	23	30	38 100%
②将来、学校外で	F=\.=	マンエ	タッチ tin	オスかじ	の白コ	正統工部	リー肝の仏糸	B 21 +_1 \										
②付木、子校介で	1	(4)	(5)	7	割合	の現/百割	13)	割合	(3)	6	(<u>9</u>)	(10)	(II)	(12)	(14)	(15)	(16)	⑪ 割合
①強くそう思う	42	53	25	34	19%	14	9	45%	29	30	41	37	66	29	16	18	21	22 62%
②そう思う	98	93	114	77	46%	10	14	47%	19	18	23	16	52	11	7	5	8	16 35%
③あまり思わない	57	53	58	50	26%	1	1	4%	0	1	1	0	9	0	1	0	0	0 2%
<u>④全く思わない</u> 計	23	17 216	12 209	19 180	9% 100%	26	25	4%	1 49	0 49	66	53	130	0 40	24	23	0 29	0 1% 38 100%
ŘΙ	220	210	209	160	100%	20	20	100%	49	48	00	აა	130	40	24	23	29	36 100%
③高学年卒業後(プ	大学在学	時)、将3	を留学し:	たり、仕事	『で国際	的に活躍	星したい											
	1	4	(5)	7	割合	8	(13)	割合	3	6	9	(10)	11)	(12)	(14)	(15)	(16)	⑪ 割合
①強くそう思う	65	76	56	58	31%	16	13	57%	31	30	46	33	74	24	15	13	19	22 61%
②そう思う ③あまり思わない	70 57	60 56	80 59	67 40	34% 26%	7	10	33% 6%	15 2	15 4	13 5	16 3	43 9	13 3	8	8	9	12 30% 4 7%
④全く思わない	27	24	10		9%	1	1	4%	1	0	1	1	4	0	0	0	0	0 1%
計	219	216	205	_	100%	26	25		49	49	65	53	130	40	24	22	30	38 100%
										•								
④高学年(9-12年)				外研修(_		_	_	~	_		_	~ 1	
(1)24/7 = P =	1	4	5	7	割合	8	13	割合	3	6	9	10	11)	12	14	15	16	① 割合
①強くそう思う ②そう思う	51 19	34 13	36 12	19 7	17% 6%	14 2	9	45% 16%	25 5	18 2	26 3	19 7	44 16	17 4	11	10 2	11 2	14 39% 2 9%
③あまり思わない	21	9	21	19	9%	0	1	2%	1	5	2	4	19	1	2	1	1	3 8%
④全く思わない	128	160	140	134	68%	10	9	37%	18	23	35	22	49	18	7	10	16	19 44%
計	219	216	209	179	100%	26	25	100%	49	48	66	52	128	40	24	23	30	38 100%
@ A //			en 114 - 1- 1			45. 4	1=1 1 1											
⑤今後、高学年(9-	·12年)在 ①	学中に、	留学ま7	には海外の	研修(短 割合	期)へ参	加したい (13)		(3)	(6)	(9)	(10)	(1)	(12)	(1 4)	(15)	(16)	① 割合
①強くそう思う	21	40	61	67	23%	7	(13)	割合 25%	21	25	40	32	61	24	18	19	22	23 57%
②そう思う	39	57	81	52	28%	9		41%	10	7	16	13	39	12	5	3	5	10 24%
③あまり思わない	71	63	47	36	26%	5			12	7	6	4	19	2	0	0	3	4 11%
④全く思わない	88	54	19	_	22%	5		24%	6	10	4	4	11	2	1	1	0	1 8%
計	219	214	208	178	100%	26	25	100%	49	49	66	53	130	40	24	23	30	38 100%
⑥グローバルな課題	質わげご:	ネス 課題	の解決領	苦やアイ・	ディアに	関する大	- 今へ排1	能したい										
() T () () () () ()	1	(4)	(5)	7	割合	8	(13)	割合	(3)	6	9	(10)	(11)	(12)	(14)	(15)	(16)	⑪ 割合
①強くそう思う	12	20		15	7%	3	5	16%	13	13	23	16	26	16	12	10	13	12 31%
②そう思う	41	55	48	43	23%	9	7	31%	22	19	26	23	55	13	9	8	12	14 40%
③あまり思わない	88 79	77 64	103 48	82 40	42% 28%	11	12 1	45% 8%	13 1	15 2	17 0	12 1	40 8	9	3	5 0	3 2	12 26% 0 3%
④全く思わない計	220	216	209	180	100%	26	25	100%	49	49	66	52	129	40	24	23	30	38 100%
п	220	210	200	100	100/0	20	20	100/0	73	73	001	52	123	40	27]	20	50	30 100%
⑦コミュニケーショ:	シスキル	として英	語をもっ	と伸ばし	ていきた	い												
	1	4	(5)	7	割合	8	13	割合	3	6	9	10	11)	12)	(14)	15)	16)	⑪ 割合
①強くそう思う	125	149	142	115	65%	23	18	80%	43	44	58	47	110	37	21	21	28	34 89%
②そう思う ③あまり思わない	73 15	55 7	59 6	46 11	28% 5%	3 0	7	20% 0%	3 2	5 0	8	6	19 1	2	3	2	2	4 11% 0 1%
④全く思わない	7	4			2%	0			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 0%
計	220	215	209	179	100%	26	25	100%	48	49	66	53	130	39	24	23	30	38 100%
@																		
⑧本日の講演は大			· ·	(2)	호	(8)	12	함스	(2)	(6)	(9)	10	(1)	(19)	(1 4)	Ør.	(II)	
①強くそう思う	① 52	<u>4</u> 117	<u>5</u>	⑦ 45	割合 35%	22	(3) 25	割合 92%	3 40	39	<u>(9)</u> 52	10 46	107	① 37	19	①5 15	16) 23	① 割合 34 84%
②そう思う	125	78	110	103	51%		0		7	8	10	6	19	2	19	7	5	4 14%
③あまり思わない	36	15	21	23	12%	0	0	0%	0	0	0	0	3	0	2	1	1	0 1%
④全く思わない	6	2			2%				0	0	0	0	0	0	2	0	0	0 0%
計	219	212	207	179	100%	26	25	100%	47	47	62	52	129	39	24	23	29	38 100%
⑨本日の講演を聞	ハて国際	機関やる	その什事	に興味を	持てた													
STILL TO PROPERTY OF THE PROPE	1	4	5	7	割合	8	(13)	割合	3	6	9	10	11)	12)	(14)	(15)	16	⑪ 割合
①強くそう思う	39	71	53	40	25%	15	10	49%	28	31	44	33	72	31	13	13	17	17 61%
②そう思う	105	98		88	48%	10	9	37%	19	13	18	15	48	8	5	5	9	16 32%
③あまり思わない ④全く思わない	61	37 6		41 10	23%	1 0			1	2	1	4 0	8	0	3	5 0	3	4 6% 0 1%
④全く思わない 計	15 220	212		-	4%	26	25	100%	48	47	63	52	128	39	23	23	29	0 1% 37 100%
ŘΙ	220	212	209	1/9	100%	20	23	100%	46	4/	03	32	120	38	23	ZS	29	37 100%
⑩本日の講演を聞	<u>いて、</u> グロ					<u>きすること</u>	ができた	5										
	1	4	5	7	割合	8	13	割合	3	6	9	10	11)	12	14)	15)	16	⑪ 割合
①強くそう思う	36	67	44	36	22%	17	10	53%	27	26	37	30	70	29	13	15	17	24 59%
②そう思う ③あまり思わない	131 41	109 31	130 29	101 32	58% 16%	9		43% 4%	20 0	16 5	26 0	21 1	48 9	10 0	6 2	8	11 1	11 36% 3 4%
<u>③めまりぶわない</u> ④全く思わない	11	4			4%	0			0	0	0	0	0	0	2	0	0	0 0%
計	219			_	100%	26			47	47	63	52	127	39	23	23	29	38 100%

⑪本日の講演を聞いて、私自身と今日のテーマとの接点を感じる(イメージする)ことができた			
① 4 5 7 割合 8 3 割合 3 6 9 10 11 12	14 15	16 (1) 割合
①強くそう思う 23 47 27 18 14% 8 15 45% 18 15 26 27 44 21	11 10	14	21 43%
②そう思う 90 91 95 71 43% 16 8 47% 23 27 30 21 56 14	8 11	12	15 46%
③あまり思わない 84 57 75 69 35% 2 2 8% 5 4 5 4 21 3	2 2	2	2 11%
④全く思わない 17 13 10 17 7% 0 0 0 0 0 0 0 0 0	2 0	0	0 0%
計 214 208 207 175 100% 26 25 100% 46 46 61 52 121 38	23 23	28	38 100%
	•		
⑦自分がこの中から興味あるテーマを1つマーク:(1)貧困(2)人権(3)環境(4)外交			
① 4 5 7 割合 8 3 割合 3 6 9 10 11 12	14) 15)	16 (1	割合
貧困 73 71 61 46 31% 15 13 55% 20 19 24 20 50 19	8 8	11	10 38%
人権 38 36 38 31 18% 5 9 27% 9 6 11 13 37 7	4 6	4	9 21%
環境 58 66 66 53 30% 3 0 6% 17 15 14 14 17 9	5 5	12	9 23%
外交 42 40 42 45 21% 3 3 12% 2 9 17 5 26 4	7 4	3	10 17%
計 211 213 207 175 100% 26 25 100% 48 49 66 52 130 39	24 23	30	38 100%
①私は国際協力に興味がある			
	(4) (5)	16 (1	割合
①強くそう思う 41 62 52 36 23% 14 12 51% 32 36 42 34 73 27	21 14	21	19 64%
②そう思う 91 80 90 72 41% 8 8 31% 16 9 19 16 46 13	3 6	9	17 31%
③あまり思わない 66 58 57 51 28% 4 5 18% 0 4 3 2 10 0	0 3	0	2 5%
④全く思わない 21 14 9 20 8% 0 0 0% 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 0	0 0	0	0 0%
計 219 214 208 179 100% 26 25 100% 48 49 64 52 130 40	24 23	30	38 100%
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			
① 4 5 7 割合 8 3 6 9 10 11 12	(14) (15)	16 (1	
<u>①強くそう思う 29 42 35 26 16% 12 12 47% 32 30 44 33 64 26</u>		22	27 63%
②そう思う 88 77 86 70 39% 12 7 37% 14 16 16 18 43 13	3 5	7	9 29%
<u>③あまり思わない 68 76 69 61 33% 2 6 16% 3 3 4 2 21 1</u>	1 1	1	2 8%
④全く思わない 34 19 18 21 11% 0 0 0% 0 0 1 0 3 0	0 0	0	0 1%
計 219 214 208 178 100% 26 25 100% 49 49 65 53 131 40	23 23	30	38 100%
⑤玉川学園高学年はグローバルな学校というイメージがある			
	(14) (15)	16 (1	7 割合
<u>①強くそう思う 110 94 88 61 43% 21 17 75% 35 31 43 32 69 29</u>	19 17	21	28 64%
②そう思う 91 93 90 84 43% 4 7 22% 11 14 17 18 45 11	5 6	8	8 28%
③あまり思わない 12 20 24 22 9% 1 1 4% 2 3 4 2 13 0		1	2 5%
④全く思わない 7 8 7 13 4% 0 0 0% 1 1 2 1 4 0		0	0 2%
計 220 215 209 180 100% 26 25 100% 49 49 66 53 131 40	24 23	30	38 100%

グローバルキャリア講座の実施形態ごとにアンケート結果を分析すると、「ボランティアや研修への参加」「留学希望や国際的な活動に対する希望」「グローバルな課題やビジネス課題の解決策、アイディアに関する大会への挑戦」「講演内容への興味」「国際協力への興味」については大きな違いがみられる。グローバルキャリア講座に参加している生徒のこれらへの興味が高いことがわかるが、参加していない生徒の関心はそれほど高くないということも言える。一方、「コミュニケーションスキルとしての英語」に関しては、World Studies と TED 形式では「強く思う」「そう思う」が 100%であるとともに、学年ごとの形式でも 90%を超えることから、本校の多くの生徒の英語によるコミュニケーションへの関心は大変高いことが伺える。「スーパーグローバルハイスクールの諸活動への関心」においては、World Studies 形式では「強く思う」「そう思う」84%、TED 形式では 91%であるが、学年ごとの形式でみると、全校生徒の 55%が関心を示し、45%は関心がないことがわかる。一方、「玉川学園高学年はグローバルな学校というイメージ」は全校生徒の 80%以上がグローバルな学校であるというイメージを抱いていることがわかる。

②「Tamagawa Academy Super Global Leaders 48」認定制度への登録

SGH 諸活動への参加を促すため、「玉川学園スーパーグローバルリーダーズ 48」システムを構築した。SGH の関連活動への参加、語学資格の取得、各種コンテストへの挑戦、海外研修、ホームステイ受け入れなどに対してポイントを付与し、加算する。各個人のポイント管理はSGH 事務局で行い、生徒は普段学校連絡やメールにて使用している教育ネットワークシステムにより、累積ポイントや学校及び学年における順位を確認できるようにした。年度末には、ポイント上位獲得者に対して表彰を行い、将来的には推薦入試の資料としても使えるようにした。上位者層ではポイントを一つの指標にして SGH の諸活動にさらに積極的に参加する場面が

みられた。ポイント下位層においても、獲得したポイントや順位を確認する姿が見られ、SGH 活動の普及につながっていることが感じられた。SGH の諸活動に参加を促すという役割を十分に担っていたと考えられる。



玉川学園スーパーグローバルリーダーズ 48 活動の概要

文科省から本学への「スーパーグローバルハイスクール」指定に伴い、「グローバルな」諸活動への生徒参加を促すために各活動へポイントを付与し、在学中に貯めた獲得ポイントに応じて上位の生徒を「玉川学園スーパーグローバルリーダーズ 48」として認定、表彰する学内制度です。

	ポイント		ポイント
活動名	数	活動名	数
英語を使った各種コンテスト入賞	5	グローバルキャリア(GC)講座参加	3
模擬国連(海外開催・学内外練習会等参加)	5	中3~高3(9~12年)「模擬国連」履修	3
日本語論文コンクール入賞	5	英語エッセイコンテスト応募	3
プレゼンテーションコンテスト入賞	5	英語を使った各種コンテスト応募	3
生徒発表会金賞	5	生徒発表会奨励賞	3
英検準 1 級	5	英検準2級	3
TOEIC 785点 以上	5	TOEIC 385~549点	3
GTEC 650点 以上	5	GTEC 350~549点	3
TOEFL 87点 以上	5	TOEFL 40~56点	3
IELTS 5.5以上	5	JICA 高校生国際協力エッセイコンテスト応募	2
海外研修参加	4	日本国連協会「高校生のスピーチコンテスト」応募	2
課題テーマに関する国内研修参加	4	課題テーマに関するコンテスト応募	2
海外生へホームステイ提供	4	高3(12年)ワールド・スタディズ、WSE 履修	2
学内ホスト	4	自由研究グローバル・スタディズ	2
成果発表・プレゼンテーション実施	4	自由研究アドベンチャー研究	2
高1(10年)レシテーションコンテスト入賞	4	高 1(10 年) レシテーションコンテスト参加	2
生徒発表会銀賞受賞	4	高 2(11 年)「英会話」履修	2
高大連携企画参加	4	ラウンドスクエア実行委員	2
英検2級	4	玉川アドベンチャープログラム(tap)参加	1
TOEIC 550~784点	4	留学フェア参加	1
GTEC 550~649点	4	大使館イベント参加	1
TOEFL 57~86点	4		
ELTS 4.0~5.0	4		

^{*}玉川学園 SGH 課題研究名は「国際機関ヘキャリア選択する全人的リーダーの育成」です。

2014年11月

^{*}この活動は、玉川学園 SGH 課題研究内の基礎育成ステージとして位置づけられています。

^{*}グローバルキャリア (GC) 講座とは、国際機関の多くが扱っている主要5領域(貧困、人権、環境、外交、国際協力)の専門家を国内外の大学や国際機関から招いて講話を聞いて知的基盤を構築する連続講座です。

^{*}対象となる検定・資格は中 3~高 3 までの在学中全て、その他の記録は SGH 指定初年度の 2014 年度分からの 加算になります。

玉川学園スーパーグローバルリーダーズ48活動記録証明書



生 徒 名

学年・クラス 中学部 3年 組

検定・資格	機修・自由研究	海外研修	イベント	合 計	学年順位/在個數	学校内模位/在海敦
7	5	12	42	66	2/195	9/890



		,	J		14	74		00	4/100	3/030		
年度	検定	・資格	ポイント	年 度	履修·	自由研究	ポイント	年度	1	ベン	١	ポイント
2014	英検 24	聂	4	2014	模擬国	連	3	2014	たまがわ模擬国連	11日会議会日1	9	5
2014	英検 準	2級	3	2014	ラウント"ス	727	2	2014	GC講座12 寺田朝	子氏(国境なき	こともたち会別	9 3
9					3			2014	JUNECこども国達	環境会議がか	カア参加	3
					0			2014	GC講座14 駒澤大	学坪井七 :大学	生(ヒューマンライブ・ラ	-) 3
					ii.			2014	GC講座7 中3学年	全体 内海旬子	·氏(JCBL理事)	3
			=1					2014	GC講座9 通輝大I	£(JICA)		3
j j	ġ				3		ă I	2014	GC講座10 関鍵作	(写真家·JOCA))	3
								2014	C(講座11 1924·1	77=4氏(元こと	も氏士・ガーザチ	1-12-
									GC講座15 清水俊			3
i i					ĺ				GC講座16 太田美			(\$83)
1 5					7		E - 1		GC講座17 小原一			
					9			2014	たまがわ国際会製	第2014 添加		3
					J.			2014	GC講座6 林達也E	E (UNVAUNDE (2)	9-2関西学院大4	(E) 3
					î				玉川大学国際教育			1
1					7							
					ş							
									Ĭ.			
7					7							
年度		海外及	修・ホー	- ルステ	イ掲他	<	ポイント	9				
		College	I libe	****	A DE DA		4	4				2
		enian Sc	haal				4					
	セントフィリッ		1001				4					
2014	C2.17.177	7 MA										
							-	1				
9												
- 4	-						20 20					
-							-	4				
9 8								(8)				
2 3							4					
-							-	-				
-							-	9 9				
									V			1
9 3								-				
3								-				1
								3				
								_				

・対象となる検定・資格は中3~高3の在籍中全て、その他の配録は2014年度以降のものである。

上記の生徒は、本校スーパーグローバルハイスクール関連活動へ積極的に取り組んだことを証明する。 2015年3月11日

玉川学園中学部 学校長 小原 芳明

③12年公民科選択科目「ワールド・スタディーズ」「World Studies in English」

【参加者】

- ワールド・スタディーズ 24 名
- ·World Studies in English 7名
- ・ワールド・スタディーズ II 15名 (短期海外研修生 9名含、ブラジル、オーストラリア、デンマーク) 延べ 46名

【日時】

- ワールド・スタディーズ/World Studies in English
 4月~12月 4単位・火曜および金曜の3~4時限目 計75時限
- ・12 年生特別授業 ワールド・スタディーズⅡ 1月13日・19日・20日・26日・27日 計8時限
- 【場 所】高学年校舎 315/316 教室

【内 容】

- A. ワールド・スタディーズ/World Studies in English (WSE) ※12 年公民科選択科目 (4 単位) 学習目標
 - ○個人として人間の価値、他の人々の価値、社会的、文化的、家族的背景を尊重する心を育て る
 - ○多様な文化が存在する社会、相互依存的な世界で生活する一員として、諸問題が自分たちに 関わりのあることを知ろうとする積極性を養う。
 - ○他の文化の価値を発見し、それから学ぼうとする視点を重視する。
 - ○すすんで他の人々と特に異なる文化や状況にある人々の感情や視点を想像しようとする洞察力を訓練する。
 - ○地域・国家・国際レベルにおいて、真の民主主義の原理を尊重し、より公正な世界を実現しようとする行動力をつける。

学習テーマ

学習テー	<u>-v</u>
4月	WS とは何か 自分の意見を主張する メディアの中の「偏見」と「貧困」ーテレビ・ドキュメンタリー・ドラマ・CMの裏側 ・ 新聞「1日のニュース」 ・ 自分の中の偏見「イメージと認識・全体の絵」―開発途上国における貧困のイメージと現実 【出張授業】ニュース番組のつくられ方(テレビ朝日) ・ テレビ・雑誌・写真の中のステレオタイプ ・ 世界の現実と日本―世界子ども白書・水問題を考える ・ 貧困とは何か ・ 貧困の構造:南北問題
5月	社会における「偏見」と「暴力」 「偏見」が生み出すもの―ビデオ「5月の14日間」 偏見と社会的暴力 なぜテロは起きるのか?―貧困とテロの関係 偏見:男女性別役割分業を考える
6月	国際問題を考える 難民問題とは何か国連とは何か

	多文化社会と日本
_ =	■ 異文化体験
7月	■ 真の国際人とは?
	 (前期期末レポート)
8月	スタディーツアー(希望者)
	人権・平和・環境・人間関係
0 🗆	• 環境と開発 「持続可能な開発はあり得るのか」
9月	• 人権とは何か? 「子どもの権利条約」から
	• 人権が侵されるとき―差別 「青い目・茶色い目」
	Peace Conflict Resolution 平和的な対立の解決法
10 🗆	• 外なる環境と内なる環境
10月	わたしは誰か 「セルフエスティーム・ビルディング」
	グローバルキャリア講座【人権】【国際協力】「地雷被害者セム・ソワンタ」
	未来
	◆ 10年後の私
11月	● 映画に描かれた未来像
	(後期末レポート)
	人権・自分
12 月	
	グローバルキャリア講座「ヒューマンライブラリー」

成績評価

- ○各テーマはグループワークとそのディスカッション中心に行われた。
- ○新聞スクラップ学習は以下のテーマより選択し、4~11月末まで探究させた。

文化・紛争・民族・第三世界・人権・環境・国連・NGO活動・社会的弱者・マイノリティー・先住民・編集手帳・天声人語

使用副教材

- 「私と世界 6つのテーマと12の視点」綾部真雄編 メディア総研
- · 新聞記事·他

B. 12 年生特別授業「World Studies Ⅱ」

学習テーマ 人権・他者理解・未来・アイデンティティ

実施日 1月13日(火) Culture/Common tree/Gender/Road Map of Life/

1月19日(月) メディアの中の日本

1月20日(火) 未来 Future Wheels 2050/Alternative Futures /私の変化 /Future Bags

1月26日(月) 映像

1月27日(火) アイデンティティ Identity

【成果】概ね目標は達成

年間を通して、アクティブラーニングの形式で授業を行い、他者と自己の意見の多様性に対して"美"としてとらえられるような感覚を生徒が滋養出来るように配慮して授業を進めた。その結果、生徒はディスカッションで他者との意見を楽しむようになっていった。これは狭い教室内でのダイナミズムであるが、「人間関係は外交関係である」といわれるようにこの感覚は今後日本でも増加するとみられる外国人に対する人間関係を構築する際のグローバル人材としての資質のひとつと考えられる。また年に2回ほど、本校へ短期交換生として来校していた生徒とともに日本における人口増加策に関するグループワークとプレゼンテーションを行った。World Studies in English を履修しない生徒も一緒行ったため、英語を駆使しながらコミュニケーションをとっている姿もあちこちで見られた。

【人口問題】海外交流生とのアクティブラーニング風景。年間を通じて授業を一緒に受けた。海外交流生は、アメリカ、シンガポール、ドイツ、オーストラリア、ブラジル、デンマークから合計24名であった。

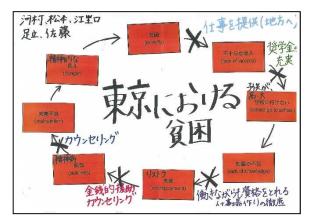


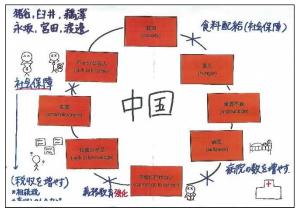


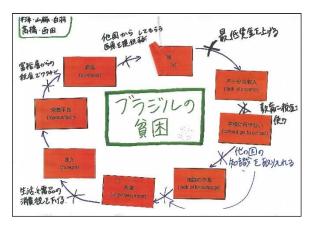


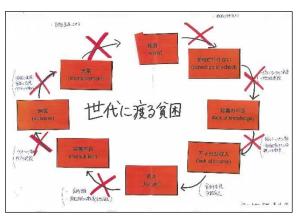


【貧困】グループワーク「貧困連鎖の打破」生徒作品例



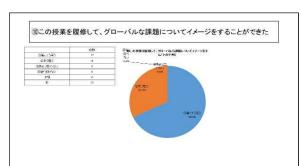




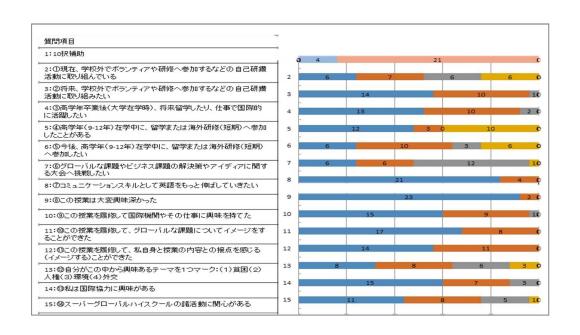


○年間フィードバック結果

ワールド・スタディーズの主要な目的のひとつは、様々な社会の課題を自分の問題として内在 化していくということである。自分の外にある問題-貧困問題、人権問題、環境問題、外交問題 -を自分の内なる内面とつなげる作業に欠かせないのが、グループワークや討論といったアクティブラーニング形式での授業である。以下のフィードバック結果をみる限り、この社会課題の内 在化という目的は年間の様々な授業を通して達成されたと思われる。特に結果⑩と結果⑪は、授 業履修者の全員が肯定的な回答をしていた。





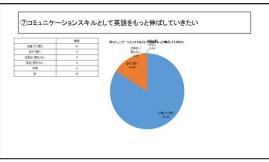


【課題】挑戦する力とコミュニケーション力の向上

2014年度最終授業時に実施したアンケート結果から2点指摘したい。

まず1点目は、自分の力を外部のコンテストや大会で試してみようという挑戦心の育成が必要であることだ。7月末に対して、ワールド・スタディーズ履修者はJICA高校生エッセイコンテスト、World Studies in English 履修者は関西学院大学主催英語エッセイコンテストへ全員エントリーを行った。ただ、それ以外に自分で他の外部のコンテストへ参加しようという者はみられなかった。理由としては、高3で受験を控えており夏期講習などの準備で忙殺されてしまう生徒が多いと考えられる。今後は計画的に年間を通したコンテスト等の情報を事前に提示し、参加を促すことを検討したい。





2点目は、英語によるコミュニケーション能力向上の必要性である。結果⑦にあるように履修者全員が英語をさらに伸ばしていきたいという意欲は示していた。しかし、海外交流生を交えたグループワークでは、どうしても語学が得意な生徒に発言回数が偏ってしまう傾向がみられた。無論なかには片言の英語でコミュニケーションをとろうとする生徒もみられたが、質疑が英語になるとうまく表現ができずにもどかしい思いをしていた。今後は、World Studies in English との接点も多くし、ツールとしての英語という感覚を生徒間に滋養したいと考えている。そのためには、カリキュラムの改善も継続的に行っていく必要があると感じた。

◆授業後のアンケート結果詳細は、⑤自由研究「グローバル・スタディーズ」に記載

④アフリカン・スタディーズ(現地研修)への参加

【参加者】生徒 13 名(11 年 男子 2 名、女子 2 名 10 年 女子 9 名)、引率者 3 名

【日 時】2014年7月25日(金)~8月4日(月)

【場 所】ボツワナ共和国、南アフリカ共和国

【内 容】

- ・バフルシュ・カルチュアル・ヴィレッジ(ボツワナ原住民の文化紹介施設)見学
- ・JICA ボツワナ支所での研修
- ・ムシャニー村での奉仕活動
- ・マルアプラ高校(ボツワナ)でのプレゼンテーション
- ・セイント・サイプリアン高校(南アフリカ)訪問とプレゼンテーション
- ・ タウンシップ (貧困層の人々が生活する区画) 訪問
- ・ディストリクト・シックスミュージアム(黒人差別政策による黒人居住区紹介施設)見学
- ・ロベン島(ネルソン・マンデラ氏が収容されていた刑務所跡)見学
- ・ボルダーズビーチ(ペンギン保護地区)見学

【成 果】

- ・ボツワナ共和国、南アフリカ共和国が抱える問題を生徒が認識することができた
- ・その問題解決への支援の有り方を考える機会を得た
- ・将来、海外支援に携わる職業を選択しようと考える生徒が増えた
- ・プレゼンテーションを現地で行うことで、そのスキルがアップした
- ・ペガサス祭(文化祭)での展示発表を通じて、問題や課題を多くの生徒と共有することができた

【課題】

・現地での短い滞在時間の中で、生徒の安全を考慮しつつ、自由に生徒が現地社会に入り込んで、研究・調査をすることのできる環境整備





- ◆研修後のアンケート結果詳細は、⑦-2「ドイツ・ゲーテ研修への参加 2」に記載
- ⑤自由研究「グローバル・スタディーズ」の履修

【参加者】11年生6名、10年生15名 計21名(全員女子)

【日 時】毎週金曜日、自由研究時 (14:25-15:40)

【場 所】314 教室、または MMRC

【内 容】

「グローバル・スタディーズ」は、貧困問題、人権問題、環境問題、リーダーシップ(外交)、 国際協力について探究し、ペガサス祭(文化祭)や生徒発表会、論文コンテストなどで成果を発 表する自由研究グループ。 関連する諸活動に参加することや、自ら活動を企画していくことなどを通し、積極的に自分たちの研究内容への理解を深めていく。また、外部に発信していくことを目標として、取り組み内容を深化させている。

(具体的な実施内容)

● 4 ~ 6 月

主に準備期間として、貧困問題、人権問題、環境問題、リーダーシップ(外交)、国際協力の 5分野において、それぞれが興味のある分野を探り、個人研究に向けて絞っていくために、インターネットや TED、DVD などを用いて調べ学習を行った。

↑ ~ 9 月

ペガサス祭(文化祭)で展示発表を行うことを目標に、展示内容についてアイディアを出し合い話し合いを積んだ。実際には、SGH についてまだ馴染みの少ない生徒たちにも分かりやすく伝えていくために、5分野に関連のあるクイズ形式を用意して展示発表を行った。【資料1】

●10~11月

ドイツ(ゲーテ校)の交換留学生を招待して、交流活動を実施。

具体的には、玉川学園内のキャンパスツアーを通して、お互いの文化や生活環境の違いを共有 し合う時間とした。【資料2】

・ミシェル・チクワニネさんによる講演会の補佐。

グローバルキャリア講座の一環として計画されていた講演会の一つを、グローバル・スタディーズのメンバーで司会・進行を担当した。日本語による司会と、英語による司会の両方を立てるなどの工夫を行った。【資料3】

● 1 2~1月

個人研究論文の提出に向けた、調べ学習と執筆作業。また、21名による共同研究・学習を視野に入れて、この間に2回の中間発表を行った。仲間の研究課題内容を把握し、その中間発表の情報から、自身の研究への関連性やヒントを得て、さらに研究内容を充実させていくねらいで行った。【資料 $4\cdot5$ 】

● 2 ~ 3 月

論文で提出した個人の研究分野について、プレゼンテーションを実施。 まずは、自由研究内での発表を目標とする。

【成 果】

多くの生徒が昨年度からの継続ではなく、新しく自由研究を選択していたため、全てが試験的で、探り探りの中行われていた。まず、幅広く5分野に触れ個人の興味をそのうちの一つに絞り込んでいくこと。また、5分野に関連のある講演会や外部講師と接する機会を持つことを目標として、取り組んできた。実際に活動が進んでいく中で、個人の研究内容および、共同研究内容のそれぞれに課題が見つかり、来年度に活かしていきたい。

【課題】

・個人研究における課題

5分野のうち、「貧困」と「人権」に注目を集めすぎ、偏りが大きい。原因として考えられることは、4~6月に実施してきた調べ学習内容で「貧困」に焦点をあてた情報が多く扱われすぎたこ

とや、11月に実施した講演会のテーマから改めて「貧困」や「人権」に興味を寄せられたためだったと考えられる。また、個人の研究内容も、3年間の継続を視野に入れるには、まだ断片的で一貫性に欠けていた。課題として、より長期目標を視野に入れた研究設定の指導や、情報収集力を身につけさせていきたいと考える。

・共同研究における課題

自由研究中の時間を、より効果的に実施していくためにも、共同研究を充実させていくことを計画に入れていきたいと考える。例えば、近い興味の分野で研究しているメンバーでグループを作り、実際にその分野で活躍をしている公共団体やNGO・NPOなどを訪問し、ボランティアや講演会に参加するなどである。こうした体験型学習やフィールドワークを通して、そこでの経験を個人研究に活かしているような取り組みを期待している。

【資料1】ペガサス祭(文化祭)展示発表の様子







【資料2】キャンパスツアーでドイツ (ゲーテ校) の交換留学生をおもてなし





【資料3】 ミッシェル・チクワニネさんによる講演会の補佐



【資料4】 個人研究、中間発表の様子



【資料5】 個人研究 論文テーマ一覧 (最終的なタイトルとは異なる場合があります)

学年 クラス	名前	研究テーマ	SGH 5 分野
10年 金剛	木所 弓乃	児童労働と教育水準は関係しているのか	貧困 国際協力
10年 金剛	小林 絵仁	子ども兵士と教育の改善	人権
10年 金剛	成瀬 栞瑠美	日本の海外支援	国際協力
10年 吉野	松本 爽佳	黒人差別はなくなるか	人権
10年 那智	田村 夢夏	識字率と国の発展	貧困
10年 雲仙	白井 杏奈	SNSによる貧困問題の改善	貧困
10年 雲仙	松山 友梨子	PM2.5の原因はドイツ技術を導入することによって解決できるのか	環境
10年 浅間	小貫 文萌	ストリートチルドレン:先進国と発展途上国の違い	貧困
10 年 浅間	濱﨑 麗奈	同時多発テロから現在に至るまでのアメリカ社会における影響	リーダーシップ
10年 霧島	佐藤 智奈津	フードバンクをインドで設立することはできるのか	貧困
10年 霧島	牧原 静香	児童権利条約と子ども兵士の減少	人権
10年 霧島	吉田 朱里	シエラレオネはなぜ世界最貧国と呼ばれるのか	貧困
10年 飛鳥	新井 陽南乃	私たちの購買活動と児童労働	貧困
10年 飛鳥	佐藤 悠稀乃	少子高齢化は貧困層に影響するのか	貧困
10年 飛鳥	保科 珠子	アメリカの人種差別撤廃運動は黒人差別を失くせたのか	人権
11 年 白馬	岡部 莉央	少年兵とストリートチルドレン	貧困、人権
11 年 蓼科	岩田 春乃	発展途上国の5歳児未満死亡率の低下を目指して	貧困、国際協力
11 年 蓼科	菊地原 里帆	モデルニスモ様式について	未定
11 年 蓼科	酒井 新菜	ユダヤ人はポーランドで大量虐殺される必要があったのか	人権
11 年 鈴鹿	大下 璃奈	世界の子どもたち	貧困、人権
11年 伊吹	木村 ゆかり	レジ袋ゼロは可能か	環境

◆「ワールド・スタディーズ」「グローバル・スタディーズ」「模擬国連」受講後アンケート結果

①現在、学校外でボランティアや研修へ参加するなどの自己研鑽活動に取り組んでいる

<u> </u>	7 1 7 1	<u>שיו ועיי</u>	· 9 /JH	7 9.66			1X / NILI / U C U	9
	模擬	模擬国連		割合	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド	割合
	前期	後期	小計	剖口	スタディズ	剖口	スタディズ	剖口
①強くそう思う	9	6	15	42%	6	32%	6	24%
② そう思う	3	3	6	17%	7	37%	7	28%
③ そう思わない	3	4	7	19%	3	16%	6	24%
④全くそう思わない	6	1	7	19%	3	16%	6	24%
計	21	15	36	100%	19	100%	25	100%

②将来、学校外でボランティアや研修へ参加するなどの自己研鑽活動に取り組んでみたい

	模擬 前期	国連 後期	小計	割合	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
①強くそう思う	12	9	21	58%	13	68%	14	56%
②そう思う	9	4	13	36%	4	21%	10	40%
③そう思わない	0	1	1	3%	2	11%	1	4%
④全くそう思わない	0	0	0	0%	0	0%	0	0%
計	21	15	36	100%	19	100%	25	100%

③高等部卒業後(大学在学)、将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい

受用・作用・水及(パ・) E 1 / パート が出 1 G / C / C E 子 で 日 / パーカ 企 G / C / C / C / C / C / C / C / C / C /											
	模擬	模擬国連		割合	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合			
	前期	後期	小計		スタディズ		スタディズ	리미			
①強くそう思う	16	12	28	78%	12	63%	13	52%			
② そう思う	2	3	5	14%	5	26%	10	40%			
③ そう思わない	3	0	3	8%	2	11%	2	8%			
④全くそう思わない	0	0	0	0%	0	0%	0	0%			
計	21	15	36	100%	19	100%	25	100%			

④高学年(9-12年)在学中に、留学または海外研修(短期)へ参加したことがある

	模擬	模擬国連		割合	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド	割合
	前期	後期	小計	剖口	スタディズ	剖口	スタディズ	剖口
①強くそう思う	10	6	16	44%	8	42%	12	48%
②そう思う	2	2	4	11%	2	11%	3	12%
③ そう思わない	1	2	3	8%	2	11%	0	0%
④全くそう思わない	8	5	13	36%	7	37%	10	40%
計	21	15	36	100%	19	100%	25	100%

⑤高学年(9-12年)在学中に、留学または海外研修(短期)へ参加したい

	模擬前期	国連 後期	小計	割合	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合			
①強くそう思う	15	9	24	67%	15	79%	6	24%			
② そう思う	2	2	4	11%	4	21%	10	40%			
③そう思わない	2	1	3	8%	0	0%	3	12%			
④全くそう思わない	2	3	5	14%	0	0%	6	24%			
計	21	15	36	100%	19	100%	25	100%			

⑥グローバルな課題やビジネス課題の解決策やアイディアに関する大会へ挑戦したい

	模擬 前期	国連 後期	小計	割合	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
①強くそう思う	7	8	15	42%	4	21%	6	24%
② そう思う	8	6	14	39%	8	42%	6	24%
③そう思わない	5	1	6	17%	5	26%	12	48%
④全くそう思わない	1	0	1	3%	2	11%	1	4%
計	21	15	36	100%	19	100%	25	100%

⑦コミュニケーションスキルとして英語をもっと伸ばしていきたい

<u> </u>									
	模擬	国連	小計	割合	グローバル・	割合	ワールド	割合	
	前期	後期	11,51	司口	スタディズ	司口	スタディズ	司口	
①強くそう思う	19	15	34	94%	17	89%	21	84%	
② そう思う	2	0	2	6%	2	11%	4	16%	
③ そう思わない	0	0	0	0%	0	0%	0	0%	
④全くそう思わない	0	0	0	0%	0	0%	0	0%	
計	21	15	36	100%	19	100%	25	100%	

⑧自分の担当国のリサーチに意欲的に取り組めた

	模擬	模擬国連		割合	前期	後期	伸び率
	前期	後期	小計	剖百	削捌	仮捌	押ひ卒
①強くそう思う	7	7	14	39%	71%	93%	0.00/
② そう思う	8	7	15	42%	/1% K		
③ そう思わない	6	0	6	17%	200/	7%	22%
④全くそう思わない	0	1	1	3%	29%	/ 70	
計	21	15	36	100%			

⑨議題の背景を理解↓ 論占に其づいて議論できた

(9)議題の背景を理解し、	論点に	基づい	て議論	できた			
	模擬	模擬国連		割合	at th	後期	伸び率
	前期	後期	小計	剖口	刊扮	1次 州	押い年
①強くそう思う	2	7	9	25%	620/	73%	11%
②そう思う	11	4	15	42%	62%	/3%	
③ そう思わない	8	3	11	31%	200/	27%	
④全くそう思わない	0	1	1	3%	38%		
計	21	15	36	100%			

⑩ペアまたはグループ内で協力して取り組めた

	模擬国連		小計	割合	前期	後 期	伸び率
	前期	後期	小門	吉口	削粉	1友别	押ひ半
①強くそう思う	6	11	17	47%	76%	93%	17%
② そう思う	10	3	13	36%	70%		
③ そう思わない	3	0	3	8%	0.40/	7%	
④全くそう思わない	2	1	3	8%	24%		
計	21	15	36	100%			

①合意に達するための方策を身につけることができた

	模擬	模擬国連		割合	前期	谷 期	伸び率
	前期	後期	小計	剖口	削粉	1友别	押ひ挙
①強くそう思う	3	5	8	22%	400/	87%	39%
②そう思う	7	8	15	42%	48%		
③ そう思わない	8	1	9	25%	E 20/	13%	
④全くそう思わない	3	1	4	11%	52%		
計	21	15	36	100%	,		

①問題解決への道筋を見出すことができた

	模擬	模擬国連		割合	前期	後期	伸び率
	前期	後期	小計	刮口	別が	1久州	甲の辛
①強くそう思う	4	5	9	25%	400/	93%	4.00/
②そう思う	6	9	15	42%	48%	93%	
③そう思わない	10	0	10	28%	F 00/	70/	46%
④全くそう思わない	1	1	2	6%	52%	7%	
計	21	15	36	100%			

③授業を受け関連分野への興味関心が深まった

	模擬	模擬国連		割合	前期	24 抽	伸び率
	前期	後期	小計	剖口	刊扮	1久州	押い手
①強くそう思う	7	11	18	50%	76%	93%	17%
② そう思う	9	3	12	33%	76%		
③ そう思わない	3	0	3	8%	0.40/	70/	1 / %
④全くそう思わない	2	1	3	8%	24%	7%	
計	21	15	36	100%			

(1)模擬国連の会議の仕組みを理解できた

世侯族国建の去議の任祖のを理解できた								
	模擬国連		小計	割合	前期	後 期	伸び率	
	前期	後期	וםיני	리ㅁ	אלווו או	区初	I# 0:44	
①強くそう思う	5	12	17	47%	81%	93%	12%	
② そう思う	12	2	14	39%	0170			
③ そう思わない	4	1	5	14%	1.00/	7%		
④全くそう思わない	0	0	0	0%	19%			
計	21	15	36	100%				

⑤英語での公式な文章を書けるようになった

<u> 助央語での公式な又早</u>	を書ける	ひように	なつに				
	模擬	模擬国連		全座	前期	後期	伸び率
	前期	後期	小計	리디	刊力力	反扮	押ひ年
①強くそう思う	4	7	11	31%	220/	80%	47%
②そう思う	3	5	8	22%	33%		
③ そう思わない	12	3	15	42%	67%	20%	
④全くそう思わない	2	0	2	6%			
計	21	15	36	100%			

⑧この活動は大変興味深かった

O C 07/11/2010/1927	C. 7 (1) (1) 2 1 C			
	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
①強くそう思う	14	74%	23	92%
②そう思う	5	26%	2	8%
③そう思わない	0	0%	0	0%
④全くそう思わない	0	0%	0	0%
計	19	100%	25	100%

⑨この活動に参加して国際機関やその仕事に興味を持てた

<u>りこの活動に参加し</u>	助に参加して国际機関やての仕事に興味を持てに							
	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合				
①強くそう思う	11	58%	15	60%				
②そう思う	7	37%	9	36%				
③ そう思わない	1	5%	1	4%				
④全くそう思わない	0	0%	0	0%				
計	19	100%	25	100%				

⑩この授業を履修して、グローバルな課題についてイメージ をすることができた

	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
①強くそう思う	12	63%	17	68%
②そう思う	6	32%	8	32%
③ そう思わない	1	5%	0	0%
④全くそう思わない	0	0%	0	0%
計	19	100%	25	100%

⑪この授業を履修して、私自身と授業の内容との接点を感じる(イメージする)ことができた

	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
①強くそう思う	4	21%	14	56%
②そう思う	12	63%	11	44%
③ そう思わない	3	16%	0	0%
④全くそう思わない	0	0%	0	0%
計	19	100%	25	100%

②自分がこの中から興味あるテーマを1つマーク: (1) 貧困(2) 人権(3) 環境(4) 外交

	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
貧困	7	37%	8	32%
人権	9	47%	8	32%
環境	3	16%	6	24%
環境 外交	0	0%	3	12%
計	19	100%	25	100%

③私は国際協力に興味がある

	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
①強くそう思う	14	74%	15	60%
②そう思う	4	21%	7	28%
③ そう思わない	0	0%	3	12%
④全くそう思わない	0	0%	0	0%
計	19	100%	25	100%

(4スーパーグローバルハイスクールの諸活動に関心がある)

	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
①強くそう思う	11	58%	11	44%
②そう思う	7	37%	8	32%
③ そう思わない	1	5%	5	20%
④全くそう思わない	0	0%	1	4%
計	19	100%	25	100%

⑤玉川学園高学年はグローバルな学校というイメージがある

	グローバル・ スタディズ	割合	ワールド スタディズ	割合
①強くそう思う	15	79%	17	68%
② そう思う	4	21%	7	28%
③ そう思わない	0	0%	1	4%
④全くそう思わない	0	0%	0	0%
計	19	100%	25	100%

「模擬国連」「グローバル・スタディーズ」「ワールド・スタディーズ」の選択授業において差はあまりないが、「グローバルな課題やビジネス課題の解決策やアイディアに関する大会への挑戦」の項目においては、「模擬国連」の授業を選択している生徒の意識が高い。これは前期から後期にかけてもややアップしていることから、授業による効果があると思われる。これら3つの授業を選択している生徒の英語への関心は100%である。「ワールド・スタディーズ」選択者の在学中の留学また海外研修への値が低いのは、12年生による選択授業のため、残りの在学期間が短いためであると推測される。

⑧以降は、アンケート項目が「模擬国連」と「ワールド・スタディーズ」「グローバル・スタディーズ」で異なる。「模擬国連」では前期終了後と後期終了後に生徒へのアンケートを実施しており、前期から後期にかけて「強くそう思う」と「そう思う」を足した割合が、「合意に達するための方策を身に付けることができた」では39%、「問題解決への道筋を見出すことができた」46%、「英語での公式な文章を書けるようになった」47%の項目で大幅に伸びていることがわかる。模擬国連の授業は、探究的な学習における重要な要素である問題解決や合意に達するための方策を大きく伸ばすことができることがわかった。英語での公式な文書においては、「そう思わない」「全くそう思わない」の層から「強くそう思う」と「そう思う」への転移がわかる。

「ワールド・スタディーズ」「グローバル・スタディーズ」の授業においては、「この授業を履修して、私自身と授業の内容との接点を感じる(イメージする)ことができた」の項目において、「グローバル・スタディーズ」の履修者のほうが高い傾向を示していることがわかる。これは、「グローバル・スタディーズ」の授業のほうが、自分で研究テーマをみつけることが関係していると思われる。また、どちらの授業においても、授業に対する興味、国際機関やグローバルな課題、国際協力への関心が高い。

⑥ラウンドスクエア玉川国際会議の企画・運営・参加

【参加者】ラウンドスクエア実行委員会、ラウンドスクエアに興味を持つ高学年生

【日 時】2014年7月17(木)~19日(土) 8:30~16:30

【場 所】玉川学園高学年校舎、心の教育実践センター(TAP センター)

【内 容】

日本で唯一のラウンドスクエア認定校としての活動がグローバル化に適応した人材を国際社会へ進出させるひとつのきっかけになってくれればと、実行委員が"Break out of our shell~Do whatever you fear most~"「自分の殼を破ろう」とテーマを設定。グループごとのディスカッション、野外活動、奉仕活動、世界を舞台に活躍している方のレクチャーなどを通じ、ラウンドスクエアの基本理念である、"I.D.E.A.L.S."(Internationalism,Democracy,Environment,Adventure,Leadership,Service)を実践した。

1日目

時間	場所	内容
8:30~	高学年 205	登校
9:00~	高学年 205	開会式
9:20~	高学年 205	アイスブレーキング①
10:00~	高学年 205	ゲストスピーカー① (玉川学園高学年 硤合宗隆先生)
11:00~		休憩
11:15~	高学年3階	Barazza①
11:50~		お昼休憩
13:00~	TAP センター	TAP
16:00		解散

2 日目

時間	場所	内容
8:30~	高学年多目的室	登校
8:50~	高学年多目的室	ビデオ鑑賞
9:20~	高学年多目的室	ゲストスピーカー② (子ども国連環境会議推進協会代表 井澤友郭様)
11:00~		休憩
11:15~	高学年3階	Barazza2
12:00~		お昼休憩
13:00~	高学年多目的室	ゲストスピーカー③ (2012年 IB卒業生 五十嵐淳哉様)
14:00~	高学年3階	奉仕活動
15:20~	高学年多目的室	Riika
16:00		解散

3 日目

時間	場所	内容
9:00~	高学年多目的室	登校
9:20~	高学年多目的室	アイスブレーキング②
9:20~	高学年多目的室	GAKKO Meets TAMAGAWA
12:00~		お昼休憩
13:00~	高学年多目的室	MUN(模擬国連)
15:30~	高学年多目的室	閉会式

・アイスブレーキング

アイスブレーキングでは自己紹介や簡単なゲームなどをして、初対面の人同士が出会ったときに、その緊張を解きほぐすこと。

「アイスブレイク」とは参加者の不安や緊張を氷にたとえ、その「硬い氷を溶かす」という意味があります。参加者を和ませてコミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り、そこに集まった目的の達成に積極的に関わってもらえるよう働きかけた。



・ゲストスピーカー①(玉川学園高学年 硤合宗隆先生)

私の「殼」の破り方:自分の殼を破るには、まず自分の殼について知ることが必要である。 自分の殼とは何か?幼少期、青年期人生を振り返り、成人期真っ盛りである硤合先生について の話を聞き、自分たちの将来設計の参考にした。

・Barazza(環境問題について話し合い、ポスターを作成)

地球上で問題となっている環境問題をいくつ知っていますか?地球温暖化、ゴミ問題、オゾン層破壊... 地球は数え切れないほどの環境問題を抱えているが、これらの問題は私たち「人間」によって引き起こされているものが多い。

今回は人間が引き起こしてしまった環境問題が少しでも 解決に向かうよう「今、自分達ができること」について話 し合った。



ーテーマー

地球温暖化 エネルギー問題 砂漠化 オゾン層破壊 森林伐採

ゴミ問題 水資源の危機 海洋汚染 食糧問題 人口増加と貧困

・TAP(玉川アドベンチャープログラム)

玉川学園は2005年に、国際規模の私立学校連盟「Round Square」に日本初のメンバー校として認定された。その理念は「IDEALS」と言われ、国際性、民主主義、環境、アドベンチャー、リーダーシップ、奉仕の6つが柱となっている。TAPは教育哲学者Kurt Hahn(クルト・ハーン)が提唱したアドベンチャー教育の哲学と手法を取り入れているが、玉川学園が「Round Square」に加盟できた背景には、このTAPが大きく貢献している。

今回は、会議のテーマ「Break out of our shell~Do whatever you fear most~」に沿って TAP を行いながら、何かに守られている安全な領域から一歩踏み出し、何事にも挑戦するという心を学び、挑戦することは自分の可能性を広げる第一歩になるということを学んだ。

・ゲストスピーカー②(子ども国連環境会議推進協会代表 井澤友郭様)

「持続可能性」という言葉を知っていますか?私たちは、急激に進化発展する時代に生きているが、参加した生徒たちが社会に出て活躍し始める 2020 年には、おそらく今とは異なる世界になっているだろう。何が変わり、何が残るのか?世界がどんな姿をして、自分たちはどんな仕事をしているのか話し合い、それぞれの考えを発表した。

・ゲストスピーカー③(2012 年玉川学園 IB クラス卒業生 五十嵐淳哉様)

好きなことは遠慮せず手を出すこと。そうすれば世界は永遠と広がり続ける。そんな感覚を つかめるところがラウンドスクエア。玉川学園での生活を振り返り、玉川での環境をどう活か すべきか、自分で目の前の世界を広げるにはどうしたらいいか、模索し続けた学園生活を振り 返り、そのときの経験が今の私にどのように影響しているのか、これからの将来設計の参考に して欲しい。

• 奉仕活動

Barazza チームで美化労作を行った。

晴天の場合	雨天の場合
高学年校舎 3 階	高学年校舎3階
高学年校舎 3 階	高学年校舎3階
高学年校舎 4 階	高学年校舎4階
高学年校舎から大学8号館前	高学年校舎4階

・MUN (Model United Nation 模擬国連)

模擬国連とは、世界中の学生によって行われている活動。この模擬国連では、参加者がそれぞれの国の大使となり、特定の議題について担当国の政策や歴史、他国との関係などに基づいて、実際の国連の会議と同じように議論と交渉を経て決議を採択する、いわば本物の国連会議のシミュレーションである。会議を通して国際問題への理解や相手と自分の利益を考えつつ自国の政策を主張した。



【成 果】

玉川国際会議のプログラムはラウンドスクエアの基本理念「IDEALS」をベースとしたアクティビティである。これらアクティビティを通じ、一人では乗り越えられないことも、大勢が集まればそれが勇気に変わる、自分の殻を破るためには、自分だけの存在だけでなく、周りのサポートが必要不可欠であるということを、参加した生徒たちが実感できる会議であった。また、生徒自ら率先して学年を越えてコミュニケーションを図り、仲を深めることができたことも大きな成果である。

【課題】

「ラウンドスクエア=国際交流」というイメージを持っている生徒が多いが、それ以外にも委員会内での意見交換、労作、模擬国連、ボランティアといった活動があり、これらは将来国際的に活躍していく上でとても大切な素質であるということを、もっと多くの生徒に理解してもらいたい。また、来年度は玉川学園高学年の生徒だけではなく、SGH 認定を受けている学校の生徒を招待し、アクティビティやディスカッションなどを通じて、生徒たちが何を感じ、何を学ぶのか、それを理解することで自身を成長させるきっかけの場としたい。

※ラウンドスクエア実行委員会 2014 年度年間行事

4月20日-28日 Round Square ジュニア会議(NZ・オークランド)

5月15日 海外留学生(稲江・総合科 OC)歓迎会

6月20日 海外留学生(アメリカ、シンガポール、台湾)歓迎会

7月1日 海外留学生(アメリカ、シンガポール、台湾)送別会

7月17日-19日 玉川国際会議

9月13日-14日 ペガサス祭(文化祭)

9月27日-10月5日 Round Square 国際会議(インド)

10月8日 海外留学生(ドイツ・ゲーテ校、台湾稲江校)歓迎会

10月15日 海外留学生の学外研修(浅草)案内

10月22日 海外留学生の学外研修(鎌倉)案内

10月24日 海外留学生(ドイツ・ゲーテ校、台湾稲江校)送別会

1月14日 海外留学生(オーストラリア、ボツワナ、ブラジル、カナダ、デンマーク)歓迎会

1月29日 海外留学生(オーストラリア、ボツワナ、ブラジル、カナダ、デンマーク)送別会

⑦-1 ドイツ・ゲーテ研修への参加 1

【参加者】6名(9年生女子3名 10年生男子1名 10年生女子1名 11年男子1名)

【日 時】【場 所】2014年9月4日~15日

	都市名	予定
9/4 (木)	(移動日)	羽田 → パリ
9/5 (金)	パリ	ヴェルサイユ宮殿見学など
9/6 (土)	パリ→フランクフルト	AM ルーブル美術館見学、パリ → フランクフルト
9/7 (日)		自由(各ホームステイ先)
9/8 (月)		歓迎会、EZB 発電所見学、フランクフルト市内案内
9/9 (火)	フランクフルト	ドイツ語講座、プレゼンテーション練習
9/10 (水)	- フランクラルト (ゲーテ校ホームステイ)	ドイツ語講座、プレゼンテーション、科学館見学
9/11 (木)		リューデスハイム見学
9/12 (金)		ドイツ語講座、研修修了書授与式
9/13 (土)		自由(各ホームステイ先)、さよならパーティー
9/14 (日)	(移動日)	フランクフルト → 東京
9/15 (月)	東京	成田到着後解散

【内 容】

1) パリ

ノートルダム寺院、ヴェルサイユ宮殿、ルーブル美術館などを見学した。世界的に有名な建築物や絵画に直に触れることで、歴史的教養と美術的造詣を深めることができた。国際機関で働くためには各国の歴史的教養を持ち合わせていることが必須となる。机上の学習だけで得られる知識には限りがあるため、現地にて歴史的事件の場所を訪問することで歴史的教養を深められたことは有意義であった。特に、ヴェルサイユ宮殿は、第一次大



戦の講和会議であるパリ講和会議の舞台となった場所である。この場に訪問することで、外交 について考えるよい機会となった。

2) フランクフルト

ゴミを燃やした際の熱を利用して発電する工場を見学し、エネルギーを効率よく使用する方法を学んだ。また、郊外のリューデスハイムの森の散策などを通じ、ドイツの森林保全に対する姿勢を知る良い機会となった。

9月10日には、日本で準備した各自の研究課題について、ゲーテ校生たちに英語でプレゼン

を行い質疑応答の時間を持った。英語でのプレゼンテーションと質疑応答を行うことで英語力の向上につながり、ドイツの生徒達がどのような考えを抱いているのかを知る有意義な時間となった。玉川学園の生徒の発表の後、ゲーテ校生たちがドイツの環境についてプレゼンテーションを行った。その後の質疑応答で活発な意見交換を行うことができ、ゲーテ校生との交流をはかれただけでなく、ドイツの環境について深く知ることができた。



【成 果】

パリとフランクフルトというヨーロッパを代表する2つの都市を訪れたことで、日本とフランス、日本とドイツの違いだけでなく、フランスとドイツの違いにも生徒達が気づけたことが大きな収穫であった。国際機関で勤務する際には多くの国の意見を調整することも多々ある。その際に多くの国の考えについて知っておく必要性があるため、今回の研修を通じてドイツとフランスの違いについて学べたことは、今後国際的な視点で物事を考える際に大いに役立つであろう。

また、ホームステイやプレゼンテーションを通じて、違った文化の人の意見を尊重しながらも自分の意見を主張する必要性を学べた研修であった。

【課題】

今回の研修は9年生(中学3年生)と10年生(高校1年生)が多く参加していたが、玉川学園では「倫理、政治・経済」を11年生(高校2年生)で履修するため、環境や国際問題、外交に対する理解が事前学習だけは不十分であった。校研修の参加者の中心をどの学年とするのか、検証する必要がある。

課題研究が全員個人研究であったため、研究内容の分析等が偏っていた面もあった。個人研究だけでなく、グループで課題研究に取り組むことも必要ではないかと感じた。その点も含め、今後の課題研究の取り組み方をどうしていくかを議論していかなければならないと感じた。

◆研修後のアンケート結果詳細は、⑦-2「ドイツ・ゲーテ研修への参加 2」に記載

⑦-2 ドイツ・ゲーテ研修への参加 2

【参加者】10名(9年女子1名、10年男子1名、11年男子3名、女子5名)

【日 時】【場 所】2015年1月4日~19日

日にち	都市名	予定
1/4(日)	(移動日)	成田→ベルリン (フランクフルト経由)
1/5(月)		チェックポイントチャーリー博物館、ブランデンブルグ門 近隣、ユダヤ博物館 など
1/6(火)	ベルリン	AM ポツダム(サンスーシ宮殿)見学 PM 国会・緑の党訪問 Peter Meiwald 環境問題担当議員のレクチャー
1/7(水)	ベルリン→ジュネーブ	AM 博物館島見学 ベルリン→ジュネーブ(フランクフルト経由)
1/8(木)	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	AM 国連難民高等弁務官事務所 UNHCR 訪問 PM 国連ヨーロッパ本部訪問
1/9(金)	ジュネーブ	ローザンヌ IOC 訪問
$1/10(\pm)$		国際赤十字本部訪問、アクティビティ
1/11(日)	(移動日)	ジュネーブ→フランクフルト
1/12(月)		オリエンテーション
1/13(火)		ドイツ語講座、科学館見学、プレゼンテーション練習
1/14(水)	フランクフルト (ゲーテ校	環境保護セミナーに参加 プレゼンテーション、ゲーテハウス見学
1/15(木)	ホームステイ)	ハイデルベルグ見学
1/16(金)		EZB 発電所見学、さよならパーティー
1/17(土)		自由(各ホームステイ先)
1/18(日)	(移動日)	フランクフルト→東京
1/19(月)	東京	成田到着後解散

【内 容】

「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」という研究開発目的実践のため、例年 実施しているゲーテ校研修と併せて、国際機関を訪問するプログラムを実施した。

・事前学習(出発まで)

内容	時間
課題研究 テーマ決め・準備計画	1.5 時間
課題研究 プレゼンテーション準備	各自
パワーポイントと原稿の作成	台日
課題研究 プレゼンテーション練習	1 時間
EFL 教員による英語の発音チェック等	I 44月1
課題研究 プレゼンテーションリハーサル	2 時間
EFL 教員他による発音チェックと質疑応答の練習	∠ 时间
ドイツ語講座・ドイツの生活について	2 時間
TAP・海外研修の心得 他	2 時間

【訪問した主な施設と内容】

・ベルリン壁の跡、ユダヤ博物館他(ベルリン)、ブランデルブルグ門、ユダヤ人のための記念碑、ベルリンの壁跡、ゲシュタポの本部跡資料館、チェックポイントチャーリー、ノイエ・

ヴァッへ(戦争と暴力支配の犠牲者のための国立中央追悼施設)、ベーベル広場(焚書事件記念碑)、Otto Weidt Blindenwerkstatt、ユダヤ博物館など様々な施設をまわり、ユダヤ人迫害についてと、ベルリンの壁の歴史について学び、人権問題などについて考える機会となった。

・国会、緑の党訪問(ベルリン)

国会の施設見学のあと、緑の党の環境問題担当議員からドイツの環境問題についての取り組みのレクチャーを受け、生徒たちの質問に答えてもらった。福島の原発事故がドイツの原発にも影響を及ぼしたことや、プラスチックへの取り組みについてなどのレクチャーを受け、生徒は、ドイツのエネルギー問題について質問をした。

・世界遺産見学(ベルリン) サンスーシ宮殿や、博物館島のペルガモン博物館を見学した。



国連難民高等弁務官事務所 UNHCR や国連ヨーロッパ本部を訪問した。UNHCR では、取り組みについて説明していただき、現地スタッフとしての経験がある方と直接話をすることもできた。どのような人材が必要とされているのか、支援対象となるのはいつまでなのか等、活発に質問が出た。国連では、施設見学をした。実際の施設を目にして、世界で起きていることをより身近に感じ、刺激を受けた生徒が多かった。

・IOC 訪問(ローザンヌ)

オリンピック博物館を訪問し、スポーツを通しての平和への取り 組みについて学んだ。

・国際赤十字訪問 (ジュネーブ)

赤十字の歴史や旗の意味などについて施設見学をした後、ロール プレイなどのアクティビティを通して、争いが起きたときに必要な 支援やルールなどについて考えた。

・環境プログラム(フランクフルト) 環境セミナーに参加し、発電所の見学をして、効率よくエネルギーを使うための工夫を学んだ。ドイツの環境への取り組みを知る機会となった。

・課題研究についての発表 (ゲーテ校)

日本で準備した各自の課題研究について、ゲーテ校の 生徒たちに英語でプレゼンをして、質疑応答の時間を持った。日本の現状について発表後、ゲーテ校の生徒にドイツの現状について質問をしたところ、活発な意見が出た。 英語で質疑応答ができ、同年代の生徒がどのような考えを持っているかを直接知る良い機会となった。











【課題研究テーマ一覧】各テーマ2名で担当

- エネルギー問題について
 - ・環境問題について
 - 文化遺産の環境問題と対策
- 「車」という点からみる環境保全について
- ・発展途上国に対して行っている国際協力

• 事後学習(帰国後)

<u> </u>		
	内容	時間
課題研究	まとめ (研修で学んだことの付け足し)	各自
課題研究	最終発表	

【成 果】

前半1週間は国際機関を多く訪れ、世界の取り組みを学ぶ良い機会となった。元々、このような職業に興味のある生徒にとっては、どのような人材が世界で求められているのか、より目標が明確になっただろうし、まだ将来の夢が漠然としている生徒にとっては、いまの自分にできることを考える良い刺激になった。各施設見学やホームステイを通し、まずは、語学力を向上させることが必要であることも再認識した。課題研究について、英語で質問をし、ドイツの高校生の意見を聞けたことも、大きな収穫となった。

【課題】

課題研究について、プレゼンテーションの準備をする時間が不足していた。日ごろからテーマを持って何かの活動に取り組んでいる生徒が発表するなら良いが、この研修のために新たにテーマを設定し、調べるところから始めるには、準備時間がもっと必要であり、課題研究の進め方については、改善の余地がある。また、多くの国際機関を訪れたが、事前学習が不足していた。訪問する場所がなかなか確定しなかったことも原因の一つであるが、来年度以降は、各自の課題研究と共に、訪問場所の事前学習も充実させるよう、早めの計画が必要である。

◆「アフリカン・スタディーズ(現地研修)」「ドイツ・ゲーテ研修」研修後アンケート結果 「研修への参加は有意義なものだった」については、「強くそう思う」「そう思う」の合計がいず れの研修も100%と満足度が高いことがわかる。

「国際機関の現場での仕事に具体的なイメージを持つことができた」「グローバルな課題に対する具体的なイメージを持つことができた」では、1回目のドイツ・ゲーテ研修では、「強くそう思う」が0%で、「あまり思わない」が33%を占める。2回目ドイツ・ゲーテ研修では、これらの数値が上がることから、研修内容の見直しが効果的に働いていると思われる。一方、「研修の前後で自分の価値観に変化があった」においては、アフリカ研修、1回目ドイツ研修では、「強くそう思う」「そう思う」の合計が100%を占めるのに対し、2回目のドイツ・ゲーテ研修参加生徒のうち2名が「あまり思わない」を選択している。

「自分がさらに追求したいテーマを1つマーク」の問いに対しては、アフリカ研修が「①貧困 ② 人権」、ドイツ・ゲーテ研修が「③環境 ④外交」を選択する傾向が強い。

①現在、学校外でボランティアや研修へ参加するなどの自己研鑽活動に取り組んでいる

	African	African Studies Germany-Goethe1 Germany-Goethe2		合計				
①強くそう思う	1	8%	2	33%	2	20%	5	17%
②そう思う	7	54%	3	50%	2	20%	12	41%
③あまり思わない	2	15%	1	17%	4	40%	7	24%
④全く思わない	3	23%	0	0%	2	20%	5	17%
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%

②将来、学校外でボランティアや研修へ参加するなどの自己研鑽活動に取り組みたい

	African	African Studies		Germany-Goethe1		Germany-Goethe2		計		
①強くそう思う	8	62%	2	33%	5	50%	15	52%		
②そう思う	5	38%	3	50%	4	40%	12	41%		
③あまり思わない	0	0%	1	17%	1	10%	2	7%		
④全く思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%		
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%		

③高学年卒業後(大学在学時)、将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい

			, o.c., (E) (E) (F) (F)					
	African	African Studies Germany-Goethe1 Germany-Goethe2		合計				
①強くそう思う	7	54%	5	83%	6	60%	18	62%
②そう思う	5	38%	0	0%	2	20%	7	24%
③あまり思わない	1	8%	1	17%	2	20%	4	14%
④全く思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%

④高学年(9-12年)在学中に、留学または海外研修(短期)へ参加したことがある

OH: THE TELL THE CONTROL OF THE CONT										
	African Studies		Germany-Goethe1		Germany-Goethe2		合計			
①強くそう思う	11	85%	4	67%	6	60%	21	72%		
②そう思う	1	8%	1	17%	3	30%	5	17%		
③あまり思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%		
④全く思わない	1	8%	1	17%	1	10%	3	10%		
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%		

⑤今後、高学年(9-12年)在学中に、留学または海外研修(短期)へ参加したい

<u> </u>								
	African	Studies	Germany	-Goethe1	Germany-Goethe2		合計	
①強くそう思う	9	69%	5	83%	5	50%	19	66%
② そう思う	3	23%	0	0%	5	50%	8	28%
③あまり思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
④全く思わない	1	8%	1	17%	0	0%	2	7%
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%

⑥グローバルな課題やビジネス課題の解決策やアイディアに関する大会へ挑戦したい

	African	Studies	Germany	-Goethe1	Germany	-Goethe2	合	計
①強くそう思う	4	31%	1	17%	2	20%	7	24%
②そう思う	7	54%	3	50%	4	40%	14	48%
③あまり思わない	2	15%	2	33%	3	30%	7	24%
④全く思わない	0	0%	0	0%	1	10%	1	3%
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%

⑦コミュニケーションスキルとして英語をもっと伸ばしていきたい

VICE CAME OF CHILD CO CAME										
	African	African Studies		Germany-Goethe1		Germany-Goethe2		合計		
①強くそう思う	13	100%	6	100%	9	90%	28	97%		
②そう思う	0	0%	0	0%	1	10%	1	3%		
③あまり思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%		
④全く思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%		
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%		

⑧研修への参加は有意義なものだった

	African	Studies	Germany	-Goethe1	Germany	-Goethe2	合計		
①強くそう思う	12	92%	5	83%	10	100%	27	93%	
②そう思う	1	8%	1	17%	0	0%	2	7%	
③あまり思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	
④全く思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%	

⑨研修の前後で自分の価値観に変化があった

O WILL AND IN CHAIL	7 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1											
	African	Studies	Germany	-Goethe1	Germany	-Goethe2	合計					
①強くそう思う	11	85%	3	50%	7	70%	21	72%				
② そう思う	2	15%	3	50%	1	10%	6	21%				
③あまり思わない	0	0%	0	0%	2	20%	2	7%				
④全く思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%				
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%				

⑩国際機関、NGOでの仕事に興味を持っている

	African	African Studies		-Goethe1	Germany	-Goethe2	合計		
①強くそう思う	4	31%	2	33%	4	40%	10	34%	
②そう思う	4	31%	2	33%	3	30%	9	31%	
③あまり思わない	5	38%	2	33%	3	30%	10	34%	
④全く思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%	

①国際機関の現場での仕事に具体的なイメージを持つことができた

O HIM MAIN 30 M 4 4 1 1 1 2 3 1 1 1 1 2 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1											
	African	Studies	Germany	-Goethe1	Germany	-Goethe2	合計				
①強くそう思う	6	46%	0	0%	6	60%	12	41%			
②そう思う	6	46%	4	67%	3	30%	13	45%			
③あまり思わない	1	8%	2	33%	1	10%	4	14%			
④全く思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%			
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%			

⑩グローバルな課題に対する具体的なイメージを持つことができた

	African	Studies	Germany	-Goethe1	Germany	-Goethe2	合計		
①強くそう思う	6	46%	0	0%	4	40%	10	34%	
②そう思う	7	54%	4	67%	6	60%	17	59%	
③あまり思わない	0	0%	2	33%	0	0%	2	7%	
④全く思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%	

③研修への参加が進路選択に影響を与えた

	African	Studies	Germany-	-Goethe1	Germany	-Goethe2	合計		
①強くそう思う	6	46%	2	33%	4	40%	12	41%	
② そう思う	4	31%	2	33%	4	40%	10	34%	
③あまり思わない	3	23%	1	17%	2	20%	6	21%	
④全く思わない	0	0%	1	17%	0	0%	1	3%	
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%	

④他の海外研修にまた参加したいと思う

	African	Studies	Germany	-Goethe1	Germany-	-Goethe2	合計				
①強くそう思う	11	85%	5	83%	8	80%	24	83%			
②そう思う	2	15%	0	0%	2	20%	4	14%			
③あまり思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%			
④全く思わない	0	0%	1	17%	0	0%	1	3%			
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%			

⑤自分がさらに追求したいテーマを1つマーク: ①貧困 ②人権 ③環境 ④外交

回日カルでのに但不した	U.) K	<u>マーフマ</u>	フ・①5	<u> (四 で)</u>	VIE シュ	永	<u>/ ドス</u>		
	African	Studies	Germany	-Goethe1	Germany	-Goethe2	合計		
貧困	10	77%	0	0%	0	0%	10	34%	
人権	2	15%	0	0%	1	10%	3	10%	
環境	1	8%	2	33%	7	70%	10	34%	
外交	0	0%	4	67%	2	20%	6	21%	
計	13	100%	6	100%	10	100%	29	100%	

⑧模擬国連の実践を通した外交・国際協力の理解

【参加者】授業:21名 2月大会:大使135名、15校参加

【日 時】授業:毎週木曜日7時間目 2月大会:2月8日(日)

【場 所】授業:MMRCシアター 2月大会:学園講堂視聴覚教室

【内 容】

授業:模擬国連の会議の流れの理解・議題のリサーチの仕方・議題の内容理解・スピーチ 原稿の作り方・交渉の練習・成果文書の書き方

2月大会:運営委員会の設置・役割分担・議題解説書(BG)作成・広報活動・ポジションペーパー作成・ポリシーペーパー作成・議長練習・大会実施・振り返り

【成 果】

授業:「国連安保理改革」と「核軍縮・非拡散・非核兵器地帯」を議題としてリサーチ・ 政策立案・交渉・投票に至る会議の流れを経験させた。リサーチの仕方や英語での スピーチカ、交渉の進め方等に進歩が見られた。それを通して、国際問題の重要性 に触れ、国際協力のあり方を考えることができ、国際機関でのキャリア選択ができ る素地を培うことができた。

2月大会:運営委員会で役割を設定し、仕事を割り振り、会議実施までの計画・立案・準備・ 当日の運営・後片付けまで、生徒主導で実施でき、主体性や自主性、判断力、実行 力を培うことができた。

【課題】

授業: テキストがないので、教材化すること。特にアンモデレートコーカスの際の交渉を 高校生のレベルでどう運べばよいのかの方法論を検討し、教材として作る必要があ る。また、課題を設定したあと、問題の概略や構造を理解させるのによいプログラ ムを考える必要がある。授業の中で、議長練習はできるが、会議監督を育てるには どうしたらよいか検討する必要がある。特に会議が紛糾し、論点整理を行う必要が ある場合を想定し、議長や会議監督にその練習をしておく必要がある。

2月大会:初めての大使、議長、会議監督、セクレタリーの生徒も多く見受けられたが、立て た計画通りに運ばないケースがほとんどだった。計画を立てる際の見通し、計画を 予定通り実施するための工夫、適切な議題設定等を考える必要がある。

- ◆授業後のアンケート結果は、⑤自由研究「グローバル・スタディーズ」に記載
- ⑨A.学内 LAN による広報

玉川学園では、CHaT Net(Children, Homes and Teachers Network)という、児童・生徒と家庭(保護者)と教職員(学校)が参加できる教育コンピュータ・ネットワークがある。そのネットワークを用い、グローバルキャリア講座や研修旅行、Webページオープンのお知らせや SGL48 ポイント制度など SGH に関する告知をおこなった。専用メールアドレスも設け、生徒や保護者からの質問にメールでも対応できるようにした。

●配信メール例

メールタイトル	発信日付
【募集】グローバルユースキャンプ「Camp for Global Society」	2014/06/12 18:15
【再募集】高学年ドイツ・ゲーテ校交換プログラム募集案内	2014/06/19 12:09
【SGH】立教大学×玉川学園Super Global Summer Course	2014/07/03 12:56
Re:【SGH】立教大学×玉川学園Super Global Summer Course	2014/07/14 18:39
SGH Webベージオーブンのお知らせ	2014/09/02 14:00
【SGH】グローバルキャリア講座3のお知らせ	2014/09/22 13:54
【SGH】「玉川スーパーグローバルリーダーズ48」システムについて	2014/09/25 16:09
【SGH】グローバルキャリア講座2014の講師予定	2014/09/25 16:22
伊藤先生の講演会&留学オータムフェアのご案内	2014/10/07 17:21
SGL48 ポイント確認方法	2014/10/20 20:03
【SGH】国内研修参加生徒(10-12年)募集のお知らせ	2014/11/17 15:15
SGH国内研修 関西学院大学	2014/11/29 19:16
【SGH】外部評価機関による保護者・生徒アンケートへのご協力のお願い	2015/01/07 9:24
【SGH】グローバルキャリア講座 1~2月講師予定追加	2015/01/09 11:33
SGH企画「玉川模擬国連1日会議」の参観のご案内	2015/01/27 18:56

⑩B.日本語および英文ホームページの作成による広報

日本語と英文による SGH 専用のホームページを 9 月に立ち上げた。



ホームページの構成を以下のようにし、SGH 諸活動ごとに情報を刷新し、SGH の広報に努めた。

<About>この取り組みについて/SGHとは?/プロジェクト全体像/生徒履修モデル

<Programs>グローバルキャリア講座/ワールド・スタディーズ/アフリカン・スタディーズ/グローバル・スタディーズ/たまがわ国際会議/模擬国連・MUN部/ドイツ・ゲーテ高校訪問/ELF/玉川アドベンチャープログラム

<Special>国際交流 MAP/SGH リーフレット

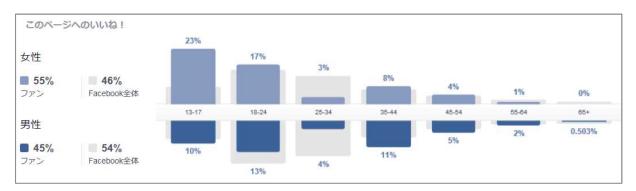
生徒や保護者にとって、より情報にアクセスしやすいように、ホームページの作成とともに SGH 専用の Facebook も立ち上げた。次のグラフのようなアクセス推移がみられた。「いいね」を押すアカウント名からは、SGH 活動に特に積極的な生徒のアクセスが多いことが推測された。

SGH Web ページ http://SGH.tamagawa.ed.jp/

SGH Facebook https://www.facebook.com/tamagawaSGH

◆Facebook アクセス分析





まだ、少数ではあるが、海外からのアクセスもみられる。

1	ファン	市区町村	ファン	言語	ファン
日本	180	Kanagawa Yokohama-shi	47	日本語	145
アメリカ合衆国	11	Tokyo世田谷区	27	英語(米国)	36
イギリス	3	Tokyo即由市	18	英語(イギリス)	12
スリラシカ	2	KanagawaSagamihara-shi	9	ja_KS	5
台湾	-1	Tokyo渋谷区	6	繁体中国語(台灣)	. 1
カナダ	1	Tokyo東京都新宿区	5		
オーストラリア	1	Tokyo八王子市	:5		
		KanagawaKawasaki-shi	5		
		TokyoMinato-ku	:4		
		TokyoMeguro-ku	3		

また、校舎3階の生徒ラウンジにSGH 掲示板を設置し、今年度のグローバルキャリア講座の講師の先生方一覧およびSGH に関する研究会や研修のお知らせなどを掲示するスペースを設けた。中央にあるディスプレイでは、講話実施のお知らせや研修参加者募集のお知らせを流して活用した。







⑪C.研修参加生徒による生徒発表会や展示発表の実施

【参加者】①ペガサス祭(文化祭)での生徒発表会:のべ200名、②ゲーテ校研修報告会:のべ80名、③「ジュネーブ国際機関訪問・ドイツ・ゲーテ校研修」展示発表:のべ665名

【日 時】①平成 26 年 9 月 13 日 (土)、14 日 (日)、②平成 26 年 10 月 9 日 (木)、16 日 (木) ③平成 27 年 3 月 10 日 (火)

【場 所】①玉川学園高等部校舎302教室 ②玉川学園高等部校舎205教室 ③アトリウム 【内 容】

①文化祭でのポスターセッション及び、生徒発表





②ゲーテ校研修についての振り返りと、研修参加が研修中にみつけた課題についての発表、及びその発表に対する質疑応答





⑤生徒発表会における海外研修「ジュネーブ国際機関訪問・ドイツ・ゲーテ校研修」の展示発表、および玉川学園スーパーグローバルリーダーズ 48 の結果発表・表彰の様子







【成 果】

実際に現地で体験したことを報告することにより、自らの問題点をより深く理解するだけでなく明確にすることができた。また、質疑応答により今後の課題を発見でき大きな収穫であった。特にゲーテ校研修での報告会では、ゲーテ校の生徒も報告を視聴し、質疑応答を行ったため日本人の考えのみならず、ドイツ人の考え方を再認識することができ、改めて国際理解における「他者理解」の必要性を痛感した。

【課題】

研修から報告会までの日にちが少なかったため、準備不足の感があったことは否めない。お 互いの報告を事前に聞き合い意見を出し合う時間を設けるなり、もっと準備に時間を掛けるべ きであり、今後の大きな課題である。研修先での発表にプラスアルファをしての報告であった ため、生徒は研修先でなかなか報告会のための資料収集(写真等)などに時間が割けなかった のも課題である。

◆課題外研究について

1. 評価/検証

- A. 生徒・教師・保護者の意識変化調査
- B. 国際教育 NGO サスティナビリティー・フロンティアーズによる効果測定および定期評価

2015 年 1 月 13~15 日の 3 日間、イギリスの教育コンサルタント、サステイナビリティ・フロンティアーズによる訪問インタビューが行われた。同団体のリサーチディレクターである香川文代氏が学校に滞在し、学園長をはじめとした教職員、生徒へのインタビュー調査、記述アンケート回収が行われた。その後、アンケートの集計および集めたデータの分析が報告書という形で 2 月 24 日に提出された。英文報告書の詳細は P66~参照。

C. SGH 運営指導委員会 (ハイパネルチーム) の設置 (年2回実施)

◆第1回 ハイパネルミーティング 2014年7月9日

ハイパネル会議は、玉川学園が掲げる SGH テーマを推進するにあたり、グローバルな視野で SGH プログラム全体に関して第三者的に助言をしてもらう教育の国際的な専門家である。今回 の第1回目の会議では、以下のような活発な意見交換が行われた。まず、藤樫部長の挨拶に続き、硤合教諭による SGH プログラムの説明および本学の SGH プログラムが説明された。その後パネルメンバーによる意見交換が行われ以下のような意見をいただいた。

出席者 池田伸子先生 立教大学教授 異文化コミュニケーション学部

松田 文先生 アリゾナ州立大学准教授

齋藤珠恵先生 一般財団法人青少年国際交流センター 交流事業部副部長

香川文代先生 リサーチディレクター Sustainability Frontiers

学内 藤樫・硤合・小林香・小野口・中島・濱野・登本

概要

●研究開発評価報告

報告書は、国内で読んでもらうためには言語を日本語に、しかし世界で読んでもらいたいのならば英語でなければならないという指摘を受け、グローバルな学園展開を目指す本学の報告書は2言語の報告書とすることになった。

●履修に対するイメージ

本学では「貧困・人権・環境・リーダーシップ・国際協力」の5テーマに絞ったが、例えばAIDS 問題などは、複数のテーマにわたる問題なのでテーマとして分けて考えるのは難しいのではないか。テーマの変更も視野に入れながら柔軟な対応が必要となる。

- ●Tamagawa Super Global Leaders 48 ポイントシステムについては、5年間通じて貯められるポイントとして、SGH 行事に参加した生徒に与えられるものだが、Web 上に公表するなど全員の目にとまるような工夫を行い、広報に載せるなどリワード感、アワード感を出せば、生徒の良いモチベーションとなるだろう。
- ●模擬国連を開催するときに、他校の生徒を招待するとともに、他国の生徒も呼び、会議参加 という形の交流を持つのも良い経験となるであろう。
- ●立教大学との連携が進められているのは素晴らしい。
- ●海外に行くことだけが良いことではなく、訪問国で文化交流できるような日本人としての資

質(ジャパノロジー的な)を身に着けることも大切である。

- ●海外交流先、また IB 教師も世界各地から呼ぶような多様性を持つことも重要である。また毎日の教育活動でも海外交流と同じような、多様性を持つ教育を目指したい。
- ●国際機関のみで働く人材育成は、人材流出に繋がりかねないとも考えられる。国際機関でも 日本でもどちらでも活躍できるような人材育成を目指すことにすれば、優秀な人材の流出は軽減される。
- ●教員養成も不可欠であり、またジャパノロジー等もプログラムに入れていくべきである。ユースグローバルリーダー育成事業に教員が参加するのも良いと思う。
- ●外部団体の基金(グラント)が色々な所から出ているので、その基金をもとにして SGH を基本にした総合的なプログラムを作り上げても良いと思う。
- ●1 年間の単発プログラムだけではなく、9 年~12 年の 4 年間対象のカリキュラムプログラムを開発する必要性がある。
- ●グローバルキャリア講座を映像記録し、授業でも使えるようにホームページにアップする。 また YOUTUBE や FB のアカウントも取得し、玉川 TED として公開したらどうか。
- ●今後は、アジア方面へのコンタクト、グローバルキャリア講座講師などに関しても、情報交換していきたいと思う。







以上、有識者の皆様の専門知識を取り入れた、有意義な話し合いがもたれた。

◆第2回 ハイパネルミーティング 2015年3月4日

出席者 16 名 David Selby 教授 Sustainability Frontiers 代表

池田伸子先生 立教大学教授 異文化コミュニケーション学部

松田 文先生 アリゾナ州立大学准教授

齋藤珠恵先生 青少年国際交流センター 交流事業部副部長

香川文代先生 リサーチディレクター Sustainability Frontiers

(Selby 氏・香川氏・松田氏はスカイプにて参加)

学内 渡瀬,藤樫,小野口,五十嵐,硤合,上村,平山,小林香, 前野,登本,Seth Allen, Peter Macinnis, 濱野, 北村

ハイパネルミーティング議事録

本年度の SGH プログラムについての報告(硤合)

- テーマについて
 - o 国際機関にキャリア選択をする人材形成
 - o 貧困、人権、環境、外交、国際協力、多くの国際機関がテーマにしている5つを

テーマにした。

- グローバルキャリア講座について
 - o 様々な国際的な現場で活動をしている方をお招きし、17回のレクチャーを行った
 - o 方式は、30分のTED方式と学年全体方式
 - o アンケートチャートの説明
 - TED 方式の方は、語学に自信のある生徒が多く参加する結果となった。
 - o グローバルな大会やコンテストに対する挑戦は少ない
 - 11番に見られる通り、国際的な問題を自身の問題として捉えられている生徒は3 分の1にとどまり、自身の問題としてではなく、他人事としてとらえている部分 があるのが見える
- ワールド・スタディーズ 12年生の選択授業
 - o 挑戦する力とコミュニケーション力が上がったので、主な目的は達成できたと言えるが、より多くの場を経験させるのが今後の課題。
- グローバルキャリアリーダーズのシステムついての説明
- 海外研修の説明
 - o ヨーロッパの国際機関を訪ねる
 - o UNHCR、赤十字本部などで
 - o 選考に応募した生徒は40人、その中から参加生徒を選出
 - o ゲーテ校訪問などの海外研修では、プレゼンの力は向上したが、質問された時の 答えを英語で言うといった英語能力が低いという問題がある
 - o 文科省視察の際も、質疑ができるかどうかを観察していった

• 模擬国連

- o 模擬国連は大分盛んになってきたようだが、今回 14 校から 135 人の参加者が集まり行った。
- 香川さんが NY でお会いしたユニセフの方が、模擬国連の経験がその後のキャリ ア構築に有意義に影響したと、話して下さる

• 英語検定等

- o 英検2級、TOEICを行った
- 9年生はGTECを受験、来年度は9年生だけではなく、10年生も受験する事で、 成果の推移を継続的にみる
- P40 レシテーションコンテストの実施
 - o 暗記コンテスト・皆の前で発表する
 - o 2月14日 ヴァレンタインズ・カップ実施
- 高大連携
 - o 立教大学キャンパスで行われた3日間のコース(全て英語で開催)

ここまでに関しての質疑応答

- 英語の能力の話についての質問(池田先生)
 - o 英検、TOEIC 等は任意で受けてもらっている
 - o 今後は英検を全員に受けさせるという計画もある

- 4技能対応を考えるという事はあるか?
 - o 今まで学年全員に受けさせるものはなかった、8年生全員にGTECを受けてもらった。
 - 来年は9年生、10年生にGTECを受けさせる
 - o IB はケンブリッジテストを受けている

Ms. Matsuda コメント

- 学年が始まった後に SGH が始まったにも関わらず、プログラムも良く出来、生徒も熱心に参加できたと思う。今後の課題もあるが、良かった。
- グローバルキャリア講座について、人権、環境といった問題について、日本の中で活動 されている方達の話を聞けると、もっと身近な問題として捉えられる。また、海外の問題だけを知るというよりは、国内の問題から海外の問題へと繋がっていくのが望ましい。
- グローバルはローカルでなければ、グローバルではない。
- 生徒にアクションプロジェクトとラーニングプロジェクトとしてアフリカに行くときに、ローカルな問題として捉えられるように、国内の差別、貧困などの勉強をする。

齋藤先生コメント

- SGH のゴール設定を明確にしていく
- 日本を知り、日本に誇りを持ち、海外に出てキャリア形成をした後、日本に貢献する世 代を形成するのを目的にするものも良いのではないか。
- グローバルな問題を自分自身の問題として受け取れない生徒が三分の一いるが、その生徒をどのように教え、自身の問題として捉えられるようにするか。
- 授業の中で形成するのか、それとも研修に頼るのか。
- グロキャリ講座を聞いた後、参加生徒によるディスカッションなど、問題認識だけにと どまらない様な工夫が必要。
- グローバル問題をローカルな問題として捉えるのは、生徒にとってとても難しい。
 - o 例えばセカンドハーベストの様な団体を招待し、受動から能動へシフトするとか。
- ただ聞くだけでは、受け身になるだけだ。
- プレゼンテーションを掘り下げて、アクティブな事を考える
 - o 例えば生徒達に事前にその団体が行っていることをリサーチさせる、そうすれば生徒 の質問で講演が進むという事も可能ではないか。
- または、何人かの生徒がその団体でボランティアをしてみるとか、そんなアクティブな 授業を考えたらどうか。
- 生徒からも、聞くだけではつまらないという声も上がっている
 - o 例えば、もう少し、運営の部分に関わりたい(司会なども含め)
 - o 生徒自身がレクチャーを聞いた後、セミナーを行う(リサーチをしたり)ホームレス 体験等・・
- ディスカッションをした後、どんな事をしたいという案はでるが、どうやる(HOW)の 部分がぬけており、インプリメントができていない

- 玉川という貧困から遠い所にある環境では、実際に貧困などを体験する事が重要である。
- 事前研究をした後に体験学習をするのも大切であるが、ほとんど準備なしで実際の経験 をし、自分たちで問題を見出していくというのも良いと思う。
 - o 娘の小学生でもクリスマスには、食品を集めたりすることで、少しずつ社会を知るという方法もある。
- 下準備をしないで静岡にある障害未就学児と生活を一緒に体験する(玉川社会奉仕部) • そうすると、生徒達はお母さん達の働きに驚いたりする。約10人の参加者がいる。
- p52-3 1年後の目標設定(SGHのプログラム)を生徒自身にさせ、一定期間に振り返りをさせ、次年度の目標設定やプログラム等の見直しを行う。
- 生徒の能動的な力を信じ、もっと能動的に活動をさせる。特に玉川にはその様な生徒が 多くいる。

香川さん

- 一番の印象は、難しい立ち上がりだったが良くここまでプログラムができた
- 知識は入ってきているが、それが行動に繋がる様な工夫が必要
- 個々に素晴らしいものをやっているが、意識のある生徒しか参加しない。意識のない生 徒達への呼びかけも必要
- グロキャリ講座後のディスカッション、またそれに繋がる授業などがあっても良い
- グロキャリ講座から何を学んだか等の振り返りも必要
- 全体のカリキュラムに訂通する目標
 - o どのような人材を目指すか、英語等の達成目標)
- p18の課題参照
- 緒方貞子さんのようなグローバルリーダーを育てたいと謳っているが、もっと細かな設 定が必要ではないか。
 - o 4年間でどのように海外と関わっていくようになるのか
 - o 授業ごとに目標設定をし、その目標をどうやって達成していくか等、具体的な方法を 組み入れる。
 - o 例えば、学習成果というとき、自分自身を知る、外国とつながる、自分の価値観を知る、自分が何を目的として活動するのか等、ブレーンストーミングする事により、個人の目標をより具体的な像として生徒が持つというのも一つ良い案だと思う。

教育目標

以下の5つの事に留意するのが重要

- 1. 学習
- 2. 知識
- 3. スキル技能
- 4. 態度(本質を見極めるという基本姿勢)
- 5. 価値観

構築にあたり

- フレームワークを作る
- 教科担当者
- ラーニングアウトカム(学習成果)図の作成
 - o 横軸が学年、縦軸が教科の図を作る
- サブジェクトラーニングアウトカム
- グローバルラーニングアウトカム(地球温暖化など)
- ジェネリックアウトカム
 - 一般的な問題の枠組みを教科の枠組みにうまく組み合わせていくのが大事ではないか

大学でも教育目標を組み立てて、マッピングしている

- 教科の教育目標を設定するのは難しくはない、例えば英語など
- しかし、大学的に大切だと思っているのは、学習態度である。
 - o 問題を発見し、その問題を考え、解決し、振り返り反省点を明確に
 - o このような教育目標を、突然大学で始めるのは難しい
- この様な学習態度を高校の時から身につける必要があると考える
- 高校卒業してすぐにリーダーになるものではない、だから教科の前に国際性を身に着けるという事を考えた時、玉川なりの柱(積極性、身近な問題を考える等・・)を作り、それを強化につながるようなマトリックスを作ったらどうか。

人材の国外流出に関して

- 国際機関へいくというのは、その経験を帰国後国内で活かすという事もある
- 国際社会で日本のプレゼンスを上げるため、国際機関で働く。
- 国連で働いた後、日本で活躍する方達も多くいる。
- 教員研修の費用を捻出し、このプロジェクトに参加する教員を増やすなど、サポートが 必要であるが、助成対象ではないと、却下された。

グローバルキャリア講座

- 来年度のグロキャリ講座は学年全体で行うものが年に1回から3回に増える予定
- 10月28日水曜日、池上彰さんの講演を全学年に

学習と学習成果に関して

- ラーニングアウトカム (学習成果) のために9年生はここまで、10年生はここまで、 という目標を可視化する
- ローカルに貧困や環境の問題に触れる
- 海外の他校の生徒達との対話
 - o ローカルオリエンテーション
 - o グローバルオリエンテーション
 - o 英語でのコミュニケーション
 - o スカイプはコストもなしにできるので、より多い生徒が恩恵にあずかれる

- o ローカルに即した問題意識がコスモポリタンな問題解決になり、コスモポリタン な問題を知る事になる。
- o デニスン(世界を良くしようという目的のためにそこに住む人)ではないが、日本にいながらしてデニスンになれる(日本に居ながらにして、現地の文化・問題等に、現地にいるように深く関われる
- o 玉川に来る留学生 300 人ともっと交流していくのは有効である。
- o 留学生が帰った後にも交流を続ける等…

10月31日ハイパネルミーティング、SSH・SGH の発表会が終った後に行いたい。 デービッド先生も来日できたらよいと思う





2.英語力

(1) 実施日程

業務項目		実施日程										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11月	12 月	1月	2月	3 月
英語検定、 TOEIC、 GTEC受検			英検実施		GTEC CBT 実施		英検実施			英検実施	GTEC 実施 9年全 員	

(2) 実績の説明

A.英語検定と TOEIC 受検の奨励を行い、GTEC (ベネッセ) 導入を検討する

【参加者】

英語検定、TOEIC: 9 ~ 12 年生の希望者

GTEC CGT: 10 年生の PL、A1、A2 コースの希望者 *A1、A2 は習熟度別クラス

GTEC for STUDENTS: 9年生全員(ただし他校受験生は除く)

【日 時】

英語検定:第1回6月7日(土)、第2回10月11日(土)、第3回1月24日(土) TOEIC:4月13日、5月25日、6月22日、7月27日、9月28日、10月26日

GTEC CGT: 8月2日(土) GTEC for STUDENTS: 2月14日

【場 所】各教室

【内 容】

玉川学園では英語教育に力を入れており、任意で英語検定、TOEIC テストを受検するよう奨励している。英検試験は、学園内で2級まで一次試験を受検できるようにしている。また、このたび SGH に指定されたことにより、8月の GTEC CGT に高校1年生が無料で受検できることとなり、10年生に呼びかけたところ27人の生徒が受検したいと申し出てきた。生徒は GTEC 受検に意欲的であり、クラブ活動の合宿や試合で重なり、受検したいができないと悲しがっている様子も見られたほどであった。学校をあげての協力体制のもと、2月14日に9年生の全生徒が GTEC for STUDENT を受検できることとなった。

【成果】

TOEIC テストに関しては、10 年生が 2 人、11 年生が 5 人、12 年生が 25 人と学年が上がるにつれて、受験者数が増えた。700 点以上が 6 人、800 点以上が 11 人、900 点以上が 3 人と、高得点を獲得している生徒もいた。英語検定では、9 年生~12 年生のうち、準 2 級が 85 人、2 級合格が 33 人、準 1 級が 6 人合格した。(10 月段階)

【課題】

来年度は、9年生だけではなく10年生全員がGTEC for STUDY を受検できるように活動計画に組み込まれた。ただ受検して終わるのではなく、しっかりとした英語の力をつけさせ、英語を用いた活動へとつなげていけるようにしていきたい。

B.11 年生選択科目「英会話 I」、12 年生選択科目「OCⅡ」のコンテンツグローバル化

(1) 実施日程

業務項目		実施日程										
11 年英会話	4 月	5 月	6月	7 月	8月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
12年 Oral Communication	実施	実施	実施	実施		実施	実施	実施	実施	実施	実施	

(2) 実績の説明

【参加者】

11年英会話 I(選択 A,B 群)および12年 Oral Communication II (選択 A, C 群)履修者

【日 時】11年英会話 I…週3時間、12年 OC II…週4時間

【場 所】各教室

【内 容】

生徒の英語での発信力を育てる目的で、年に4回(12年生は3回)1人数分のプレゼンテーションを課した。日々の授業では、プレゼンテーションスキルを高める練習をさせたり、スクリプトを書く段階では順序立てて自分の考えを英語で書くことを行わせたりした。以下にプレゼンテーションのトピックを記す。トピックは身近な事柄や日本のことなど、やがては世界へ向けた発信力へつながるよう意識して設定した。

- 1 1 年英会話 I (担当:アレン)
 - 1. My favorite thing 2. Introduction of my hometown 3. What is cool about Japan? 4. My dream
- ●12年 OCII (担当:アレン・ベイカー・マキニス・太田)
 - 1. Country of interest 2. Aspects of Japanese culture 3. The world in 2030

【成 果】

プレゼンテーション活動を通し、自分の考えを発表するということにはある程度慣れさせること はできたが、発表では原稿を丸暗記しての発表も多く見られ、自然な流れの中での発話活動を習 得するにはより多くの訓練が必要なようだった。

【課題】

プレゼンテーション活動では、原稿の丸暗記ではなく、その場で英語を考えて発話することを促 し、自然な流れでの会話で意見を言う活動につなげたい。

C.学内レシテーションコンテストの実施

(1) 実施日程

業務項目		実施日程										
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
レシテーショ	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
ンコンテスト	準備	準備	準備	準備		準備	準備	準備	準備 実施	実施 検証	実施 検証	

(2) 実績の説明

【参加者】 Ι Βコースを除く 1 0 年生全員

【日 時】1 s t ステージ: 1月27、28、29日、ファイナルステージ: 2月14日

【場 所】1 s t ステージ:各授業教室、ファイナルステージ:学園講堂104教室

【内 容】

「グローバル」な社会では、世界の諸問題に対して英語で話し合い、問題を解決していく力、 英語で交渉していくコミュニケーション力が求められる。

現在の授業では、自分の言いたいことを英語で表現できるようにさせるために、英文訳読に終始する授業からの脱却を図り、既習の英語を使って英語でアウトプットさせることを大切にしている。場面場面で自然に英語が口から出てくる「英語の自動化」を実現させるために、4月から音読を重視した授業を展開している。コーラスリーディングに始まって、リード・アンド・ルックアップ、シャドーイングなど多様な方法で音読の訓練を授業内に行うことを心がけている。このように4月から続けてきた音読の授業のひとつの成果として目に見える形で提示したいということと、また生徒が更なる音読へのモチベーションを高めるきっかけとなって欲しいという意図からレシテーションコンテストを企画した。まずは10年生のIBコースを除いた全クラスの生徒を対象に行うことにした。

1 s t ステージは、全生徒対象でそれぞれの授業のクラスで行った。暗唱するテキストとしては、教科書 *Crown English Communication I* の Lesson 8 の Section 2、Joe O'Donnell の回想の箇所を使用した。習熟度別編成をしているため、P L 、A 1 、A 2 コースの生徒は全文、B コースの生徒は前半部分をレシテーションさせた。P L 、A 1 、A 2 コースの生徒は 2 分 30 秒以内に、B コースの生徒は 90 秒以内にそれぞれクラスの全生徒の前で発表させた。

PL、A1コースからは代表者を2名、A2コース、Bコースからは代表者を1名ずつ選出し、選出された代表者たちがコンテストのファイナルステージに進出することにした。選抜の際は、ELFの教員にも協力してもらい、授業担当者と相談をして決めた。生徒たちには、評価シートを配り、それぞれ発表者の評価をさせるとともにお互いをしっかりと聞き合えるようにした。ここでの評価は、毎週行っている単語テスト1回分に相当するものとして、生徒のレシテーション

に対する前向きな取り組みを促した。

ファイナルステージは2月14日に行い、『ヴァレンタインズ・カップ』と名づけ、大学講堂の大きな教室を借りて行った。発表した生徒は、それぞれの授業クラスで勝ちあがってきた選出者12名で行った。ファイナルステージでレシテーションする際のテキストは英語の絵本や偉人の自伝を題材としたもので、コース別に英文を何種類か用意し、生徒たちに選ばせて暗唱させた。ここでも生徒たちに評価シートを配り、選出者の発表をしっかりと聞けるようにした。まさにレシテーションの名の通り、代表者の誰もが自分の物語を語るかのように活き活きと感情を込めて英語で発表する姿は、会場にいる生徒も思わず聴き入るほどであった。







【成 果】

レシテーションコンテストをする前日に授業内で練習の時間を取ったが、生徒たちが英文を見ないで言えるように自然と何度も何度も音読をする姿が見られた。また、普段の音読の練習よりもより積極的に声に出して音読をする姿も見られた。このように、レシテーションコンテストによって音読の活性化につなげられたと思う。

また、英文を暗唱できるようにする際に、左にスラッシュで区切った英文、右にその日本語訳が書かれたプリントを配布し練習させた。このプリントを用いて暗唱の練習をする際に、日本語訳だけを見ながらその日本語を英語で言えるように練習する生徒が多々見られ、自然と日本語→英語への変換の練習となっており、リ・プロダクションの練習へとつながっていった。

更には、英語をスラッシュで暗唱させることによって、自然と頭の中で英文を作成していく力を身につけたと考えられ、「英語の自動化」へとつながっていったと考えたい。

【課 題】

今後は、これを単発で終わりにするのではなく、毎年の恒例行事としていき継続して音読の活性化につなげたい。

また、音読による「英語の自動化」だけで終わるのではなく、次は自分の言いたいことを英語で表現していけるような練習をさせていきたいと思う。そのためにはライティングの練習などのアウトプットの練習やプレゼンテーションの練習へとつなげていけたらと思う。

D.アカデミック・スキル・キャンプ

今年度は以下の2つのプログラムを生徒へ紹介し個人応募とした。

① カナダ・アップルビー校 夏期英語研修(9年生・10年生対象)

カナダのトロント郊外にあるアップルビー校にて、英語を母国語としない生徒を対象とした 英語研修が実施された。1911 年創立の私立共学校で、トップレベルの大学進学実績を誇る進 学校である。学校から5名を選抜し、派遣した。

- 8月 3日(日) 日本出発ートロント到着
- 8月 4日(月) ~ 8月29日(金) アップルビー校にて研修(学校寮泊)

② Oxford Royal Academy 2014 Summer School 2014

イギリスのオックスフォード大学で実施されたサマーセミナーを学内 LAN にて広報した。 Session 3: August 3rd to August 16th

Oxford Summer English, Oxford Enterprise Programme, Global Leadership Programme, Film Academy Introduction to Website Programming, Online Journalism, Blogging & Social Media, Engineering Preparation, Law School Preparation, Medical School Preparation, Oxbridge Preparation, SAT Preparation, UK University Preparation, Academic Writing with IELTS Preparation

3.大学とのグローバルな高大連携科目の設定

今年度はスーパーグローバル大学に選出されている立教大学と関西学院大学および、玉川大学との連携を模索した。そのなかで、立教大学異文化コミュニケーション学部と以下の日程で課題研究に関するサマーコースを設定し実施した。3日間の講義はすべて英語で行われ、延べ27名の生徒が参加した。

- Super Global Summer Course for Tamagawa Academy 2014 For Securing Japan's Future in an Ever-globalizing World
- (ア)目的 SGH 個人研究テーマに関連した一定の英語力 (CEFR・B2 (英検準1)以上)を持った玉川学園の高校生のみを対象としたサマーコース
- (イ) 使用言語 全て英語・事前課題あり
- (ウ) 期間 7月28日(月)~30日(水)9:00-12:00 3日間 50分授業を3時限または100分授業
- (エ)場所 立教大学キャンパス(池袋)
- (オ) 講師 ポール・カニングハム教授、ステファン・ジョンソン准教授
- (カ) 内容
 - DAY1. Monday, July 28: International Cooperatives and Corporations in Poverty
 - DAY2. Tuesday, July 29: Culture, Language, Communication and Diplomacy
 - DAY3. Wednesday, July 30: Critical Thinking Skills, Learner Autonomy and Intercultural Awareness







●関西学院大学キャリアフォーラム 2014「国際機関で働く」

2014/11/29 に将来、国際協力、開発援助の分野での活躍を志す者を対象に開催されたキャリアフォーラム 2014「国際機関で働く」に生徒 29 名が参加。国連アジア太平洋経済社会委員会 (ESCAP) 事務局次長の基調講演、パネルディスカッションのあとにはワークショップがおこなわれ、生徒は国際機関で働いている人の実経験を聞き、キャリア構築について考えることができる機会を得た。

〈ワークショップ(自由に選択)〉

国連教育文化機関(UNESCO)、国連開発計画(UNDP)、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)、 国連人口基金(UNFPA)、 赤十字国際委員会(ICRC)、外務省国際機関人事センター、 国際協力機構(JICA)

■日時: (土)12:30-17:30

■場所: 西宮上ケ原キャンパス

◆「立教大学」「関西学院大学」研修終了時アンケート結果

対象者がそれほど多くないため、2つの研修において大きな違いがあるとは言えないが、「ボラン ティアや研修への参加」「留学や国際的な活躍」への興味関心は非常に高い。 また、「講座への参加は有意義なものだった」「研修に参加したことによる変化」「グローバルな課題についてのイメージ」「次回の参加希望」においての「強くそう思う」「そう思う」の割合は高く、研修への満足度が高いことがわかる。

①現在、ボランティアや研修へ参加するなどの自己研鑽活動に取り組んでいる

	立教		関西学院	
①強くそう思う	8	53%	13	68%
②そう思う	6	40%	3	16%
③あまり思わない	0	0%	2	11%
④全く思わない	1	7%	1	5%
計	15	100%	19	100%

<u>②将来、ボランティアや研修へ参加するなどの自己研</u>鑽活動に取り組みたい

	立教		関西学院	
①強くそう思う	9	60%	15	79%
②そう思う	5	33%	3	16%
③あまり思わない	1	7%	0	0%
④全く思わない	0	0%	1	5%
計	15	100%	19	100%

③高学年卒業後(大学在学時)、将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい

	立	教	関西学院		
①強くそう思う	13	87%	18	95%	
②そう思う	2	13%	1	5%	
③あまり思わない	0	0%	0	0%	
④全く思わない	0	0%	0	0%	
計	15	100%	19	100%	

④高学年(9~12年)在学中に、留学または海外研修(短期)へ参加したことがある

	立教		関西5	字院
①強くそう思う	10	67%	10	53%
② そう思う	2	13%	4	21%
③あまり思わない	0	0%	0	0%
④全く思わない	3	20%	5	26%
計	15	100%	19	100%

⑤今後、高学年(9~12年)在学中に、留学または海外研修(短期)へ参加したい

	立教		関西学院	
①強くそう思う	4	27%	10	53%
②そう思う	6	40%	3	16%
③あまり思わない	4	27%	4	21%
④全く思わない	1	7%	2	11%
計	15	100%	19	100%

⑥グローバルな課題やビジネス課題の解決策やアイディアに関する大会へ挑戦したい

	立教		関西学院		
①強くそう思う	6	40%	12	63%	
② そう思う	4	27%	4	21%	
③あまり思わない	4	27%	3	16%	
④全く思わない	1	7%	0	0%	
計	15	100%	19	100%	

⑦コミュニケーションスキルとして英語力をもっと伸ばしていきたい

	立	教	関西学院		
①強くそう思う	15	100%	18	95%	
② そう思う	0	0%	1	5%	
③あまり思わない	0	0%	0	0%	
④全く思わない	0	0%	0	0%	
計	15	100%	19	100%	

4.グラハム・パイク氏による教員研修

構想調書ではパイク氏による教員研修を平成27年度に実施予定とし、本人からも内諾を得ていたものの、その後教員研修そのものはSGH予算対象外との回答を得たため、実施を断念した。

5.ダイアログ・イン・ザ・ダークを通した関係性(エコロジー)の探究

【参加者】出展者 10年雲仙組生徒32名、入場者 160名

【日 時】平成26年9月13日(土)・14日(日) 玉川学園高学年ペガサス祭(文化祭)

【場 所】玉川学園高学年校舎 3階 307教室

【内 容】

[経緯]

- 5月 ダイアログ・イン・ザ・ダークが開催している"暗闇の中の対話"。光を遮断した空間でコミュニケーションの大切さを再確認するというイベントを、ペガサス祭(文化祭)のクラス発表として教室で再現し、クラスが団結して取り組むことが決定した。
- 6月 クラスで実際にダイアログ・イン・ザ・ダークを体験。 「雲仙イン・ザ・ダーク」としての企画書を全員提出。コアメンバーがまとめ、 コンセプト、教室図面を作成。
- 7月 使用教室を暗闇にする方法を施工。各コーナーアトラクションの試行錯誤、リハーサル。

クラス全員にアトラクション内容・教室レイアウト図・アテンド(案内役)の 台本を配布。

役割、当日のシフト決定。

- 8月 コアメンバーでアトラクション、台本内容の修正、最終決定。
- 9月 クラス全員に決定版の台本を配布。

台本に沿って、アテンド・受付の研修会。

13日・14日ペガサス祭(文化祭)当日、無事に出展。

「雲仙イン・ザ・ダーク」の振り返りを全員提出。

[内容の詳細]

光、視覚を遮断した教室内で用意されたアトラクションを体験する。

教室は3つのエリアに分かれており、

- 1、 自然のエリア:落ち葉や石、水を、聴覚、嗅覚、触覚を研ぎ澄ますことで認識する 落ちているボールを見つけ出し拾う
- 2、 チャレンジのエリア:拾ったボールを的に当てる(当たると鈴の音がする) トンネルをくぐる
- 3、 アートのエリア: 机に向かって座り、おはじきアート(○や△を描く)をするというアトラクションが用意されている。アテンドもお客様も暗闇で、お互いの言葉のやり取りを大切にし、視覚以外の感性を研ぎ澄ますことで、誘導し、アトラクションを体験していただく。

【成 果】【課 題】

視覚から物事を捉えることの多い日常の中でより大事な言葉によるコミュニケーションを見直し、思いやりのある的確な言葉のやり取りから、より良いコミュニケーションが確立できるという実践が出来た。

出展者側としては、立案・企画・実践を通じ 生徒が個々に適材適所を自覚して仕事を担当

し役割を果たすことが出来た。各自、言葉の大切さ、コミュニケーション力を再認識し、結果 的にクラスの団結も見受けられ、大変有意義であった。この体験を活用し、コミュニケーショ ン能力がさらに高まることを期待する。



6.海外トップ大学生たちとの交流

【参加者】GAKKOメンバー17名・たまがわ国際会議 参加生徒54名

【日時】2014年7月19日(土) 8:30~12:00

2014年7月19日(土)の午前中、たまがわ国際会議の一環として、GAKKO PROJECT を招聘して、ワークショップを実施した。GAKKO PROJECT とは、欧米の大学生、大学院生を中心に構成された非営利団体で、その出身大学はイエール大学、ハーバード大学、トロント大学をはじめ、イギリス、フランス、カナダ、トルコなどにおよぶ多国籍な学生団体である。今年は、本学の卒業生が Senpai として活動をしていたことから声をかけ、リーダーシップ向上を目的とした「エッグドロップ」というワークショップを英語で実施し、最後はチームごとにプレゼンテーションを行った。



世界のトップといわれる大学に所属している大学生を身近に接し、その創造性やコミュニケーション力の高さに大変大きな刺激を受けていた。



7.10 年次「玉川アドベンチャープログラム(TAP)」の必修化および自由研究「リーダーシップ (TAP)」 の履修

◆10 年生全員による TAP 活動

【目的】【参加者】

10年生は、内部進学者(200名)と他の中学からの進学者(40名)合わせて240名が、8クラスに分かれ、それを3クラスでクラスごとに別けて活動した。その目的は、学級運営を早期に円滑にするため、①いじめを予防して生徒相互のコミュニケーションを図るきっかけ作りをする。②仲間の個性や多様性を認め、相互理解と新しい仲間作りの機会とする。である。

【日時】

 $\bigcirc 4/3 \ \bigcirc 4/30 \ \bigcirc 5/29 \cdot 30 \cdot 31 \ \bigcirc 6/11 \cdot 12 \ \bigcirc 7/22 \cdot 23 \ \bigcirc 10/11 \ \bigcirc 11/28 \ \bigcirc 12/12$

【場 所】高学年多目的ホール、TAP センター、記念体育館1階、ロープスコース

【内 容】

指導教員 学術研究所 TAP 指導員:白山明秀・村井信二・川本和孝・永井由美活動内容と特記すべき事項(村井信二が指導した浅間組の記録から引用した)

- ③回目 ・自己紹介・ライナップ・カテゴリー・ハブユーエバー・ペアストレッチング・ごろ べえ・振り返り
- ・緊張した状態であった。何をするのか分からない状態でクラスの全員で同じ活動をすることに慣れてないようである。自由研究 TAP に参加している生徒がリーダーシップを発揮してくれている。今後が楽しみなクラスである。
- ④回目 ・自己紹介・ペアストレッチング・スワンストレッチング・インチウォーム・ジャンプロープ・フルバリューについて、フープリレイ・振り返り
- ・段々と緊張が解けてきた。様々な活動に意欲的に参加しようとしている。男女の仲は良さそうであるが一緒に活動するまでに至っていない。
- ⑤回目 ・自己紹介・ウォーミングアップ・トラスト系・ストーンヘッジ・スペースエッグ・ 振り返り
- ・久々の活動であるが元気なクラスである。男女に分かれての活動だが、協力や信頼がないと 出来ない場面でも積極的に行っている。課題に対して意見を出し合いみんなが取り組もうとし ている。生徒達がまとまっていこう、楽しいクラスにしようとする姿勢と行動が見られる。

⑥回目 ・体調確認・ペアストレッチ・エブリバディズアップ・ローエレメント3つに分かれる(モホーク・マルチバイン・テンション)・振り返り・感想

・3 つのグループに分かれてローエレメントに入った。小グループで関わりを持ちながら協力することを体験した。関わりをもっと持ちたかったという意見や真剣になりすぎて安全面への配慮が欠けた場面もあったが皆元気な顔で帰っていった。このような体験がクラスによい刺激になっていると思われる。

【成 果】【課 題】(10年浅間組を例とした)

TAP による体験活動によって、クラスの雰囲気やその中のひとり一人のクラスへの関わり方が変化した。活動を通してより良い人間関係を作るための気付きや学びを引き出し、クラスが持っている雰囲気やクラス員の個性を伸ばす活動と振り返りがあった。ファシリテーターは、友達の意見を尊重すること、自分の意見を発表すること、協力すること、見守ること、無視しないこと、支えること、リーダーとなって発言すること、行動することなど、何が重要かを様々な角度から生徒の学びや気付きとして引き出した。その結果、クラスの雰囲気は良くなり、例えば、海外留学の仲間を励ます会を自主的に催し、仲間を思いやり積極的に関わり、みんなで楽しい時間を共有することが出来た。このことからも10年生のHR作りにTAP活動は、プラスに働いたと考えられる。

◆総合的な学習・自由研究「アドベンチャー研究部」による TAP 活動

【日 時】金曜日の6・7時間目を総合的な学習、自由研究の時間

【内 容】

金曜日の6・7時間目を総合的な学習、自由研究の時間において体験を通して学んだ。指導者は、学術研究所の指導員である白山明秀・永井由美と高学年教諭平山雅行である。平成26年度のアドベンチャー研究部の活動目標は、①アドベンチャーの意味を理解し、体験することで得られる効果を研究する。②集団で活動することで得られる効果と意義について考える。③体験学習と自己変容の関連を調査・分析・研究する。④アドベンチャー教育



の歴史とその効果を調査研究し、個々の研究課題に活かせるようにする。

前期は、ローエレメントロープスコースを中心に活動し、グループとチームの違いを考えた。 (前期ローチャレンジ写真①) 自分と他者の関係作りの中では、自己理解・他者理解、自己発 見が出来る活動を行った。また、体験を元に話し合いをすることで、積極的に参加することが 重要であることを学んだ。(前期 ローチャレンジ 写真①)

後期は、ハイエレメントロープスコースを中心に活動し、 挑戦することで得られる高揚感やその挑戦をサポートする ことの重要さを体験した。ここで得られた至高体験によっ て更に高い挑戦に結びつけることが目的である。挑戦した 者だけが得ることが出来る成功体験だが、その成功を支え るものは仲間のサポートであり、大きな声での応援である ことを学んだ。友達の挑戦に対して真剣にサポートしたり 声の限りに応援したりする姿が見られた。(後期ハイチャ



レンジ写真②)

【成 果】【課 題】

TAP 活動の中でリーダーが学ぶことは、まず安心して発言したり行動したりできるのはそれを支えてくれる仲間がいることである。そしてリーダーは、視野が広く思いやりがあり、何より感謝のこころを持って活動することが重要であることを学ぶ。目標が達成出来たときに得られる充実感や達成感、それと共存する辛抱や忍耐、仲間と活動する中での信頼や協力や安全への配慮と様々なベクトルを考えながら、リーダーとしてのスキルを学んでいく。何度も壁にぶち当たりながら仲間を信じて粘り強く意見を言い、仲間の納得を得て気持ちをまとめていく大変な作業を学ぶ。ここで学んだリーダーとしての素養は、どんな困難な場面にも活かされ、粘り強く挑戦する力となることを確信している。

7 目標の進捗状況、成果、評価

ア 生徒の変容

① グローバルな社会・ビジネスに関する課題への理解、興味・関心にはまだ課題がある。

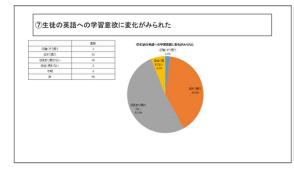
SF による外部評価の結果、および上記生徒アンケートの結果からみると、生徒全体として自分の力を"外"で挑戦してみようという意欲がある生徒は約1/2弱にとどまっている。今度、各種コンテストの案内広報の充実、および応募の奨励が必要である。



② 論理的思考力、判断力、表現力、創造性

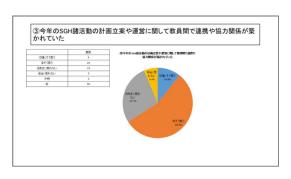
アクティブラーニング型の授業を導入しているワールド・スタディーズ、ラウンドスクエア実行委員会、および IB 生徒においては、生徒の提出物などからその成果をみることができた。ただ、生徒全体からするとまだ一部に過ぎない。また海外研修参加生徒に関しては、十分な事後指導の時間をとるのに苦労したため、満足のいく研究発表の内容には至らなかった点は来年度改善していきたい。(生徒成果物については後述資料を参照)

③ 学力・学習意欲は、生徒の半数に肯定的な変化がみられた。





年度末におこなった教師アンケートでは、生徒の約半数弱にとくに英語学習における変化が みられたと回答した。初年度である今年は英語科を中心に様々な新しい英語学習への動機付けと なる試みが実施されたことによる一定の効果が認められるのではないか。また約 2/3 の生徒において、 興味関心の変化がみられると回答した。今後とも継続的に取り組みを行い、各教科でも関連した取り組みが広がっていけばさらに全体的な学習意欲の向上につながると考えられる。



④ 進学・就職の動向は、約半数の生徒における進路選択に変化がみられた。

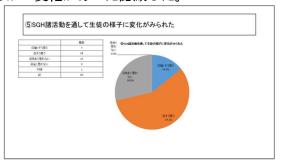
上記教師アンケートでは、生徒の約半数弱に進路 選択における変化がみられたと回答した。さらに具 体的に回答の内容を引き続き精査する必要がある ものの、本学 SGH の各種取り組みの成果が認めら れるのではないかと考えられる。今後とも継続的に 取り組みを行い、さらに生徒の個人研究テーマの追 究の深化により、さらに多くの生徒へ波及効果を期 待したい。



イ 教員の変容

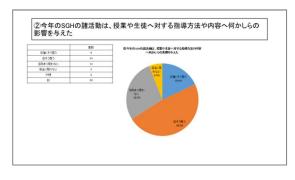
① 約 2/3 の教員は SGH 諸活動を通して、生徒に何らかの変化があった認識した。

約 2/3 の教師は生徒に何らかの変化があったと回答した。SF の外部評価を実施した際の教員インタビューのコメントからもその変化は肯定的なものであると考えられる。しかし、今後 SGH の更なる効果を上げるためには、教員間の更なる当事者意識の醸造が求められる。



② 教員のグローバル人材育成に対する指導方法への影響を与えた。

SGHの実施にともない、教師自身の指導方法へも何らかの影響を与えていることが明らかになった。IB 手法を参考にすることを研究課題のひとつと挙げているので、今後との IB の授業がどのように展開されているのか、アクティブラーニングの手法、生徒へのメッセージ性を持つ評価方法や観点などについて更に教員間で理解を深めていく必要があると感じた。

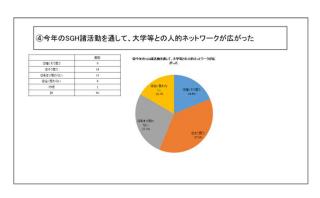


③ 教員間の連携・協力、指導体制は、約2/3の教員が肯定的にとらえていた。

約 2/3 の教師が肯定的にとらえている回答を得た。しかし、SF の外部評価で指摘されているように、SGH を今後さらに定着させていくためには関わる教員の裾野の拡大が必要である。

<教員>SF による外部評価書からの抜粋

- ・44%が「とても賛成する」、50%が「賛成する」 と TSGH の取り組みについて肯定的な回答をし た。
- ・肯定的回答が高いものの、初年度に関しては TSGH 実行委員の少数の教諭を中心に運営され た。より幅広い教諭の運営参加が望ましいとさ れるものの(業務量により)難しい状況があると 懸念している。



④ 教員の大学等との人的ネットワークは、約半数の教諭が広がりを感じていた。

約半数の教員は、大学等との人的ネットワークが広がったと回答した。この割合は、SGH常任委員数以上であるため、SGHの実施にともなって実施された諸活動のなかから接点があったと考えられる。また来年度の研究発表会の実施に向けて、学事日程の都合がとりやすかった1~2月に実施の案内があった他のSGH先進校の視察に合計16名の教諭を派遣し、研修を重ねた。

2014年度SGH先進校視察

	1中及6GH光色区抗东							
	月日	訪問先	内容	訪問者				
1	01/24	昭和女子大学附属昭和高等学校	大学や実社会と連動させたデュアルグローバルプログラム公開授業・講演会	島津・原美紀子				
2	02/02	立命館中学校·高等学校	第1回「高校教育のグローバル化を考える」シンポジウム	藤樫・登本・鳥海・有川・横山絢美				
3	02/06	大分県立大分上野丘高等学校	平成26年度大分上野丘高等学校スーパーグローバルハイスクール成果発表会	長谷部・大原・坪井・前田				
4	02/12	島根県立出雲高等学校	スーパーサイエンスハイスクール並びにスーパーグローバルハイスクール研究成果発表会	前野				
5	02/21	広島女学院中学高等学校	第2回広島女学院中学高等学校SGH研究発表会	川崎·上村·硤合·力石				
				訪問 5件				
				人数 16名				

とくに本校は SSH、IB 校であり、研究会当日は効率的なスケジュールや運営が求められたため、 多くの教諭によるモデル校の視察は、来年度へ向けての準備として大きな意義をもつ視察となっ た。

ウ 保護者の変容

① SGH 事業に対する賛否

80.8%の保護者(アンケート回答保護者数 125 人中 101 名)は TSGH が今年度始まったものだということを認識していることが、SF による外部評価書より明らかになった。

② 子供の様子を通しての SGH 事業についての理解

95.2%の保護者は TSGH の目的や目指すものは自分の子供にとって、「非常に大切であると思う」もしくは「大切であると思う」と SF による外部評価書で明らかとなった。

③ 学校や教員に対する意識等

基本的に保護者はTSGHに対し、幅広くさまざまなものへの参加の機会を生徒に提供することを期待しており、今後さらなる情報を共有することを望んでいると回答している。また、経済的支援(研修の旅費)は子供を研修に参加させるうえで明らかに助けになったとする保護者がいる。しかし一方で、海外研修に対しては、まだ経済的に難しいという声もあった。今後さらに私学による奨学金や「とびたて留学日本」の広報を行っていく。

④ グローバルな社会・ビジネスに関する課題に対する興味・関心等

今観点に関しては、直接保護者からのデータ収集ができなかった。しかし、約200名の海外からの交換研修生へホームステイを提供している実績を鑑みると、多くの保護者は自分の子どもが異文化にふれることに価値を見出していると考察することができる。当然、ホームステイの提供には家庭の事情が影響をするので、今後、ホームステイを提供できない家庭の生徒も気兼ねすることなく参加および応募できる海外研修の形態を研修する。

エ 学校の変容

① 公開授業や交流会,発表会の実施

今年度は以下4回の発表会を行った。その他、11月に文部科学省によるSGH授業視察を受け入れた。来年度に関しては、SGH/SSH合同で発表会を企画している。

- 1. 9月 ペガサス祭
- 2. 11 月 IB フォーラム 玉川大学学術研究所
- 3. 12 月 J-FUN ユース・UNHCR ユース OB/OG 勉強会
- 4. 3月 生徒発表会

② SGH 事業の成果普及のための取組

学内外へ積極的に SGH の成果を広報するとの文科省の意向に基づき、本学 SGH 専用の HP の整備を優先的に実施してきた。また英文 HP のリリースを行い、海外へ対しても実施内容がわかるようにつとめた。ホームページの整備にあたっては、SNS の拡大を受けて生徒や保護者からのアクセスがしやすい環境が必要であることから、FACEBOOK と連動する形をとった。またグローバルキャリア講座の様子も YouTube を使って、限定公開の形でデータベースを行い、自宅の PC やスマートフォンからも視聴できるようにした。今後も積極的に発信に努めていく所存である。

③ 国際関連のクラブの活動状況

本学では「国際関連クラブ」はないものの、ラウンドスクエア実行委員会や自由研究グローバル研究の生徒がその主体となって活動している。上記は、海外からの来校生の数であるが、そのホームステイの提供、7月に開催された「たまがわ国際会議」の企画立案および運営、

<内訳>

2014年4月〜2015年3月までの留学受入数。 アメリカ(6)オーストラリア(43)台湾(38)シンガポー ル(2)ブラジル(29)ドイツ(12)カナダ(1)デンマーク (1)スイス(1)

そのた日常的に短期留学生との交流会などを企画立案し、広く全校生徒へ広報して参加を募っている体制が整えられている。来年度は、さらに SGH 活動へ関わっていきたいとの生徒からの申し出もあり、どのような形で可能が参加拡大を図っていく。

④ 各種コンテストへの参加状況

○国際的なコンテストへの参加数 50名

今年度は合計 50 名の参加が認められた。前年度の実績が 30 名であるので、20 名の増加が認められた。今後さらに各種コンテストの広報と参加呼びかけを強化することにより更に増加を望みたい。

<内訳>

JICAエッセイコンテスト2014応募(88) 関西学院大学英語エッセイコンテスト2014応募(6) ボランティア・スピリット賞2014(2) 第14回2014年度立命館論文大賞(1) 第2回全国高校生英語プレビンテーションコンテスト(2) 第64回第8支部英語スピーチコンテスト(2)

○入賞者数 延べ8名

計8名の入賞者があった。そのうち優勝に相当するものが2件あり、SGH研修旅行への参加者

の入賞や、英語科や国語科など教科横断的な 取り組みによって、ある程度の効果が認めら れたのではないかと考えている。右記以外に もビジネスコンテストなどへの参加もあり、 入賞があるものの、本学の研究課題とは異な る分野のため、数値への計上を見送った。

<内訳()は人数>

対象生徒:ボランティア・スピリット賞2014(3)JICAエッセイコンテスト(1)第14回2014年度立命館論文大賞(1)第64回第8 支部英語スピーチコンテスト(1)

対象生徒外: 第2回全国高校生英語ブレゼンテーションコンテスト(1)JICAエッセイコンテスト(1)

⑤ 自己点検・自己評価の在り方等

生徒全員へのアンケート調査は、今回は日程上の都合が合わず、年に1回のみしか行うことができなかった。また保護者へのアンケートも対象生徒の保護者を中心に行ったのみであった。来年度は、学年単位のグローバルキャリア講座を各学年複数回実施できる見込みであることから、生徒の意識変化を今年度よりもさらに的確に把握することが可能になると考えられる。また保護者の意識変化も調査項目にあることから、父母会などと連携し更なる充実をはかっていく。

オ 管理機関の変容

実質年度途中のプログラム開始とあり、大変厳しい日程であったが、現場と管理機関である学園教学部と密接に連携をとりあい、6月からのSGH事務局の開局に至った点は大変大きな成果であった。幼稚部から高等部までの教育支援を行う部門であるため、学園全体のなかで中学後半から高校段階であるSGHが一貫教育の中でどのような効果があるのか今後とも検証をしていく。また、経費や人事の部分でも今後とも密接な連携のもとSGH事業を推進していく。

カ大学、企業、国際機関等

主にグローバルキャリア講座を依頼した大学関係者および関係団体の担当の方からは、取り組みに関して評価の声を多く頂いた。来年度へ向けて引き続き連携を確認した大学や関係団体もあり、今後とも積極的に関わりをもって行きたい。課題としては、国際機関のなかでも国際連合関係機関からの反応は厳しいものがあるのが現状である。多くの国連機関は特定のグローバルな大学へは出張授業などの実績があるものの、高校生へはその目はまだ向けられていない。大変限られたスタッフで駐日事務所を運営している現状も理解できるものの、今後とも様々な人的ネットワークを駆使して、関係をつくり、高校生もさらに未来の日本のプレゼンスを高める人材であると認識してもらえるように不断の努力を続けていきたい。来年度は、外務省国際機関人事センターとの連携協力を行う方向で企画を進めているので、ぜひ高校生に国連機関の現役の職員の方々との関わりを持って、さらなる研究課題の深化やキャリアへ対するイメージを明確化してもらいたいと考えています。

前述した SGH の HP および FB による情報発信以外にも、以下のメディアを通して本学の実践の広報を行った。

掲載	メディ	ィアー	_
T七I里从	~ , ,	1 /	昻.

*本学SGHホームページおよびフェイスブック配信分は除く

101-	34 / 1 / St		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			
	月日	掲載	タイトル	内容		
1	2014.6.2	The Japan Times 記事	Schools aim to nuture 'Super Global' leaders	SGH採択の背景およびアフリカ研修の写真紹介		
2	2014.6.7	読売新聞 朝刊記事	国際人材育成多様に「スーパーグローバル高」56校	本学の研究開発課題名紹介		
3	2014.6.30	夢の丘「玉川学園K-12父母会報」No.15	「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成を目指して	保護者向けSGH広報記事		
4	2014.10	月刊誌 全人 No.787 玉川大学出版部	特集「グローバルリーダーを育てる」	本学SGHの実践紹介		
Ę	2014.12	月刊誌 全人 No.789 玉川大学出版部	玉川学園ニュース	グローバルキャリア講座の紹介		
(2014.12.10	高校生新聞 12月号	ボツワナと南アフリカ 肌で感じた	アフリカ研修参加生徒による寄稿記事		
7	2015.2	月刊誌 全人 No.791 玉川大学出版部	玉川の先輩を訪ねてNo.65一盛和世氏	元WHOジュネーブ本部専門官のインタビュー		
8	2015.3	夢の丘 玉川学園K-12父母会報 No.16	玉川学園のスーパーグローバルハイスクール(SGH)実践について	グローバルキャリア講座と48システムの紹介		
ç	2015.3	地雷廃絶日本キャンペーンJCBLニュースレター	玉川学園スーパーグローバルハイースクールプロジェクトと地雷問題	SGHでの地雷問題への取り組み紹介		
10	2015.3	GLOBAL REPORT,島根県立出雲高校SGH月刊報	国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成を目指して	本学SGHの実践紹介		
			合計	10件		

8 次年度以降の課題および改善点

実質年度途中からの開始となった SGH プロジェクトであったため、当初から試行錯誤の連続であったものの、多くの教職員および関係の方々の協力により初年度の目的が概ね達成されたのではないかと考えており、感謝したい。とくに諸実践へ対する評価の結果から見えてきた玉川学園の特徴や課題は今後の学校全体としての研究課題や方向性を定める上で大変貴重なデータが明らかとになった。以上を踏まえて、次年度以降の課題および改善点として 4 点挙げたい。

1. 社会貢献活動へ取り組む生徒数の増加対策

「重視する」生徒群 181 名中 89 名にとどまり、国際的に活躍したいと多くの生徒が思っている割に、実際に行動をとっている生徒が少ないという結果が明かとなった。またハイパネル会議(外部評価委員会)においても「ローカルな活動からグローバルな課題へ」つなげることが肝要との指摘があった。平成 30 年度の目標値は 200 名であるので、複数年次をかけて参加生徒増加へ向けて対策が必要である。来年度の改善策としては、積極的にボランティア活動に関する情報提供を本学社会奉仕実行委員会や IB の CAS や Service@Tamagawa 担当教諭と連携していく。

2. 海外研修参加生徒数およびホームステイ提供数の増加

家庭の経済状況に配慮して生徒自身が研修参加を見送ると回答した生徒が 1/3 程度いることが明らかとなった。SGH 対象研修への費用補助は継続するものの、海外へ行かなくても年間 200 名程度来校する海外研修生徒のホームステイ提供をさらに生徒と保護者へ呼びかけていく。改善策としては、4 月中に年間海外研修予定の提示、およびホームステイ提供を経験した保護者の協力を得て、保護者会などの機会に体験談を共有していくなどの方策を実施する予定である。

3. 生徒の課題研究の強化

グローバルキャリア講座の質量の両面における改善を実施する。全体としては大変質が高い 講座を提供でき、生徒の満足度も高く終わったものの、講師の体験談に偏る傾向もみられた。来 年度は、課題研究に直結する内容を強調することと、学年単位実施の機会を増加させる。また生 徒の成果発表会も実施を計画している。

4. 大学連携と発信力の強化

スーパーグローバル大学 2 校(立教大学・関西学院大学)と玉川大学などと密接な連携関係を築くことができた。来年度へ向けて更なる大学連携数増加を計画している。また海外の大学との連携も模索し、海外研修時に訪問して講義受講、同時に日本の貧困や人権問題などの発表および質疑を通して相互理解する機会を設定していきたい。また今年度に引き続き、SNS やホームページを通して積極的に SGH の成果広報をつとめていきたい。

| ぶりがな | がっこうほうじん たまがわがくえん たまがわがくえんことうふ・ちゅうかくふ | 学校名 | 学校法人玉川学園 玉川学園高等部・中学部 | 指定期間 26~30

平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1	. 本構想において 写	ミ現する成果	具目標の設定	定(アウトカ	」ム)	<内訳> マークシート「自己	ATT 全巻 注 重わ/ ニ Hロ		
		24年度	25年度	26年度	27年度	り組んでいる」にお	いて、①強くそ	年度	目標値(30年度)
	自主的に社会貢献活動	動や自己研鑽	活動に取り組	む生徒数		う思う②そう思うを	記入した生徒。		
а	SGH対象生徒:			89 人	人			人	200人
	SGH対象生徒以外:	人	58人	134 人	人	人	人	人	20人
	目標設定の考え方 :IB(こおけるサービス	活動やラウンドス	マクエア実行委員の	の社会奉仕活	動や社会的活動に関する	3学習会などに参	加する活動	١.
	自主的に留学又は海タ	小研修に行く生	€徒数			<内訳> SGH関連(29)Round Squ 12年生派遣プログラム			
b	SGH対象生徒:			36 人		その他短期(16)長期(4		人	70人
	SGH対象生徒以外:	61人	64人	36 人	7	· · · · · ·		人	30人
	目標設定の考え方:本	校主催の提携	核留学、海绵	小研修に加え、	外部機関	利用の任意留学、海	外研修に自主	的に参加	 叩する。
	将来留学したり、仕事で	で国際的に活	躍したいと考	える生徒の割っ	合	<内訳> マークシート「高学年系 り、仕事で国際的に活			
С	SGH対象生徒:			64.6%		いて、①強くそう思う②		%	20%
	SGH対象生徒以外:	%	9.7%	58.3%		した生徒。		%	10%
	目標設定の考え方:海	外で活躍して	いる人の講演	を実施し、海ダ	外への興味	を喚起する。			
	公的機関から表彰され 者数	た生徒数、又	はグローバル	レな社会又はヒ			高い国内外の	大会にも	おける入賞
d	SGH対象生徒:			6 人		内訳()は人数> 象生徒:ボランティア・ス	ピリット賞2014(3)J	ICAエッ	6人
	SGH対象生徒以外:	人	2人	2 人		イコンテスト(1)第14回20 64回第8支部英語スピー		文大賞(1)	4人
	目標設定の考え方:大	会の情報提供	き積極的に	行い、参加にあ	うたり4 対	象生徒外: 第2回全国高 コンテスト(1)JICAエッセイ	校生英語プレゼン	テーショ	産備する。
	卒業時における生徒 <i>の</i>	04技能の総合	的な英語力の	としてCEFRのE					
е	SGH対象生徒:			42.5%		TSGL48 Scoring System(2		%	20%
	SGH対象生徒以外:	11%	9%	9.8%		ポイントに相当する検定 象生徒 77 人・対象生徒り		%	15%
	目標設定の考え方:毎	年一回、GTE	Cの受験をす	⁻ るよ う 指導し、	英語科			5.	
	(その他本構想におけ	る取組の達成	目標)						
f	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
	目標設定の考え方:								

2	. グローバル・リーダーを育	成する高校	としての活動	助指標((アウト	プット)				
L,	24年度	25年度	26年度	27年度	28	年度 2	9年度	30年度	日信順(3V平 度)	
	課題研究に関する国外の研修参加	1			アフリカンス	は参加人数> タディーズ 201 4 修1回目(6)ゲ ⁻		日(10)		
а		25人	29 人		_	<u> </u>	-ナ牧研修2凹 •	⊟(10)	50人	
	目標設定の考え方:海外で行われる	る国際機関の	ワークショップ	や体験会	などに参	加する。 				
	課題研究に関する国内の研修参加者数			\leq	<内訳() 立教×T	rse 2014 (15)				
b	٨	0人	34 人		SGH国内研修関西学院大学(19)				50人	
	目標設定の考え方:国内で行われる国際機関のワークショップや体験会などに参加する。(模擬国連、国際協力団体のイベントを含								E含む)	
	課題研究に関する連携を行う海外に	<内訳>								
С	校	1校	3 校		St.Cyprian's School (南アフリカ) Maru A Pula School (ボツワナ)		校	10校		
	目標設定の考え方:高校レベルは打	票設定の考え方: 高校レベルは提携校、IB校、ラウンドスクエア校、 ゲーテ校 (ドイツ)						r '声 ## ナ -+- Z	· •	
	<内訳>									
d		1人	27 人		⑤林氏(5人				
	玉川大学、関西学院大学国際学部	<u>.</u> の先生等から	定期的に学べ	る機会。		述(大学生 7 名).		原氏		
П	[GAKKOプロジェクト] 海外大学生10人 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数									
۵		_			(< 内訳 >	ルキャリア講座]			00.1	
Ŭ	10人	17人	9 人		①伊藤氏、 氏、	③小野山氏、⑤)小林氏、⊗ンワ	アンタ氏、⑨浦	20人	
	目標設定の考え方:グローバルキャ	*リア講座やJI	ICA TONESCO)、世界顕)チクワニネ氏、(②寺田氏、 ⑤清	水氏		
	グローバルな社会又はビジネス課題	頃に関する公2	益性の高い国	内外のプ	<内訳>	∠=> .= ∃ L 204	* 广曹(20)			
f		30人	50 人	\leftarrow	関西学院	イコンテスト 201 大学英語エッセ	イコンテスト20:	14応募(6)	60人	
	目標設定の考え方:貧困問題や人権問題に関する国内、国外のコンラ					ア・スピリット賞: 14年度立命館話				
	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)				第2回全国高校生英語プレゼンテーションコンテスト(2)					
g	104人	74人	133 人	7	<内訳>			N	120人	
	日標設定の考え方:IBやラウンドスクエアを通じて留学生、外国人生徒 アメリカ(6)オーストラリア(43)台湾(38)シンガ									
	先進校としての研究発表回数					ポール(2)ブラジル(29)ドイツ(12)カナダ(1)デ ンマーク(1)スイス(1)				
h	1回	10	4 💷		回	回	回		5回	
	目標設定の考え方:本校主催の研	 究発表会を年	<u>-</u> に一度開催す	る。ラ	シフクエ	・ アのアジア地	域会議に参	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	を行う。	
Г	 	 犬況		~+±	1十つ祭 エ	川大学学術研:	空配主催 in⊃	·+ -= 1)	
	〇整備されている △一部整備さ		:整備されてい	1.50		.川入子子何研. NHCRユースOB]	
ľ		Δ		J- 0				T	0	
		■ 更新を心がける	■ る。生徒達自身に	: こよる情報:	<u></u> 提供の機会		<u>・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</u>		 fす。	
	(その他本構想における取組の具体的指標)									
ј							-			
	 目標設定の考え方:		<u> </u>		i	<u> </u>	<u> </u>	1		
	ロボスペックへり、					<内訳>	 (延べ人数でに	けなく実人数)		
	調査の概要について> 生徒を対象とした調査について					・IB(9~12 ・自由研究	2年) =37 名 ピグローバルス	タディーズ = 2 6		
		24年度	25年度	26年度	Ę 27		スタディーズ <i>/</i> 重履修者= 24 名	´WSE履修者=: ≦	29名 度	
	全校生徒数(人)	963	918	902		・ラウンド	スクエア実行委	員会=65名		
	SGH対象生徒数			181						
l	SGH対象外生徒数			711						

1'	1' 指定4年目以降に検証する成果目標								
		24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	日信順(35年 度)
	国際化に重点を置く大学 へ進学する生徒の割合								
а	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	12%
l	SGH対象生徒以外:	11%	18%	%	%	%	%	%	7%
L	目標設定の考え方:該当大学から入試担当者を招く機会を増やし、希望する専攻分野のある生徒に関しては担当者の紹介を行う。								
	海外大学へ進学する生徒の人数								
b	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	15人
l	SGH対象生徒以外:	2人	5人	人	人	人	人	人	5人
	目標設定の考え方:海外の大学の留学フェアなどを頻繁に実施し、情報提供、留学のアドバイスを行う。								
	SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
c	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	50%
ľ	SGH対象生徒以外:	-	_	%	%	%	%	%	10%
	目標設定の考え方:将来の希望に適った課題研究の設定が幅広く行えるようにし、講義やワークショップへの参加で専攻を深めさせる。								
	大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
d	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	20人
"	SGH対象生徒以外:	_	_	人	人	人	人	人	10人
	目標設定の考え方:高校卒業後も引き続き情報提供を行い、特に海外インターンシップなどの紹介を行い、語学留学以外の生徒を増やす。(1'b含む)								

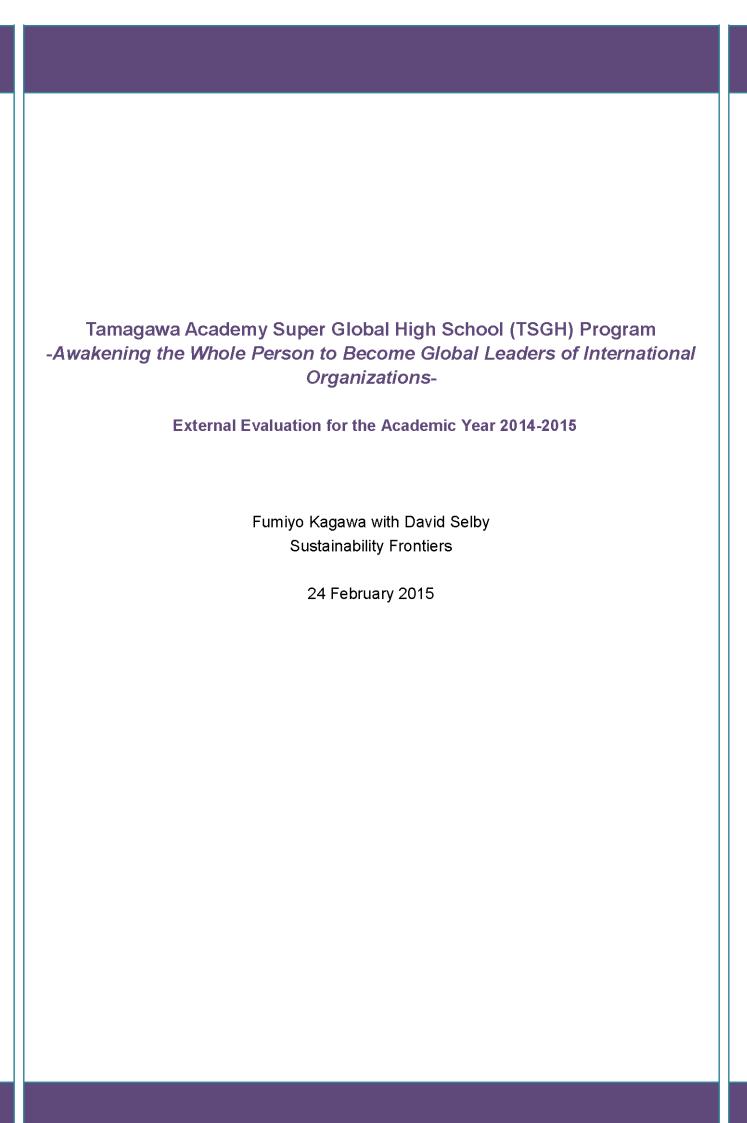


Table of Contents

Section 1: Focus of the Study	3
Section 2: Research Methodology	7
Section 3: Overall Findings	9
3.1 Key stakeholder levels of interest and participation in the TSGH program	9
3.2 TSGH impacts on students	12
3.3 TSGH operational issues	16
Section 4: Recommendations	22

About the Authors

Dr. Fumiyo Kagawa and Dr. David Selby are, respectively, Research Director and Founding Director of Sustainability Frontiers, an international academic non-governmental organization based in the United Kingdom and Canada. It engages in research and innovation in the broad fields of global education and sustainability education. Both Dr. Kagawa and Dr. Selby have worked with various UN organizations (UNESCO, UNICEF), international NGOs (Save the Children, Plan International) and government authorities in curriculum and pedagogical development, teacher professional development and educational research (including student assessment and program/curriculum evaluation). Visit the Sustainability Frontiers website http://www.sustainabilityfrontiers.org/ for further information.

Section 1: Focus of the Study

This study is a first external evaluation study of the five-year Tamagawa Academy Super Global High School (TSGH) program, *Awakening the Whole Person to Become Global Leaders of International Organizations*, launched in June 2014. Tamagawa Academy is one of 56 high schools selected and subsequently funded by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) for the nationwide Super Global High School (SGH) program. Selected SGH schools are requested to demonstrate their efforts in developing 'global human resources' (i.e. those who have capacities to identify and solve problems in global societies or those who are active in global business) through their own unique curriculum development.¹

Tamagawa Academy, founded in 1929, is a private education institution which provides education at all grades (K-12, university and post-graduate levels) within a single campus located in Machida, Tokyo. Tamagawa Academy has longstanding commitment to whole-person ('zenjin') education and international education.² Since 2007, it has offered the International Baccalaureate (IB) programs³ alongside a general academic course. Tamagawa Academy has developed extensive international programs and partnerships with schools around the world. Every year it sends about 300 students to study abroad and hosts about 200 foreign students. Tamagawa Academy is the only Japanese school affiliated to Round Square, an international school federation consisting of 150 schools in 40 countries that organizes international conferences where student representatives engage in discussion of international and environmental issues and conduct volunteer work. International perspective and contribution is one of six IDEALS of learning⁴ promoted by Round Square.⁵

The Tamagawa Academy Super Global High School program aims at nurturing whole person leadership capacities among students (e.g. communication, language and leadership skills; acceptance of different cultures; understanding of global issues; a strong will to take action) so that they choose their future career with international organizations such as the United Nations and international NGOs. While there are many SGH schools which are primarily concerned with human resource development for global business, Tamagawa Academy made a conscious decision to focus

¹ http://sgh.tamagawa.ed.jp/en/sgh

http://www.tamagawa.jp/en/

^{&#}x27;Zenjin education' and 'global/international education' is two of twelve precepts of education at Tamagawa Academy. Other percepts include: 'respect for individuality', 'self-study and autonomy', 'highly effective education', 'education that is scholarship', 'respect for nature', 'trust within the school community', 'Rosaku education', 'uniting opposites', 'One who walks the extra mile and one who is a pioneer' and '24 hour education.'

³ The International Baccalaureate Middle Years Programme for grades 7-10 and the International Baccalaureate Diploma Programme for grades 11-12.

⁴ The six IDEALS of learning are: Internationalism, Democracy, Environment, Adventure, Leadership and Service. https://www.roundsquare.org/about-us/

⁵ http://sgh.tamagawa.ed.jp/en/index

on a humanitarian contribution to the world. Such an emphasis is very much in line with Tamagawa's philosophy of whole person education and the spirit of volunteerism. TSGH is considered as an 'extension' of the Academy's long history of and commitment to international education.⁶

The TSGH program targets all the students from grades 9 to 12 (902 students). It has two stages: 'stage for nurturing basic skills' and 'stage for exploring issues'. Formal and extra-curricular activities are offered simultaneously throughout the year. Courses and activities identified and offered during the first year of the TSGH program are summarized in *Table 1*.

Students are encouraged to choose one from five research themes that many international development organizations address (i.e. poverty, human rights, the environment, diplomacy and international cooperation) so that they can develop their capacities on the chosen theme through the program.

⁶ Tamagawa Academy President/CEO interview.

Table1. TSGH Program Courses/Activities for Year 1

	Course/Activity Names	Purposes	Participation and Delivery Types	Target Students (number)
Stage for Nurturing Basic Skills	Global Career Seminar Series	 Developing student understanding of latest global issues through expert guest speakers Stimulating student interests in choosing future careers in international organizations and their desire to be actively engaged with world issues 	 Voluntary (lunch time) and compulsory (as part of class/ whole grade requirements) participation Once or twice per month 	All grades 9-12 students (902)
Stage for I	Tamagawa Super Global Leaders (TSGL) 48	 Stimulating student interests in actively participating in various TSGH activities Recording and recognizing student achievements using the TSGL 48 point system 	Through the internal computer scoring systemOngoing	All grade 9-12 students (902)
senss	World Studies	 Understanding the link between social issues and the students themselves Imagining the perspectives and feelings of those who live in different cultural and social contexts Empowering students to become active and responsible agents of change in creating a more equal and democratic society at all societal levels 	 Optional subject Offered in English and in Japanese in a parallel timetable 	Grade 12 (29)
Stage for Exploring Iss	Global Studies	 Learning about global issues such as poverty, human rights, the environment, diplomacy and international cooperation Researching a chosen topic identified by the student and reporting the study results through a school exhibition, presentation meetings and/or an essay contest 	Optional subject	Grades 10-12 (26)
	Model United Nations and Section MUN	Learning how to express one's own point of view on global issues and developing communication and negotiation skills in both English and Japanese by simulating UN conference procedures	Optional subject	Grades 9-12 (24)

Tamagawa	•	Developing a strong and flexible mind,	•	Compulsory (for	Grade 10
Adventure		building trusting relationship with peers		Grade 10)	(227);
Program (tap)		and nurturing creativity, leadership and	•	Optional subject	Grades
		problem solving skills through hands-on		(Grade 11-12)	11-12 (23)
		activities working in a group			
African Studies	•	Learning about real life of and issues	•	Optional study	Grades
		faced by people in Botswana and South		abroad	9-12 (13)
		Africa through a study abroad program		extracurricular	
				program	
Goethe-	•	Learning about culture and life in	•	Optional study	Grade 9-12
Gymnasium Visit		Germany through Goethe-Gymnasium		abroad	(6 and 10)
		class participation and home stay		extracurricular	
		experience with families of		program	
		Goethe-Gymnasium students			
Tamagawa	•	Organizing a student-led conference	•	Student-led	Grade 9-12
Round Square		focusing on chosen world issues/topics		extracurricular	(65)
International		at Tamagawa Academy		participation	
Conference	•	Broadening student perspectives and	•	Once a year	
		improving communication and problem			
		solving skills through discussions with			
		peers			

Commissioned by Tamagawa Academy, this external evaluation of the TSGH program is deemed important as a means of understanding the preliminary program's impact on students and to inform the future direction of the TSGH curriculum development by reflecting upon key stakeholder experiences and perspectives. Tamagawa Academy is the only SGH school which has included an external evaluation component within their program activities.

The main purposes of this external evaluation study are as follows:

- To explore key stakeholder perspectives on the first year TSGH program implementation;
- To examine preliminary impacts of the TSGH program on students;
- To identify key issues and to make recommendations for the TSGH program in successive years.

Section 2: Research Methodology

The research methodology employed for the evaluation has been one of desk-based research into available program documentation, analysis of internal evaluation data coupled with empirical research using questionnaire surveys as well as focus group and one-to-one key stakeholder interviews.

Two types of questionnaire surveys were developed targeting student beneficiaries and their parents. Among all the beneficiary students from grade 9-12 (902 students), surveys were conducted with 180 students, i.e. those specifically identified for program evaluation purposes, and parents of those 180 students. The draft survey forms were finalized in Japanese after incorporating feedback from the TSGH coordinator. Surveys were implemented from 7 to 22 January 2015, orchestrated by the TSGH coordinator. 126 students completed the survey, while 125 parents completed the survey. The return rate for the student group is 70 per cent and for the parent group is 69.4 per cent. Survey data was analyzed according to percentages and frequencies. Qualitative data was categorized and analyzed according to the emerging themes.

Semi-structured key stakeholder interviews were conducted at Tamagawa Academy from 13 to 15 January 2015.8

Individual interviews, each lasting from 30 to 45 minutes, were held with senior managers including:

- Tamagawa Academy President/CEO;
- Associate Headmaster for the Upper Secondary Division;
- Curriculum Coordinator for the Upper Secondary Division.

Individual or focus group interviews were held with teachers in charge of the following courses and activities pertinent to the TSGH program, each lasting about 30 minutes:

- Global Career Seminar Series;
- Tamagawa Super Global Leaders 48;
- World Studies:
- Global Studies;
- Model United Nations and Section (MUN);
- Tamagawa Adventure Program (tap);
- African Studies;

MEXT SGH target sheet (TSGH, 2014).

⁸ Interviews were conducted in Japanese, except for one interview in English with instructors of the World Studies in English (WSE) course.

- Goethe-Gymnasium Visit;
- Tamagawa Round Square;
- English;
- Student presentations.

In addition, one focus group interview was held involving eight teachers from the TSGH steering committee for about 60 minutes.

Student focus groups, each lasting about 30 minutes, were held with:

- 8 students taking the World Studies course;
- 6 students taking the Global Studies course;
- 7 students taking the Model United Nations and Section (MUN) course;
- 6 students involved in the Tamagawa Adventure Program (tap);
- 7 students in the 2014 African Studies program;
- 6 students in the 2014 Summer Goethe-Gymnasium Visit;
- 7 Steering Committee members from Tamagawa Round Square;
- 7 students from the top 10 of the Tamagawa Super Global Leaders (TSGL) 48 score list.

In principal, student participants were selected randomly from the name lists. In the case of the 2014 Summer Goethe-Gymnasium Visit, all the participants were invited due to the small cohort.

All the interviews were audio-recorded with prior permission from the interviewees. Interview notes were taken from the recorded interview data and qualitative data were coded according to emerging themes. Following analysis of the empirical research data and review of all available and relevant program information, subsequent sections of this report were written.

Section 3: Overall Findings

3.1 Key stakeholder levels of interest and participation in the TSGH program

A preponderance (74.6 per cent) of student survey respondents reports that they 'strongly agree' or 'agree' that they have a strong understanding of the goals and purposes of TSGH. A majority of respondents (65.4 per cent) consider that they clearly understand the various options and avenues for participating in TSGH, while 32.5 per cent of respondents report that participation options and avenues are not clear to them. As ways of clarifying the participation avenues for TSGH, one student suggests distributing a list of TSGH activities and another suggests circulating a monthly TSGH schedule among students.⁹ In terms of the TSGH involvement, about a half of the respondents express that they have not had a satisfactory number of opportunities to participate in TSGH activities this year. A few IB students highlight that their timetable and study demands make their participation in TSGH very difficult.¹⁰

School staff members have expressed their pleasant surprise at a higher level of student participation and interest in the TSGH program than they had anticipated, especially in the Global Career Seminar Series (voluntary participation during the lunch time). Teachers have noticed, however, that there is a wide gap between the small number of enthusiasts (about 50-60 students) who regularly attend TSGH activities and those who are not interested in the program.¹¹ They have commonly observed that girls participate more often than boys and those who are good at English are more likely to participate than those who are not good at English.¹²

The student participation gap in the TSGH program is also indicated in the Tamagawa Super Global Leaders (TSGL) 48 scores (see *Figure 1*).¹³ Although there are some issues concerning the TSGL 48 scoring system itself (see p.19), the scores reveal no or little involvement among the majority of the target students during the first year. Three quarters of students have only 1 to 10 points. The lower the grade, the bigger the percentage of students with only 1 to 10 points (i.e. in grade 9, 83.2 per cent score 1-10, while the equivalent figures for grades 10, 11 and 12 are, respectively, 73.1 per cent, 72.6 per cent and 70.9 per cent). Among those who have a higher number of points (i.e. more than 41), there are three students in grade 12, six students in each grade 11 and in grade 10 and four students in grade 9.

⁹ External evaluation student survey.

[&]quot; Ibid.

¹¹ Associate Headmaster interview, Curriculum Coordinator interview, STGH steering committee teacher focus group.

¹² TSGH steering committee teacher focus group.

¹³ TSGL 48 scores (TSGH, 9 February 2015).

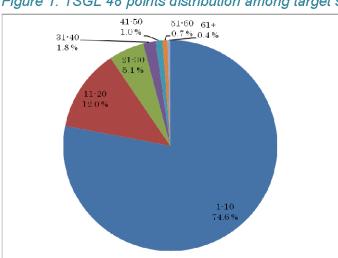


Figure 1. TSGL 48 points distribution among target students

Staff members agree that involving the wider student population, especially those who are not very interested in TSGH, remains a challenge. This challenge is also linked to the fact that the TSGH program started in June 2014 when the academic year began in April 2014. Students had already chosen their courses for the year, a fact which seems to have inhibited student involvement in TSGH.¹⁴

Students themselves have also noticed the gap among the student population. 'Those who come to the TSGH program are minority and they are always the same students', a grade 10 student says. Some students have encouraged their friends to come to the lunch time lecture series but they were not successful.¹⁵ They point out the importance of creating more mechanisms and opportunities to attract a wider student population. Developing advertising methods which are more appealing to the student population is one while frequently informing all the students during morning homeroom meeting time is another.¹⁶

In terms of awareness of the TSGH program among parents, 80.8 per cent of parents completing the survey (i.e. 101 parents) report that they know that it started this year. Of this number 76 reported that they have heard about the program from school newsletters/printed materials, 56 reported learning of the program from their child, 38 reported learning of the program from the school website, 28 from parental meetings at school, 6 from other parents, and 6 from public advertisements or newspapers. A preponderance of parent respondents sees the TSGH goals and purposes as 'very important' or 'important' to their child (95.2 per cent in total). Parents generally prefer 'open' and 'wide' participation in TSGH across student population as well as TSGH implementation across the whole institution as against involving just a small 'elite' student population. In the words of one parent, Tamagawa

¹⁴ Tamagawa Academy President/CEO interview.

¹⁵ Top 10 TSGL 48 student focus group.

¹⁶ Ihid

Parents could offer as many sources as they wished.

Academy should 'create the environment and mechanisms where many students participate in TSGH'.¹⁸ Although general awareness toward TSGH exists among parents, from the data available it is difficult to assess the depth of their awareness and understanding. It is nonetheless important to actively inform parents of TSGH program details and progress, as some parents suggest. There is also a suggestion that the school should disseminate TSGH information to the general public including parents of prospective students.¹⁹

Due to financial support given by TSGH to study abroad program participants, the number of participants in the African Studies and Goethe-Gymnasium Visit programs have increased this year. Clearly financial support made participation easier for some families. However, there are students and families who feel that participation in study abroad programs is still difficult mainly due to financial considerations. Although it is invaluable to continue and increase study abroad opportunities, both parents and students underline the importance of creating and enriching learning and action opportunities within Tamagawa Academy itself and in Japan. The following words of a grade 11 student capture the point:

It is difficult for me to participate in programs in foreign countries because of financial constraints, but I would love to contribute to solving social problems through voluntary work. Japan is part of the world and it is easy to participate in projects in Japan, for instance, in Fukushima where people still face a lot of unresolved problems.... We should not forget the importance of solving global issues existing in our own country.²⁰

In further enriching the existing international education programs in Tamagawa Academy, taking full advantage of foreign students regularly visiting and studying in Tamagawa is also an important area for TSGH curriculum development.²¹

In terms of teacher perceptions, they 'strongly agree' (44 per cent) or 'agree' (50 per cent) with TSGH activities this year. However, the high level of acceptance does not necessarily mean that all teachers are equally active in TSGH. The first year of implementation was led by a small number of steering committee members. Although there is a need to expand involvement and ownership of TSGH more widely across all the teachers, there is a shared concern that it is difficult for some teachers to actively contribute to TSGH even if they are very keen to do so. Decreasing numbers of full-time teaching staff and existing heavy teaching loads mean that there is a limit to what very busy teachers can do for the TSGH program. Appreciating the institutional atmosphere and ethos which very much welcome new ideas and initiatives, teachers would like to have more active support from

¹⁸ External evaluation parent survey.

¹⁹ Ibid.

²⁰ External evaluation student survey.

²¹ Associate Headmaster interview.

²² Internal teacher survey results (TSGH, 28 January 2015).

school management level in terms of human and financial resources for the TSGH program. Teachers also need time and resources for curriculum development.²³ It might be worth negotiating with MEXT regarding their current funding allocation regulations so that part of the funding could be used to hire additional teaching staff members and for teacher professional development.

3.2 TSGH impacts on students

It is too early to assess TSGH program impacts on student beneficiaries at this early stage of program implementation, but understanding preliminary tendencies and evidences of impacts on student learning and career prospects will give important insights in developing TSGH curriculum strategies (and in refining mid-term and final project evaluation data collection tools in due course).

In terms of student interest in working in international organizations, more than a half of student respondents report that their interest has increased due to the TSGH experience this year (see *Figure 2*).

When asked if the TSGH program has helped develop their knowledge, skills or attitudes/values necessary to become a whole person global leader, only around 30 per cent of the respondents answer affirmatively (see Figures 3-5).

Figure 2. TSGH influence on student career interest in international organizations

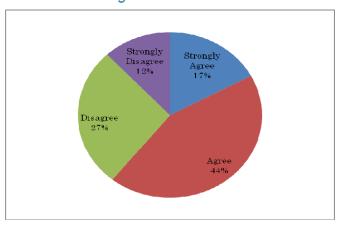


Figure 3. Student self-evaluation: Knowledge development

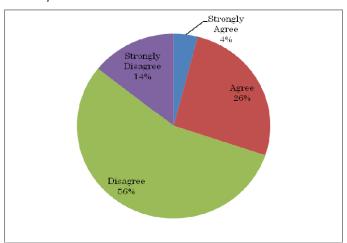
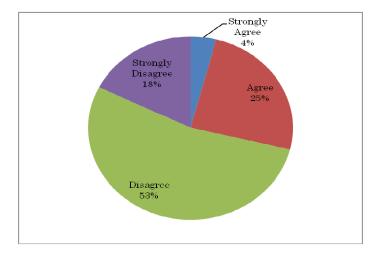
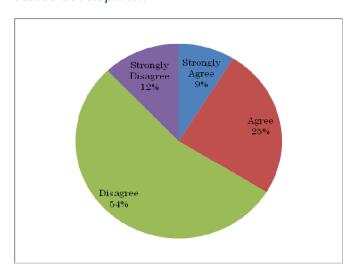


Figure 4. Student self-evaluation: Skills development



²³ TSGH steering committee teacher focus group.

Figure 5. Student self-evaluation: Attitudes/ values development



Student respondents report some examples of knowledge, skills and attitudes/values developed through the TSGH program (see *Table1*).²⁴

Table 1. Examples of whole person global leader capacities which students report they have developed

Knowledge

- World issues (e.g. issues of poverty and human rights)
- Experiences of guest speakers
- Importance of team work
- International organizations
- Practical steps to get positions in international organizations
- Interconnectedness between myself and world issues

Skills

- Consensus building
- Taking multiple perspectives in approaching an issue
- English language
- Communication
- Leadership
- Negotiation
- Presentation
- Problem solving
- Research (e.g. gathering information)
- Working in a team to achieve a common goal

Attitudes/values

- Awareness of own biases, stereotypes and prejudices
- Awareness and appreciation of own taken-for-granted circumstances in Japan
- Shedding narrow, self-centered and nationalistic perspectives and attitudes
- More courage to speak up (particularly in English)
- Empathy to others
- Flexibility
- Pro-activeness (in taking action and in learning)
- Respect for differences
- Volunteerism/helping others

When students were asked to write some examples of knowledge, skills and attitudes/values they think they have developed, there was great confusion between the three categories. For example, knowledge examples appear in attitudinal or skills sections or vise versa. Examples in *Table 1* have been re-organized by the researchers.

It is worth speculating on possible reasons why a preponderance of student respondents (about 70 per cent) do not think they have acquired the knowledge, skills or attitudes/values necessary to become a whole person global leader through the TSGH program. One reason is down to their vagueness on what knowledge, skills and attitudes/values go to make 'a whole person global leader'. Although there is a brief depiction of the ideal profile of a whole person global leader in the TSGH proposal to MEXT, students have not been informed of this. 25 Lacking a concrete grasp of the required competencies, it was difficult for them to assess whether or not they have developed capacities relevant to their becoming such a leader. Another reason is most likely linked to optional participation in most of the TSGH courses/activities as they are taken by a small number of students (see Table 1) with the majority of students remaining less exposed to TSGH learning opportunities during the first year. As mentioned earlier, the fact that individual academic course selection was already made when the TSGH program was launched has impacted negatively on the level of program participation. Increasing the number of students actively involved in TSGH is one way forward, but developing the ways of deepening student learning is equally important for TSGH curriculum development. The issue of TSGH curriculum development will be further discussed in a subsequent section (pp.16-8).

In terms of TSGH program impacts on the students, a preponderance of teachers (71.4 per cent) is in general agreement that the program has led to changes among students and has increased the level of student interest in global issues (66 per cent). 42 per cent of teachers think student motivation to learn English has also increased.²⁶

Most of the teachers who are in charge of a specific TSGH course/activity have used surveys to gather data concerning student perceptions related to the TSGH goals as well as student views on their learning.²⁷ The survey proforma developed by the TSGH coordinator was widely used, while teachers in the African Studies course have developed an additional post-trip survey. *Box 1* highlights some evidence gathered from the surveys implemented by the teachers.

Box 1. Course/activity specific impacts on students: Some survey results

- In the World Studies course, all student respondents agree that the course has helped them 'image global issues' and 'understand the link between myself and contents covered in the course.' 96 per cent of course respondents report that they have strengthened their interest in international organizations and their work.²⁸
- By the end of a first half of the course, 80.9 percents of students in Model United Nations and

²⁵ TSGH coordinator (email, 19 February, 2015).

²⁶ Internal Teacher Survey Results (TSGH, 28 January 2015).

²⁷ No questionnaire survey data for Tamagawa Round Square.

²⁸ 2014 World Studies survey (TSGH, 19 December 2014).

Section (MUN) report that they have understood the procedures of MUN; 47.6 per cent of them think they have developed skills for consensus building; 76.2 per cent of them report that the course helped them to deepen their interest in the (international) field.²⁹

- 92.3 per cent of African Studies course participants report that their perspectives or behaviors have changed due to the course experience. For instance, students report that their prejudice toward Africa and African people has diminished.³⁰
- Surveys of student responses to each of the lectures in the Global Career Lecture Series reveal a varying degree of satisfaction with the presentations given by visiting speakers.³¹

Teachers' efforts to gather evidence on the TSGH program, however, leave space for improvement. First, the survey proforma used this year has too many statements which are rather general and not specific enough about the course/activity concerned (e.g. 'currently I am involved in volunteer activities and seminars outside of the school'; 'I am interested in various TSGH activities', 'I have an image that Tamagawa Academy is a global high school'). Course/activity-specific surveys should be improved so that they are more focused on knowledge, skills and attitudes/values that target students have developed. To gather data on more general aspects of the TSGH program (e.g. student perceptions of the program, student intentions, student behavioral changes), separate surveys should be conducted at the beginning and the end of each academic year with all beneficiary students. There should also be mechanisms put in place to assess cumulative TSGH program impacts on students (especially for new grade 9 students who will experience the TSGH program over four years). Developing TSGH learning outcomes will be helpful not only for strategically developing the TSGH curriculum but also for systematically assessing student learning impacts.

When asked if they have noticed any changes in their child due to her/his involvement in the TSGH program, 55.2 per cent of parent respondents answer affirmatively. A number of parents report that they have noticed that their child has broadened their perspective in general and her/his interest in world issues and foreign countries has increased. For instance, a parent of a grade 10 student writes, 'The African Studies program, which is very different from normal foreign travel, was an invaluable experience to my daughter. She began to speak about issues of poverty and disadvantaged children at home from her own perspective with family members.'32 Similarly, a parent of a grade 12 student reports 'my daughter is more interested in world issues and especially in guaranteeing basic human needs, thanks to the World Studies course. World issues are now very often discussed at home.'33 Some parents have noticed that their child has become a more self-confident and responsible person or has developed a more proactive attitude to whatever s/he does. Other parents also report that their child has found clearer career directions and study purposes than before, while others think that the

15

²⁹ Model United Nations and Section MUN survey (TSGH, 10 July 2014).

³⁰ African Studies Program after trip survey (TSGH, 2014).

³¹ Global Career Lecture Series surveys (TSGH, 17 July-14 November 2014).

³² External evaluation parent survey.

³³ Ibid.

TSGH program has stimulated student motivation to improving their English abilities.34

In addition to understanding if and how the TSGH program has impacted beneficiary students, understanding what pedagogies have impacted student learning more profoundly is also important for TSGH curriculum development. One teacher shares her surprise at encountering a few students crying as they were deeply touched by speeches during the Global Career Lecture Series and she says 'we never know what influences individual students and it is therefore important to sow a lot of seeds for learning.'35 Teachers in charge of the African Studies program point out that the greater (cultural) shock students encounter, the greater their leaning becomes. They have witnessed students in the African Studies program become more aware of their own stereotypes, begin to realize diverse realities of poverty in Africa and appreciate differences and similarities between themselves and their African peers through their first hand field experience.³⁶ A teacher in charge of the Tamagawa Adventure Program (tap) interestingly reports higher team work competencies developed among female students compared with male students. A parent of a grade 12 student reports: 'I have witnessed a tremendous change in my son. He has become very interested in study abroad programs and world affairs thanks to the World Studies course. He now watches the news critically. Previously he never showed his interest in international matters, nor in English learning.'37 A key question to explore is: what are the common threads in pedagogical approaches used in the TSGH program which have triggered deeper learning among students? This needs to be linked to the TSGH goal of 'consulting education ideals from IB' to develop 'educational methods and curriculum that encourage peer to peer interactions in classes.'38

3.3 TSGH operational issues

Curriculum development

Launching the TSGH program in June 2014, it has been a demanding year for those who led the TSGH program. Although there are two brand new initiatives created for TSGH (i.e. Global Career Seminar Series and the Tamagawa Super Global Leaders 48 point system), other TSGH affiliated formal and extra-curricular activities existed before and they continued to be offered during this academic year with differing degrees of adjustment. The Tamagawa Academy President/CEO says, 'It was a year to solidify our foundation. We can progress our work from now on.' Similarly, other teachers see the first year as a preparatory year before progressing TGSH curriculum development. According to the curriculum coordinator, 'It was the year when we have made sure that we already

³⁴ Ibid.

³⁵ TSGH steering committee teacher focus group.

³⁶ 2014 African Studies instructor interviews.

³⁷ External evaluation parent survey.

http://sgh.tamagawa.ed.jp/en/overview

Tamagawa Academy President/CEO interview.

have SGH-appropriate programs in our school.'40 It is a strength of Tamagawa Academy that various TSGH curriculum activities have been implemented within a broad framework of their international education offerings.

However, what is currently missing is the forging of purposeful links between TSGH curricular activities so that student learning can be widened and deepened over the years. Some teachers note that that TSGH cross-curricular connections are so far made by individual students through their options, or that the link has been made to some degree via the Tamagawa Super Global Leaders 48 point system. TSGH offers a great opportunity to examine and build connections among currently isolated TSGH curricular activities. Tamagawa Academy has experienced interdisciplinary curriculum development by linking different science subjects under the SSH program⁴³, so they are well placed in applying their experience to SGH curriculum development.

For the second year of TSGH operation, it is vital to clarify a vision of TSGH curriculum development and concretize the ways in which each teacher can contribute. The Associate Headmaster says, 'For the second year of the TSGH implementation, it is important for each teacher to be able to say how she or he is contributing to TSGH, which will help to improve the overall TSGH quality implementation.'⁴⁴ In this regard, holding a participatory staff workshop, preferably before finalizing the second year implementation plan, would be strategically important so that teachers themselves identify and have a sense of ownership of current and future curricular links and opportunities for TSGH curriculum development.

In progressing TSGH curriculum development, there are other issues that need to be addressed. First, should TSGH curriculum development focus on optional courses and/or mandatory courses? Another related question is: should TSGH curriculum development target a small number of students or a wider student population? Teachers point out that MEXT's interest is the former (e.g. creating a specialized course for 30-40 students) and Tamagawa Academy's interest is the more inclusive and holistic approach of the latter. In fact, a number of students emphasize the importance of creating more opportunities where all students can participate and suggest making TSGH activities compulsory (e.g. embed TSGH within the formal curriculum) so that those who are not interested in the topic now might be interested later. But such an option is challenging due to already crowed formal curriculum space. According to the curriculum coordinator, curriculum development is not a matter of simply increasing the curriculum content but also a matter of carefully selecting and synthesizing the

⁴⁰ Curriculum Coordinator interview.

⁴¹ World Studies teacher interview; Global Studies teacher interview; MUN teacher interview.

⁴² TSGH steering committee teacher focus group interview.

⁴³ MEXT launched and funded the Super Science High School (SSH) program. Tamagawa Academy is in the second phase (7th year of) of implementation.

⁴⁴ Associate Headmaster interview.

⁴⁵ External evaluation student survey.

curriculum content so that both teachers and students will not be overwhelmed by new content. 46 'Ideally,' he continues, 'it is good if there are formal curricular spaces where students can synthesize their learning.⁴⁷

In the curriculum development process, it is also important to create an enabling environment for teachers. Although teachers have great enthusiasm for improving the content and pedagogies of their courses, everyday demands at school tend to take away their time and space for curriculum development.48 The school management team should actively look into this issue and consider offering necessary support to teachers during the TSGH funding period.

Characteristics of whole person global leader'

As touched upon earlier, what is currently lacking in the TSGH curriculum is a framework and details of learning outcomes. It is not specified what sorts of knowledge, skills and attitudes/values should be developed in an age-appropriate through the **TSGH** manner curriculum. The Academy's depiction of a whole person global leader included in the proposal to MEXT (see p.14) needs to be further elaborated. Box 2 summarizes images of whole person global leaders put forward by students during focus group interviews.49

Box 2: Student images of whole person global leaders who choose their career in international organizations

They are those who:

- are able to accept differences
- have wide and multiple perspectives
- have field-based experience
- have communication skills (these are not necessarily about English only, and include 'human communication', 'inter-cultural communication' and 'non-verbal communication')
- have English language skills
- have ability to express their own opinions clearly
- have coordination and facilitation skills
- are able to motivate others
- are proactive
- are kind and have empathy towards others
- are flexible
- have strong motivation, commitment and perseverance
- are able to live in any environment

Building upon the vision of the ideal learner profile of the International Baccalaureate Program (see Box 3) and Tamagawa Academy's longstanding twelve precepts of education, Tamagawa Academy is well placed to concretize its vision of whole person global leaders for the TSGH program. The process

Curriculum Coordinator interview.

World Studies teacher interview; Associate Headmaster interview.

External evaluation student focus group interviews with students from: the World Studies course, the Global Studies course, MUN course, tap, the 2014 African Studies, the 2014 Summer Goethe-Gymnasium Visit, Tamagawa Round Square Steering Committee members, top 10 of the TSGL 48 score list.

of concretizing the whole person global leader profile should go hand in glove with determining TSGH knowledge, skills, attitudinal/value curriculum learning outcomes.

Box 3. IB learner profile⁵⁰

'The aim of all IB Programmes is to develop internationally minded people who, recognizing their common humanity and share guardianship of the planet, help to create a better and more peaceful world.' IB learners strive to be: 'inquirers; knowledgeable, thinkers, communicators, principled, open-minded, caring, risk-takers, balanced, reflective.'

The Tamagawa Super Global Leaders (TSGL) 48 scoring system

The Tamagawa Super Global Leaders (TSGL) 48 scoring system is an internal evaluation system through which students accumulate points when they participate in international education-related initiatives and pass specific English exams according to the points criteria created by the TSGH steering committee (see Box 4). Individual scores are kept in the internal computer system (intranet) and students can see their own scores. Every year, students who have obtained high points will receive a school certificate of commendation.⁵¹

Box 4. TSGL 48 points: Some criteria

- > 5 points: Win a prize in a competition using English; Win a prize in a Japanese essay competition; TOEIC 785; TOEFL87; GTEC 650
- ➤ 4 points: Attend a study abroad program; Become a host family for an international student; Win a prize at the internal student recitation contest; TOEIC 550-784; TOEFL 57-86; GTEC 550-649
- > 3 points: Participate in a Global Career Seminar; Take the MUN course; Apply for an English essay competition; TOEIC 385-549; TOEFL 40-56; GTEC 385-549
- 2 points: Participate in the World Studies course; Participate in the Global Studies course; Become a steering committee member of the Tamagawa Round Square
- 1 point: Participate in the Tamagawa Adventure Program (tap); attend an event organized by an embassy

Although the intention of this evaluation system is to motivate students to actively participate in various activities, there are those who are concerned about the scoring system itself. For instance, one parent worries that gathering scores might become the aim of TSGH.⁵² Similarly, a teacher thinks motivating students through an external inducement (such as point system) is not appropriate and

http://www.ibo.org/contentassets/fd82f70643ef4086b7d3f292cc214962/learner-profile-en.pdf

The students who will receive a school certificate of commendation will be determined by early March 2015.

⁵² External evaluation parent survey.

student genuine self-directed motivation in participation should be nurtured.⁵³ Both a parent and a student suggest that points should not be overemphasized as there are students who cannot attend study abroad programs (and who are therefore disadvantaged by this scoring system).⁵⁴

Another issue concerning the TSGL 48 scoring system is the current points criteria. Some students feel that the current points system is 'unbalanced.' For instance, they can obtain 3 points by attending the lunch time lecture for 30 minutes, while they can get only 4 points by attending a two-week study abroad program.⁵⁵ Reflecting on this year's experience, it is worth re-examining the current points criteria. As there are students who expressed keen interest in offering feedback on the points system⁵⁶ and teachers who also welcome student feedback,⁵⁷ some mechanism for consulting with students should be put in place before the next academic year.

Including the English exam results in the evaluation system is also problematic from a financial point of view. Taking a required English exam will cost from approximately JPY 4,500 to 27,000⁵⁸, depending on the type of the exam. To get good exam results, it is ideal to try the exam a few times but that will create financial burdens for student families. External English exam results are integrated in the TSGL 48 scoring system to address one of the MEXT SGH program outcome indicator (i.e. 'percentage of students who have achieved B1-B2 levels of CEFR')⁵⁹ but MEXT does not allow SGH funding to be used to reimburse English exam costs. Although the Tamagawa Academy has decided to use internal funds to cover costs for English exams for students this year and next year⁶⁰, it seems to be reasonable to negotiate with MEXT about the allocation of some SGH funding to cover the English exam costs, especially as MEXT requires SGH schools to use external English exam results as an SGH outcome indicator.

Expanding the quality of student participation

General issues surrounding student attendance in the TSGH program have been discussed earlier (see pp.9-11) and here the issue of student participation is discussed further. It is noteworthy that a number of Tamagawa students have expressed their keen interest in becoming more actively involved in TSGH. For instance, in terms of the Global Career Lecture Series, students welcome a more

TSGH steering committee teacher focus group interview.

⁵⁴ External evaluation parent survey; External evaluation student survey.

Focus group interview with top 10 students of the TSGL 48 score list.

⁵⁶ Ibid.

⁵⁷ TSGL 48 teacher interview.

⁵⁸ Equivalent to approximately US\$ 40 to 230.

⁵⁹ MEXT SGH target sheet (TSGH, 2014). CEFA stands for the Common European Framework Reference for Language. There are six levels in CEFR.

⁶⁰ Using internal funds, Tamagawa Academy has fully covered GTEC exam (one of the external English exams) costs for all grade 9 students this year and will cover the full costs for all grade 9 and 10 students next year.

participatory format since at present they passively listen to presentations given by guest speakers.⁶¹ A student says, 'the Global Career Lecture Series is knowledge-oriented. The format is always the same.'⁶² Two grade 11 students point out that if they had more chances to share and discuss new ideas, this in turn would stimulate better and quicker learning.⁶³ Similarly, a grade 10 student welcomes opportunities like *barazza* (which is a discussion format used in the Tamagawa Round Square conference).⁶⁴ Some students are interested in being involved in the selection of guest speakers and contributing to the management side of the Lecture Series.⁶⁵

More generally, students suggest that the TSGH program should increase the type, range and quality of student participation. For instance, they want to have:

- more discussion opportunities in ordinary classrooms;
- voluntary/action opportunities at school, in the local community or elsewhere in Japan;
- participatory workshops during the lunch time period;
- exchange opportunities with other SGH schools and international schools;
- · exchange opportunities with foreign students visiting Tamagawa Academy;
- opportunities to contribute to the TSGH management and delivery.⁶⁶

Addressing student concerns and suggestions will not only make the TSGH curriculum more relevant for student needs, but also give students a voice in the TSGH curriculum development process. Such a participatory and democratic TSGH curriculum development process will help students practice their democratic leadership skills in everyday school life.

⁶¹ External evaluation student survey.

⁶² Focus group interview with top 10 students of the TSGL 48 score list.

⁶³ External evaluation student survey.

⁶⁴ Ibid.

⁶⁵ Ibid.

⁶⁶ External evaluation student survey; Focus group interview with top 10 students of the TSGL 48 score list; Round Square steering committee member focus group.

Section 4: Recommendations

The following recommendations are made in the light of external evaluation study findings.

Communication

- Make sure that the TSGH program information is easily made available to all the students by using multiple avenues of communication (e.g. whole school announcements, homeroom meetings, whole grade meetings, school display boards, social media, printed materials)
- Make sure that the TSGH program information is regularly shared with parents of both existing students and prospective students

Curriculum Development

- Consider creating and opening up student action opportunities at school, in the local community and elsewhere in Japan in line with the goals of the TSGH program
- Take advantage of foreign students visiting Tamagawa Academy in order to enrich the number and quality of international education opportunities at the school
- Identify and further develop pedagogical approaches which deepen student learning
- Consider developing a framework for and then filling in the details of TSGH learning outcomes
- Create strategies to purposefully link different TSGH curricular activities, ideally through participatory teacher workshops before the beginning of next academic year and by developing interdisciplinary arenas and channels
- Concretize the ideal learner profile for the TSGH program, building upon the IB learner profile and Tamagawa's twelve education precepts
- Create a participatory TSGH curriculum development mechanism so that students can contribute to curriculum development by offering their feedback and opinions and exercise their leadership skills at school

Program Operation/Management

- Consider negotiating with MEXT regarding possibilities of using some of SGH funding for hiring additional teaching staff and covering part of the external English exam costs
- Examine support needs among teachers and provide necessary human and resource support for TSGH curriculum development
- Refine the TSGL 48 scoring system by adjusting the current points criteria through consultation with school-based stakeholders including students

Program Evaluation

- Refine the existing TSGH internal survey proforma by dividing it into two surveys: one focusing on student learning specific to the course/program and another on general aspects of the TSGH program
- Consider using TSGH learning outcomes, once developed, as an overall framework for the mid-term and final evaluations
- Make sure the cumulative impact of the TSGH program is captured via appropriate data collection tools over the remaining program period (especially with new grade 9 students who experience the program for 4 years).



Tamagawa Academy Super Global Highschool 2014 GLOBAL CAREER LECTURE SERIES



<全 17 回実施報告>

- ① 元外務省国際人事センター長 伊藤光子氏
- ② 立教大学異文化コミュニケーション学部 ステファン・ジョンソン氏、ポール・カニングハム氏
- ③ 日本国際ボランティアセンター(JVC) 小野山亮氏
- ④ 関西学院大学国際学部 関谷武司氏
- ⑤ 国境なき医師団 小林さより氏
- ⑥ 関西学院大学総合政策学部 林達也氏(学生)
- ⑦ JCBL 地雷廃絶日本キャンペーン 内海旬子氏
- ⑧ NGO アンコール障がい者協会 セム・ソワンタ氏
- ⑨ 国際協力機構(JICA) 浦輝大氏
- ⑩ 元青年海外協力隊、フォトグラファー 関健作氏
- ⑪ 元子ども兵士・Free the Children ミシェル・チクワニネ氏
- ② NPO 国境なき子どもたち 寺田朗子氏
- ⑬ 駒澤大学文学部 坪井健氏
- (4) 駒澤大学文学部 坪井ゼミ (学生)
- ⑤ 日本国際ボランティアセンター(JVC) 清水俊弘氏
- ⑯ 玉川大学文学部 太田美帆氏
- ① 玉川大学教育学部 小原一仁氏

① 7月16日(水)3時間目 参加生徒数:220名(12年生学年全体)







元外務省国際機関人事センター長

伊藤 光子氏

<講師略歴>

元外務省国際機関人事センター所長、海外安全相談センター室長歴任。その後、在インドネシア大使館、ニュージーランドのオークランド総領事館に赴任。OECD日本政府代表部勤務。

【テーマ分野:外交・国際協力】

<参加した生徒の感想>

- ・日本人の国連職員の期待されている数に対する現在の職員数を聞き、少しながら使命感、そして興味を抱いた。 狭き門ではあるものの、国連職員に対して憧れを感じた。
- ・国連はとても遠いイメージがあったが、今回の講演を聞いて、少し近いものに感じることができた。日本は国連で活躍しているという印象はなかったが、資金提供の面では上位ということに驚いた。
- ・高校時代から異文化との触れ合いを持つことが必要だというお話が印象的で、せっかく私たちは沢山のチャンスがあるにも関わらず、それを逃しているということはもったいないと思った。積極的に活動に参加をすべきだと強く感じた。

② 7月28-30日 TSGH×Rikkyo UniversitySuper Global Summer Course 2014 参加生徒数: 15名





立教大学異文化コミュニケーション学部 ステファン・ジョンソン氏 ポール・カニングハム氏

立教大学



<講座内容>

立教大学で英語による集中講義形式の講座。1日目は「貧困削減への国際協力」、2日目は「外交におけるコミュニケーション」、3日目は「批判的思考と異文化理解」をテーマに実施。

【テーマ分野:人権・外交・国際協力】

- ・大学での授業のイメージを持つことができ、とてもいい経験でした。貧困というトピックはとても奥が深く、色々な視点から考えることができ、改善していくためにはさまざまな人の協力が必要だということを学びました。
- ・今回の講座に参加して、より大学で学びたいことや、将来の目標が明確になり、参加して本当によかったと思いました。
- ・改めて自分がもっと英語を磨けばグローバル的な視野が広がると思うことができた。このような企画があったらまたぜひ参加したい。

③ 9月24日(水) 12:45-13:15<TED 方式> 参加生徒数:49名





日本国際ボランティアセンター(JVC)

小野山 亮氏

く護師略歴>

スリランカ内戦や津波被害の支援をする複数の国際 NGO にて勤務した後、2012年より JVC アフガニスタン事業統括。

【テーマ分野:人権・外交・国際協力】

<参加した生徒の感想>

- ・実際に現地に出向いて仕事をしている小野山さんのお話はとてもリアリティがあり、国際的に働くことへの具体的なイメージを持てることができました。
- ・「地域力=平和」という言葉にもあるように、地域の制度や、村人 1 人 1 人の意識を変えることが平和につながるという小野山さんの考えにとても同意しました。
- ・私たちの知らないところで日々こうやって活動している人がいるんだと改めて実感した。
- ・崩れた社会環境を立て直す答えは1つではないことを感じた。医療や教育の関心を高める募金などではなく、生きる術を先進国が率先して教えることが必要だと思う。
- ・問題解決には一人ひとりの意識が必要、そして政府やボランティアの協力が大切。

④ 9月27日(土)3時間目 参加生徒数:215名(11年生学年全体)







関西学院大学国際学部教授 NPO法人国際協力アカデミーひろしま代表理事

沿后街 谷閣

<講師略歴>

国連ボランティア計画 (UNV) と協定を結び、国連学生ボランティア プログラムを実施。2004 年から約 60 名の大学生を派遣。

【テーマ分野:国際協力】

<参加した生徒の感想>

- ・将来、どんな仕事に就くにしても、世界に目を向けて自分がどう世界で役立てるか考えることが大事だと思った。
- 「世界」を考えるうえで、自分の知らない世界について知り、理解することが必要だと思った。
- ・欧米しか見ていないと言われたとき、たしかにそうかもと思った。世界を見ようと思った。
- ・真の国際人になって世界的に活躍するには、まず最初に自国のことを深く知る必要があると思った。
- 日本人の私に求められていることを見つけていきたい。

⑤ 9月27日(土)3時間目 参加生徒数:211名(10年生学年全体)







国境なき医師団

小林 さより氏

<講師略歴>

国際 NGO「国境なき医師団」小児科医・ケニア南スーダンなどへ派遣され、現地の医療活動に携わる。

【テーマ分野:貧困・環境・国際協力】

- ・病院で 1 台のベッドに 3 人の患者さんがいること、ハエが無数についている、難民キャンプでは気温が 47 度など、私たちの普段の生活では想像もつかないようなことに驚きを感じました。
- ・ボランティアなどを通し、人の役に立てることをしたいと思うことができました。
- ・外出するだけでも危険だったり、屋上を壁で囲ったりと日本では考えられないくらい危険と隣り合わせで驚きました。今、日本で衣食住すべてで苦労せず生活できていることがどれだけすごいことなのかと考えさせられました。
- ・国境なき医師団についてはテレビで聞いたことがありましたが、具体的な活動内容は知らなかったので、直接聞けてよかったです。紛争地帯などで、患者の治療を行うのは自分お命を落とす可能性があるのに、自分の仕事を全うする国境なき医師団のみなさんは格好いいと思いました。

⑥ 10月9日(水) 12:45-13:15<TED 方式> 参加生徒数:49名





関西学院大学総合政策学部 4 年 国連ユースボランティア(UNV)サモア派遣 林 達れ氏



現在関西学院大学総合政策学部4年生。2013年9月から2014年3月まで、サモアの国連開発計画(UNDP)事務局にてUN Youth Volunteer としてCommunications Assistant を務める。

【テーマ分野:国際協力】

く参加した生徒の感想>

- ・このような企画がある大学も数少ないと思うが、林さんのように貴重なチャンスを逃すことなく、積極的に掴みに行く姿勢があったからこそできたのだと思う。
- ・サモアが求めているボランティアと日本がしてあげているボランティアが必ずしも同じという訳ではないというギャップゆえに、国際協力はデリケートな問題だという話が意外だった。
- ・「自信がなくてもやりたいならやるしかない」という言葉が印象に残った。やってみれば意外と乗り切れるかもしれないから、自分も何でもやってみようと思った。
- ・今までボランティアに対し、「手伝えばいい」という考えがあったが、お話を聞いて「具体的にどのように解決するか」ということを考えていかないといけないということを知る事ができた。

⑦ 10月11日(土)3時間目 参加生徒数:180名(9年生学年全体)





地雷廃絶日本キャンペーン(JCBL)理事

内海 旬子氏

<講師略歴>

外資系企業勤務後、94 年以降、NGO による途上国における障害分野の活動に従事。06 年4月より 13 年9月まで地雷廃絶日本キャンペーン(JCBL)事務局長。

【テーマ分野:貧困・環境・国際協力・外交】

<参加した生徒の感想>

- •3000 人以上も被害者がいて、そのうち 18 歳以下が 40%もいると聞いてびっくりしました。殺さずに傷つけるという方法は改めてとても残酷だと思った。
- ・地雷自体が意外と小さくて驚いた。いつ爆発するのかわからないことに恐怖を感じた。戦争はやはり恐ろしいものだと改めて思った。
- ・今日の講演で改めて地雷の怖さを知り、私たちと同じくらいの年の人、もっと年下の人達も被害に遭っていると知り、地雷はいつどこでおきるかわからないという怖さを知り、今私たちができることは何かと考えました。

8 10月24日(金)3・4時間目 参加生徒数:30名(ワールドスタディーズ履修者)







NGO アンコール障がい者協会 (AAD) 設立者 セム・ソワンタ氏

<講師略歴>

1990 年、カンボシア兵士として戦闘中に地雷被害に遭い、両足を失う。その後、苦しい生活を余儀なくされるが、2003 年に NGO アンコール障がい者協会(AAD)を立ち上げ、自らと同じような障がい者とその家族を支援する。

【テーマ分野:人権・国際協力・環境】

- ・ソワンタさんのお話を聞いて、世界はまだ平和ではないと一番に感じました。
- ・実際に体験した話を聞いて、一日でも早く地雷が除去されなければならないと思いました。また、自分に協力してくれる団体に対してとても感謝していることが印象的でした。
- ・地雷の経験を乗り越えて世界のために活動する強さに感動しました。
- ・支援する上で一番力になるのは金銭的なものではなく、支援しようという人々の意志であるということを学びました。たしかに募金は大切だが、人々が募金するという行為は他でもなく、「支援したい」という人々の気持ちによって生まれるもので、その気持ちなしでは募金という行為に至ることさえないのです。

9 10月30日(木) 12:45-13:15<TED 方式> 参加生徒数:49名







国際協力機構(JICA)職員

浦 輝大氏

く講師略歴ン

元アメリカンフットボール・ハワイアンランダーズ所属、2年間青年海 外協力隊として、バヌアツ・タンナ島に派遣。現在は JICA にて国際協 力推進員。

【テーマ分野:環境・国際協力】

<参加した生徒の感想>

- ・青年海外協力隊は、食糧がないところへの援助のイメージが強くあったが、今日のお話のようにスポーツの発展の面でもボランティアをしなくてはならないという日本とバヌアツとの違い、またどれだけ難しいことなのか理解することができました。
- ・価値観が違っても尊敬する気持ちが人をつなぐという内容に、これからの留学の励みになりました。努力しているということは、言葉がなくても伝わるということを学びました。人の価値観を大切にしようと思いました。
- ・ボランティア活動は与えることではなく、やり方や方法を教えることだと聞き、私は今まで物を与えればいいのではないかと思っていたので驚きました。

⑩ 11月13日(木)12:45-13:15<TED方式> 参加生徒数:54名







元青年海外協力隊プータン赴任 フォトグラファー

関 健作氏

<講師略歴>

2007 年ブータンに青年海外協力隊として赴任。体育教師として小中学校の体育普及活動を行う。活動する傍ら、現地の人を撮影することに力を注ぐ。帰国後 2011 年より写真家として活動を始める。

【テーマ分野: 貧困・人権・環境・国際協力】

<参加した生徒の感想>

- ・自ら動き出すこと、人の支援をする上で自分勝手になるのではなく、相手を理解しながら生活をするべきだと考えさせられた。とても興味深い内容だった。
- ・「知ること、自分で見て体験すること、違いを楽しむことが大切」という言葉はこれから先、社会において大切 なのではないかと思った。
- ・体育の先生から協力隊になり、今は写真家として活躍している。何かをきっかけに、人生が 180 度変わることがあるのだということを改めて感じました。「今、何がしたいか」ということが大切だなと感じました。

11月14日(金)6時間目 参加生徒数:180名





コンゴ共和国出身・元子ども兵士

ミシェル・チクワニネ氏

<講師略歴>

1988 年生まれ。5歳のときに誘拐され子ども兵士として紛争に巻き込まれる。その後難民認定を受けカナダ国籍を取得、16歳でカナダへ移住。FTCカナダのモチベーション・スピーカーとして活動を始める。 【テーマ分野:貧困・人権・国際協力】

- ・すごく辛い体験をしてきて、それを世界平和のためにその体験をシェアできる強さに感動しました。
- ・日本のニュースや新聞では一部しか報道されていないが、その裏にはさまざまな悲しい事件や貧しい人々が沢山いることを知りました。
- ・同じ子供なのに周りの状況は全く違い、チクワニネさんの受けた被害は私には想像できないものだと思います。 とても悲しく感じ、衝撃を受けました。この現実をしっかり受け止めていきたいです。
- ・アクションを自分から始めていくことでどんどん可能性が広がり、その経験を人に共有していくことが大切だと思った。

② 11月13日(木)12:45-13:15<TED 方式> 参加生徒数:54名





NPO法人国境なき子どもたち(KnK)会長

寺田 朗子氏

<講師略歴>

国境なき医師団日本事務局発足時より携わり、副会長、会長、理事を 歴任。退任後、2007年に NPO 法人「国境なき子どもたち (KnK)」 の支援委員会を設立、現在は会長を務める。特に援助機関による支援 の枠から外れがちな子どもたちを重点的にサポートする活動を行っ ている。

<参加した生徒の感想>

- ・明日の夢を考える権利も奪われている子どもたちが沢山いる。その子たちが寺田さんのような活動によって作られた学校でたくさん勉強していると聞いて、私もいつかどんな形でもいいから手を差し伸べることができたらと思う。
- ・ストリートチルドレンが日本の人口である約1億人以上いるとは知らなかった。どんなにつらい状況でも 笑っている子どもたちがすごい。
- ・さまざまな写真を通して、今この瞬間にも貧困の中に暮らしている子どもたちがいることをダイレクトに 伝えられ、とても心に残った。

(3) 12月16日(火)3・4時間目参加生徒数:25名(ワールドスタディーズ履修者)

駒澤大学文学部社会学科 教授 坪井 健氏





<講座内容>

「ヒューマンライブラリーの活動を通して、多様性への寛容な心を育てる取り組みをゼミで行っている。特に自分だちの社会に存在するマイノリティーを通して人権問題や自己の偏見への理解を深める。本講座では、ヒューマンライブラリーの本として、全身の体毛が抜ける病気を持つ岡村信子氏と、セクシャルマイノリティであるゲイの小関精頑氏を「本」として迎えた。

【テーマ分野:人権・国際協力】

<参加した生徒の感想>

- ・今日のお話で一番大事だと思ったのは、人を見た目で判断してはいけないということ。これは当たり前の ことであるが、それでも私たちは見た目を気にしてしまうと思う。改めて考え直す必要があると思った。
- ・自分のことを受け入れ、人に自信をもって自分のことを話せることはとても大切なことだと思いました。 ヒューマンライブラリーを行うことによって、偏見がなくなると思った。
- ・自分がマイノリティーの立場に置かれたとき、自分の殻に閉じこもってしまうのではなく、積極的に行動することが大切だということを2人から学んだ。

(4) 12月16日(火) 12:45-13:15<TED方式> 参加生徒数:24名



駒澤大学文学部社会学科 坪井ゼミ4年生

近藤 弘隆氏•岩井 萌子氏•吉田 真唯氏

<講座内容>

カンボシアスタディーツアーへ参加して実際に考えたこと、感じたこと、今高校生へ伝えたいことを若者の視線で語ってもらった。

【テーマ分野:人権・国際協力】

- ・日本は物があられすぎていて、人とのつながりが薄くなってしまっている。一つ一つのことにありがたさを感じることができなくなってしまっているのではないかと感じました。
- ・途上国と先進国の幸せを比べたときに重要なことはお金や物の量ではない。また、自分で世界を見てみることが大切だと思う。
- ・今回の講演を聞き、日本にいるだけだと途上国のイメージを勝手な思い込みで考えてしまい、自分の価値観を狭めてしまうと感じたので、自分の目で見なければと考えた。

(5) 1月15日(木)12:45-13:15<TED方式> 参加生徒数:23名





日本国際ボランティアセンター (JVC) 獨協大学国際教養学部非常勤講師

清水 俊弘氏

<講師略歴>

小学校、高校講師を経て1987年、JVCに参加。タイ・カンボジア 国境の難民キャンプでのプロジェクト調整員、JVCカンボジア代表と して国内の復興支援活動に携る。対人地雷の廃絶を目指すNGOのネットワーク地雷廃絶日本キャンペーン(JCBL)理事。獨協大学国際教 養学部非常勤講師。
【テーマ分野:外交・国際協力】

<参加した生徒の感想>

- ・想像力が国際的な問題解決のキーになることは考えもしなかった。私たちの持つ固定観念が問題の被害を拡大していることにも気づかされた。
- ・偏見を持たずにまずはそのことを知り、触れ合ってみる。実際に行ってみて感じる事が必要だと思った。
- ・テロを起こされたからと言って対テロの戦争を起こしても、何もしていない相手の国の人達にとっては、それ自体が「テロ」という風になってしまうのかという事を感じた。

⑩ 1月22日(木) 12:45-13:15<TED 方式> 参加生徒数:30名



玉川大学文学部比較文化学科 准教授

太田 美帆氏

<講師略歴>

大学在学中、オイスカの「フィリピン 30 日間植林ボランティア」に参加。卒業後、青年海外協力隊村落開発普及員 として、ガーナ農村の生活改善活動に携わる。以降、海外の農村開発関連プロジェクトに参加。近年は賽災復興プロジェクトにも積極的に関わっている。

【テーマ分野: 貧困・人権・国際協力】

<参加した生徒の感想>

- 「母親のための学校」という考え方がとても新鮮だった。今までそのように考えたことはなかった。
- ・1つのチャンスを掴むことで、世界、自分の視野が広がるということがわかった。フィリピンでの経験の話がとても心に響いた。
- 「異文化の人達と通じ合うのは英語力じゃなくてコミュニケーション力だ」ということを聞いて、英語ができないのを言い訳にして積極的に色んな人と関わらないのは違うなと思った。

⑪ 2月5日(火) 12:45-13:15<TED 方式> 参加生徒数:38名





玉川大学教育学部教育学科 准教授 八原 一仁氏

<講師略歴>

高等部卒業後渡米し、セントマイケルズカレッジ、ポストンカレッジ、 UCLA を卒業。約10年間異文化のなかでの学習、研究経験を持つ。 教育学博士(UCLA)。高等部出場。

【テーマ分野:人権・国際協力】

- "凡人なりに創意工夫をする"という点、また留学中のお話を聞いて、自分の将来を想像できた。またアメリカ人も学歴が好きといった興味深さもあって楽しかった。
- 私も留学したいです。でも行く前に目的を明確にしないといけないということがとても響き、しっかり考えないといけないと思いました。
- ・こわくても色々なことに挑戦することが大切だと思った。また、英語がわからなくても、まずは場になじむことが大切である。

参考資料:生徒成果物① アフリカン・スタディーズ参加生徒プレゼン資料

	ン・スタティース参加生使ノレセン資料
	First, I will talk about JICA.
	JICA stands for Japan International Cooperation Agency.
HCAV- antique in Determine	JICA's vision is to help all people to advance and to benefit
JICA's actions in Botswana	from development in order to become dynamic.
Tamagawa Academy	JICA supports many countries all over the world.
Tokyo, Japan Natsuki Kamei	Almost all countries in Africa are supported by JICA.
	JICA helps 35 countries in Africa.
	I will explain about JICA's actions in Japan in two parts.
What's JICA? Japan International Cooperation Agency	JICA's support includes participating in international
JICA supports many countries all over the world. Benin Mauritius Botswana Zambia Suring Faco Zimbabwe	cooperation activities and NGOs, and local governments, and
Burkina Faso Zimbabwe Burundi Mozambique Cameroon Namibia Cote d'Ivoire Niger	universities.
Comoros Democratic Republic of the Congo Dibouti Senegal	JICA has been cooperating in a variety of ways.
Eritres	Also JICA recruits volunteers in Japan.
• Kenya - South Sudan • Liberia - Sudan • Madagascar - Tanzania • Malawi - Uganda	The person whose desire is to help people in developing
• Prietavi - Ogorius	countries,
	and then through selection, enter training to become a
	professional aid worker.
JICA's actions in Japan	I will explain about JICA's actions in Japan in two parts.
	JICA's support includes participating in international
Supporting the NGOs, local governments, and universities	cooperation activities and NGOs, and local governments, and
	universities.
Recruiting volunteers	JICA has been cooperating in a variety of ways.
	Also JICA recruits volunteers in Japan.
	The person whose desire is to help people in developing
	countries, and then through selection, enter training to become
	a professional aid worker.
Support of disaster	JICA does not only assist in life support but also disaster
	support.
Earthquake Tsunami Typhoon	Large-scale natural disasters often occur around the world and
	many people have died.
Flood	For example earthquakes, tsunamis, typhoons, floods and
	volcanos.
	Natural disasters such as earthquakes and typhoons and often
	occur in Japan too.
	So, Japan has a wealth of experience and natural disaster relief
	support skills.
	From these experience makes Japan useful in providing support
	during disasters in developing countries.

GDP Growth of Japan 1,18, 1,1

I researched about Japan's GDP growth, because I thought I should know about my own country.

Japan's economy is not stable, it sometimes increases and it sometimes decreases.

On the other hand, Botswana's economy is growing every year.

Growth in Botswana is remarkable by worldwide standards, but

Botswana has difficult problems, and is supported by JICA.

JICA's support to Botswana

1)infrastructure development for economic growth.





Botswana is one of the countries supported by JICA.

The aim of JICA's support to Botswana are first, infrastructure development for economic growth And second, development acceleration in areas of poverty.

 \boldsymbol{I} wanted to see JICA's action with my own eyes and \boldsymbol{I} decided to join this program.

Thank you for listening.

About an environmental problems in Africa

Tamagawa Academy GR10 Erena Takahashi



*We should solve the environmental problems, not just in Japan but all over the world.

These days a lot of problems in nature have been prevented, such as global warming and deforestation.

I think we can solve the environmental problems by making connections between them and the economic activities made by people.

2.The environmental problem in Japan



* After the 1950's and during Japan's rapid economic growth, pollution increased.

There were 4 categories of pollution related illnesses called "4 major pollutions"

I think modern Japan exists because we overcame the pollution problem.

3. How Japan solved the problem

ITAI-ITAI DISEASE



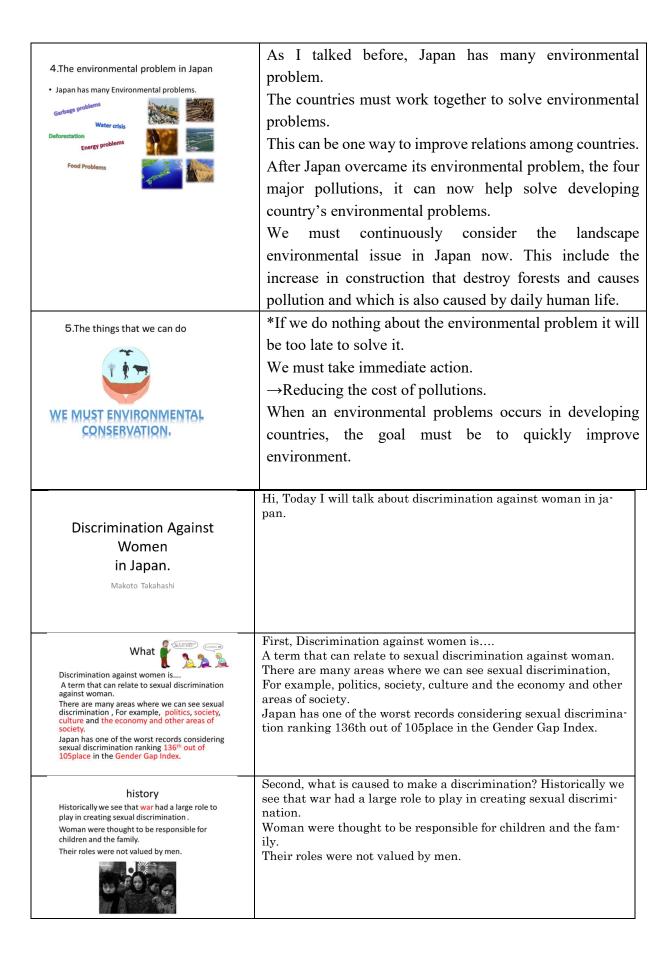


*There were four major pollution related problems in Japan.

Itai-Itai disease, was caused by pollution that occurred in Toyama Prefecture in the Jinzu region from untreated waste water from a mine in Gifu Prefecture.

The cause of the Itai-itai disease came from a substance called cadmium. People ate vegetables and drank water.

The solution to this pollution, was resolved by Mitsui Mining & Smelting when they paid 600,000 yen per victim. After that. Japanese government established the low of environmental pollution prevention get against antipollution.



Example

Economic discrimination is a serious problem in Japan. The "Equal Employment Opportunity Law" was introduced but it hasn't had an effect. Overseas agencies report "gender discrimination in the workplace is common place in Japan".





Next, the problem having in Japan today. Economic discrimination is a serious problem in Japan. The "Equal Employment Opportunity Law" was introduced but it hasn't had an effect. Overseas agencies report "gender discrimination in the workplace is common place in Japan".

Economic discrimination is a serious problem in Japan. The "Equal Employment Opportunity Law" was introduced but it hasn't had an effect.

Overseas agencies report "gender discrimination in the workplace is common place in Japan".

Example 2

- "Men work, women do housework"
- •In the workplace women are sub ordinate.
- Man=side to evaluate. Woman=side to be evaluated.



- · "Men work, women do housework"
- · In the workplace women are sub ordinate.
- · Man=side to evaluate. Woman=side to be evaluated.

It is a word that is said to work of Japanese women well.

What should we do?

In the west, companies think diversity leads to stronger, more competitive companies and they attach great importance to the promotion of woman.

=Japanese companies should follow this ideal survive in the international market.



Finally, I'm talking about what should we do?

In the west, companies think diversity leads to stronger, more competitive companies and they attach great importance to the promotion of woman.

=Japanese companies should follow this ideal survive in the international market.

I will talk about discrimination in Japan.

Racial Discrimination in Japan

Yutaro Yamamoto

The history of crimination in Japan

- *There was a clas system in the Edo e
- *えた・ひにん[eta. Hini n]translate as bottom la yer of the class syst

bolished in 1871. But later the discrin nation continued as しんへいみん[sinheimi n]



Discrimination in Japan began during the Edo period.

One type of discrimination was called Eta-Hinin. These people were members of the lowest class in Japan.

Class system of the Edo period was abolished in 1871 But only the name changed and discrimination continued.

Buraku discrimination

* Buraku were classes of people who experienced discrimination. They included people in the lowest class of Japanese society. One group is called Sin – Heimin.

* Discrimination remains deep-rooted in western Japan today. There are cases of Buraku discrimination against people because of their



People that have been discriminated against were gathered in the area of buraku.

Class system was abolished, but discrimination was continued Discrimination exists in the consciousness still. It is discrimination by last name or address

Current Discrimination against Burakus -Part 1- * During the Showa period, Burakus had the lowest university admission rates, earned less money, and lived in areas with poor infrastructure development. In 1969, a national policy was established and and ended discrimination against Burakus.	The difference between the environment and the general people and Buraku was a big thing It is in the admission rate and revenue Policies that eliminate discrimination by the country in 1969 was enacted
Current Discrimination against Burakus -Part 2- • Discrimination was also experienced during the high economic growth period. However, discrimination still continues today.	Was reduced to high economic growth period of Japan but discrimination also exist areas where discrimination still remains
Challenges for the future One solution for ending the problem of discrimination is to raise peoples' awareness of it before it increases. On the other hand, awareness has faded among the young. I think that more focus is needed in order to eliminate discrimination, more education and effort are needed to teaching the younger generation to never repeat this again.	I believe that it is key to education is to completely eliminate the discrimination from Japan
Human rights Tamagawa Academy G10 Mana Matsumoto	Hello, My name is Mana Matsumoto. I am from Tokyo. I'm grade 10 student at Tamagawa Academy. Today, I want to talk about human rights in Japan.
*Women *Children *Children *The Elderly *People with disabilities *Satus discrimination *Along people *People with First Papersy *People with Triminal record *Crime victims *Internation *Internation *Sexual thoughts *Guide Fernons *People abducted by North Kores *Human trafficing *Suicide *Suicide	There are so many human rights issues in Japan. Some human rights issues unique to Japan include the discrimination of the Ainu people, and the Japanese people abducted by North Korea. I would like to talk about "Children's' Rights", since this is the most familiar to me.
Children's Rights Issues in Japan *Bullying *Corporal punishment	There are various problems that children experience. They include bullying, corporal punishment by teachers, child abuse by parents and pornography.

Bullying Bullying cases reported (2010) Total 77,630 B Elementary School B Junior High School B Special School

This is a breakdown of the number of reported cases of bullying in Japan. The thing that surprised me was that bullying in elementary school was more than in junior high school and that there are also more than 70,000 (seventy-thousand) reported cases in one year. You now often hear about "bullying" in the mass media, I used to think that it is not a big problem. Now I believe, if we look into it a little, the more we can solve the problem of bullying and end it.

In the first place, What is the bullying? I began to be worried about being bullied while I researched it. It means "to torment the weak, annoy," on the dictionary. When you hear the word bullying, there is the image of "the harassment against people who are weak by people who are strong". But I do not know what kind of be a person as "a man of strong power." "What has been done by power not defined in the narrow world", I think that it is "bullying" it.

Suicide

Suicide cause of students 20



Unknown
 Rebuke of parents
 Path problem
 Blame the world
 Mental disorder
 Poor school performance
 Heterosexual problem
 Friend probrem
 Anxiety due to poor health
 Tease
 Other

This is the breakdown of why children commits suicide. "Bullying" represents a very small percentage while the largest percentage for the cause of suicide is "unknown" or there are many reasons. Even so, I can't believe that 200 students ended their life. They were so young. In Japan, people do not have to worry about not having enough food to eat and a place to live. We live in a technological country, and we have many hopes for a future. This is a waste! I think it's too precious to waste our life that our parents gave us.

The 8th grade bullying suicide case in Otsu



This is one of among the suicide cases was because of bullying. Male students of junior high school sophomore of Otsu, Shiga Prefecture, has become a result of suicide by the bullying of the contents or the hands and feet tied with a rope, that was allowed to the practice of suicide. Board of Education and the school in spite of knew the contents of bullying such, it was not recognized as "did not know". After all, this incident I have dismissed as coming from the home environment.

This is a very famous incident, but I ended up very surprised to respond Board of Education schools and the contents of the bullying. Content that is unlikely to be human. You should not really be forgiven. Who are bullied to rely on people, people around is not a spectator in any way. I think that it would be necessary for it to not to waste precious above all life.

Reference

- http://www.moj.go.jp/JINKEN/kadai.html
- http://livedoor.blogimg.jp/ideas_frogegg/imgs/f/b/fbf6ce86.jpr
- http://resemom.jp/article/2012/09/12/9784.html
- http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%B4%A5%E5%B8%82%E4%B8%AD2%E3% 81%84%E3%81%98%E3%82%81%E8%87%AA%E6%AE%BA%E4%BA%8B%E4%B8%E6
- http://blogs.yahoo.co.jp/konan119269/33542339.htm

Thank you for listening.





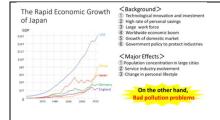
Environment and Problems in Japan



Rikako Ueda Grade 10 Tamagawa Academy Tokyo JAPAN



My name is Rikako Ueda in Grade 10 at Tamagawa Academy. I will present about "Environment and Problems in Japan".



- ① As shown in this graph, Japan experienced rapid economic growth. Japan's GDP was number 2 in the world for a long time, but fell to number 3 behind China in 2010.
- ② The Background for Japan's economic growth were things such as technological growth a high rate of personal savings, domestic market growth especially with home appliances and a government policy to protect industries.
- ③ This rapid growth was brought about from mainly three efforts. First was the population concentration of large cities. Second was the evolvement in the service industry. And third was the change in personal lifestyle. However, in the shadow of bright economic growth, industrial development resulted in serious pollution problems. Let me explain this in the following slides.



There were four major pollution-related illnesses during the rapid economic growth period in Japan.

The first was Minamata Disease found in Kumamoto in 1953. It disabled arms and legs, speech, hearing and nerves.

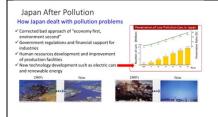
The Same symptoms were observed in Niigata in 1964. In 1955, Toyama experienced Itai-Itai Disease which weakened bones and gave intense pain throughout the body. "Itai-Itai"

These three diseases were all caused by eating poisoned fish or farm products.

means "hurts very much" in Japanese.

The last of the four major illnesses was Yokkaichi-Zensoku Disease found in Mie in 1961. This was caused by breathing polluted smoke exhaust from factories, and resulted in respiratory diseases such as asthma.

At that time, the Japanese government put in place the Environmental Pollution Prevention Act. Fifty years later, meetings and discussions are still being held in various parts of Japan to prevent pollution. I think this type of countermeasure can be taken in other countries as well.



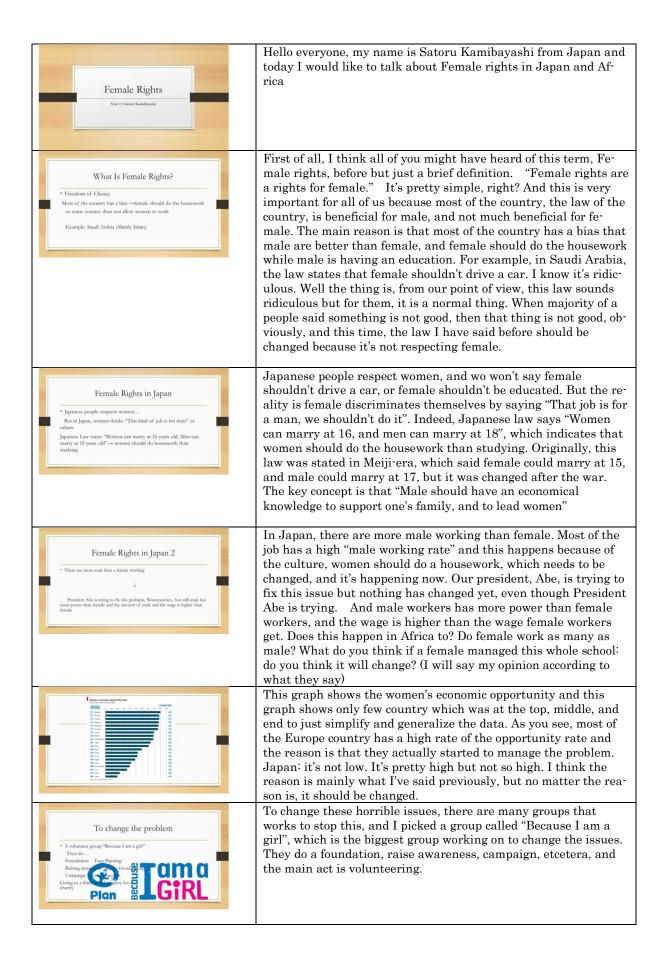
After experiencing serious pollution problems, Japan corrected the bad approach of "economy first, environment second". The government established regulations and provided financial support for industries, and production facilities were improved. What has impressed me the most is the development of electric cars? This graph on the right shows how low-emission cars have become popular in Japan.

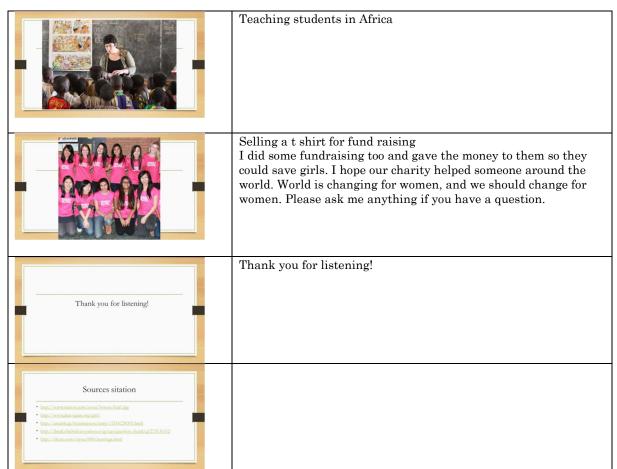
The pictures at the bottom show the dramatic improvements achieved at a major industrial area in the Kyusyu region. The young generation has only seen the clean rivers and sky, and does not realize the fear of pollution problems. I myself did not know much about the pollution diseases. But global warming has become a big problem in recent years, and I personally realize that the average temperature has increased.

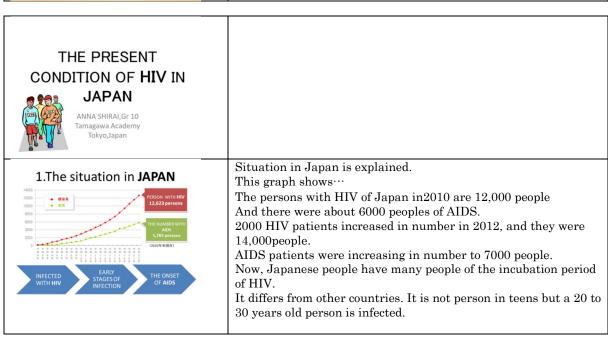


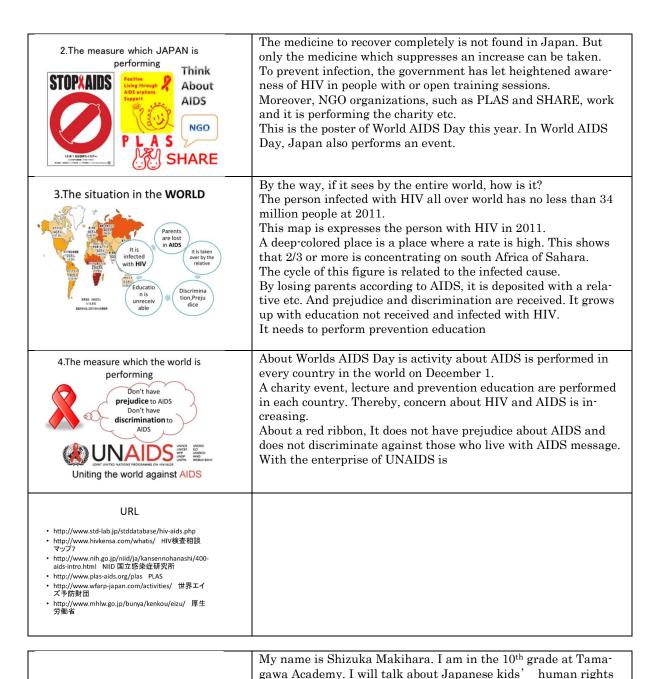
This last slide is about South Africa. The graph shows rapid economic growth in recent years.

I want South Africa to be careful about pollution when the economy is growing. To avoid the hard struggles Japan experienced, please put in place effective regulations, and make the best use of new technologies such as electric cars and renewable energy. Most importantly, please do not forget "environment first". This is the end of my presentation on "Environment and Problems in Japan". Thank you very much.









issues. The Japanese Kids' **Human Rights Issues** 10th grade Tamagawa Academy Shizuka Makihara Japanese kids' human rights issues are bullying, physical pun-1.What are Japanese kids' human rights issues? ishment, refusal to go to school and child abuse. Also, Other countries kids' human rights issues poverty, starvation, and war, Jabullying, physical punishment, refusal to go to school and child abuse have become the big social pan and Other countries have different kids' human rights isissues ◆Other countries It suffer from poverty, starvation, and war. I will talk about bullying in japan. Japan and Other countri

have different kids human rights issues



Onlookers in the UK and Japan

70

60

61.3

61.3

61.3

41.8

41.8

41.8

41.8

41.8

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.3

61.

Bullying in Japan takes place between friends, Psychological bullying by classmates is large.

In addition, the reasons for bullying in Japan today, hard to understand.

As you can see on the graph is bystanders of bullying is increasing in Japan where as the number of on lookers in the UK bystanders have started decrease at the end at junior high school in the UK. I think this is where the problem of most of the bullying in Japan.

The most common type of bullying around the world is teasing and name calling.

3. Decreasing Bullying

After teacher intervention
the bullying is
No change 0.5%
28.2%
The bullying is
decreased
4.335

The bullying is
decreased
4.335

I would now like to introduce the measures of bullying taking place in Japan.

Various measures to stop bullying includes a, 24 hours bullying service center, it can be after called by the teacher.

Please look at the graph. The graph shows the changes in the bullying after calling the teacher. I feel students of 42% have less bullying. Bullying, disappeared students 23% Who called the teacher. I found it is very effective to call the teacher for help.

4. ways to stop bullying.

- ➤ Teachers should pay more attention to the students
- Reduce the number of onlooker of bullying
- Improve the utilization of the Internet environment among children
- Review the staff structure of the child guidance center



These are ways to stop bullying.

First teachers should pay more attention to the students and reduce the number of onlookers of bullying. Also to improve of utilization of the Internet environment among children is needed as well as the review of the staff structure of the child guidance center

I want to think of how to prevent human rights problems but I think is not abuse and bullying around me, I want the term bullying in the world to disappear.

The Problem of Disparity of Wealth in Japan

Tamagawa High School 10th grade Anju Suzuki In Japan, it looks like there is no disparity of wealth. But if we look carefully, there are many people having trouble with money.

What can we do to the poor?

I chose this topic because I have seen homeless people sleeping in the station, and I felt the disparity of the rich and the poor. And I have heard the Japan government do some policies to support the poor, so I wanted to do some research about this.



We have a lot of buildings and homes which are gorgeous and beautiful.

At the same time, Japan has many homeless people.
Homeless people live in parks, trains stations, and on the street.
They collect garbage in trash cans and on the road.

The Japanese government distribute foods and give some public assistance to them.



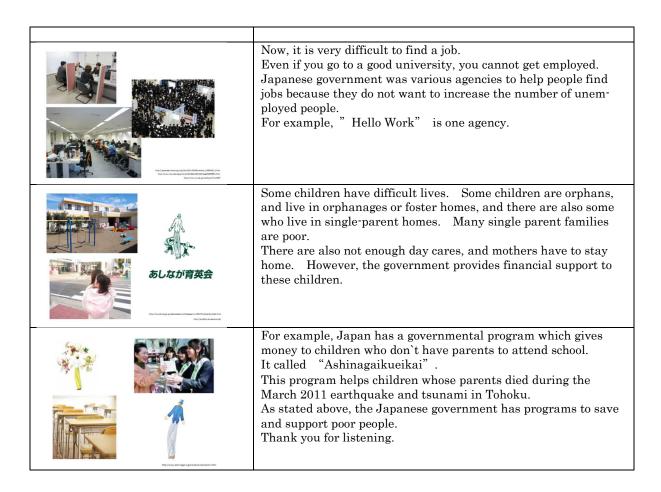


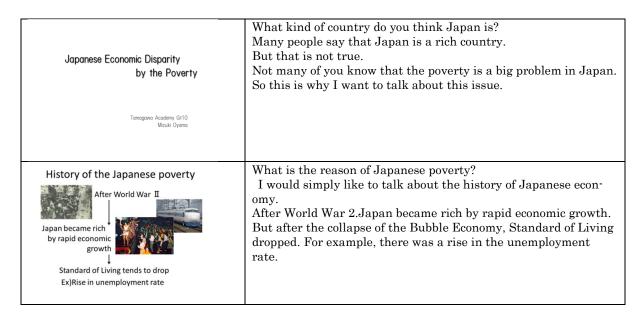


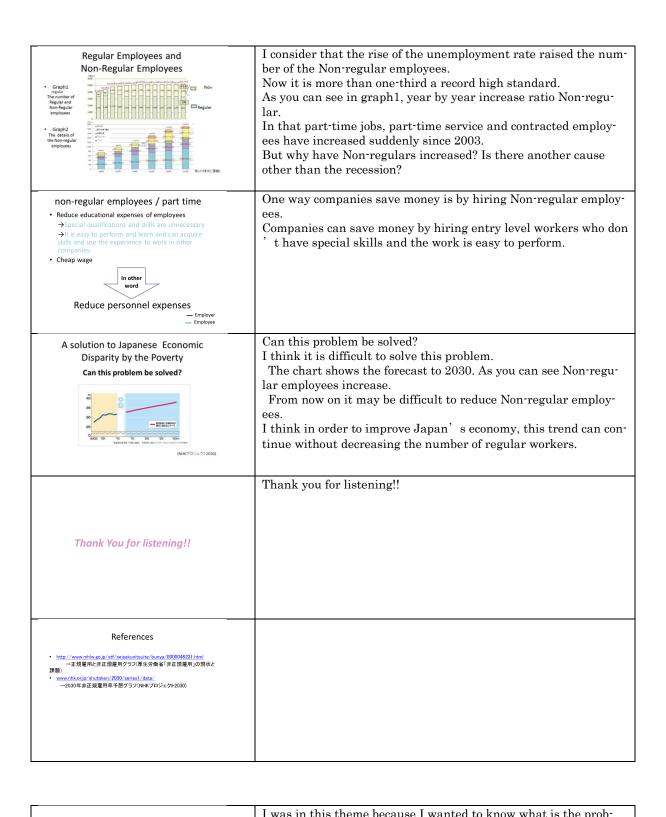


Here are some examples of the disparity of wealth in Japan, especially in big city in Tokyo. Rich and poor people live in Tokyo. Rich people tend to live in expensive houses and tall apartment buildings. People who have low income live in housing developments. Some people live in old houses and have been living in them for over 50 years. They cannot afford to reform them. Homeless people live in tents made of plastic tarp and corrugated cardboard.

The types of houses they live is not always the way to see the disparity of wealth.





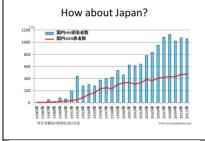


Current status and challenges of education in Japan	lem that you are having now and the difference between the for- eign country on education as a side who are receiving education now. There are several challenges in Japan.
Tamagawa Academy Kurumi Naruse	

The first Challenges is the loss of academic ability of the child. Decline in academic ability Cause, there are two. of the child Cause of the first is the introduction of a space education. Education with latitude Teachers will not be able to teach in time the contents to be made Class lack of time to teach class by lack of time to spare education. Cause of the second is the lack of leadership of the teacher. Lack of leadership of teacher Classes and teachers rely on print and video, and immediately Class rely on print and video > The bark immediately and scold shouted, increase of teachers pointed out the lack of leadership in emotional the act, such as scolding emotional also noticeable. The second challenge is child has no autonomy, no motivation Child has no autonomy, that is increasing. no motivation In the child who don't have goal and dream. Some child can't say their opinion, some child don't know Can't speak Don't know what to do what my to do. And some students admission university who don't have goal and dream. Don't like study Child say don't like study is 50% of 5grade and more than 70% •5th grade 50% of 8grade. •8th grade more than 70% Education is variety of respect to spontaneity and individuality. Cause is education do not match personality. The third challenge is Truancy. Truancy Cause is tease and school violence. Elementary school, junior high, high school has two thousand Elementary school, junior high, high school are two thousand Elementary school, junior high, high school has three thousand School violence school violence. > decreased overall Decreased overall but Junior high school students is increase. > Junior high school students is increase Elementary school, junior high, high school are three thousand. At the last Current Japanese situation is children are to be in **Current Japanese situation** non-attendance at school bullying often, willingness to learn is not sufficient and school hours is not enough space education. Children are to be in non-attendance at school bullying often Willingness to learn is not sufficient School hours is not enough space

The present circumstances and problems of HIV and AIDS

Hinano Arai,Gr 10 Tamagawa Academy Tokyo,JAPAN Do you know about HIV or AIDS? I think that you have heard the word once. 84 years has passed since AIDS and HIV being discovered for the first time, although there are more and more people getting infected. The crisis has come to many countries because pf decline labor of population and huge expenditure of measure. This sick causes poverty, bullying and discrimination. There are approximately 420000 people being infected by HIV in the world and there are approximately 310000 people dead because of AIDS in 2002. I'd like to talk about the present circumstances and problems of HIV and AIDS.



How about the situation in Japan? Japan has less infected people in the world. However, people who are living with HIV and AIDS are more and more increasing. In 1985, there are almost no one infected by HIV virus in Japan, but in 1999, it increased to over 500 people. And the people infected HIV and AIDS in Japan increased more and more. In 2008, they increased over to 1000 people. Now a days, it is still increasing. This is happening not only in Japan. The people living with HIV and AIDS are increasing around the world. One of the reason is ignorance of this virus, so we have to know about this.

The notability in Japan The including of the control of the contr

4 people is infected in a day in Japan.

In 1985, AIDS and HIV being discovered in Japan.

There are less infected people than other countries in Japan. However, infected people are more and more increasing, so Japan is concern about explosive increase.

By the way, how many people know about this sick in Japan? This sick is known by 90 percent people, but 50 percent people don't have recognition familiar sick and 60 percent people don't feel uneasy.

But over 90 percent people think, don't have social prejudice for HIV and AIDS.

How do we infect?



"YOU CAN'T GET AIDS FROM A HUG OR A Handshare or a meal with a friend." Made division



There are many problems of HIV and AIDS. For example, this serious siskins' t familiar by everyone. Do you know how do we infected? We don' t get infected by touching the infected person. So how do we infect? There are three ways how do we get infected. First by, sexual transmit, second by blood transfusion or injection, and third mother-to-child transmission, so you can touch and hug with people infected by AIDS. Princess Diana said

"HIV does not make people dangerous to know, so you can shake their hands and give them a hug." Magic Johnson is one of the famous basketball player being infected by AIDS. He retired because of AIDS.

He also said "You can' t get a AIDS from a hug or a handshake or a meal with a friend." If we get infected, the HIV virus will not be destroyed, but if you properly face with medical treatment, you maintenance your health. So early detection is needed to prevent death.

Red ribbon movement





Currently, red ribbon movement is carried for AIDS. This movement started from the end of 1980s because AIDS became a social problem in USA. This is a worldwide movement across the border and it is the symbol mark of UNAIDS (Joint United Nations Program on HIV/AIDS) . The message of this movement is not to have prejudice and discrimination to people who live with AIDS. I'd like you to know about AIDS and HIV more.

URL

http://hiv-hand35.jp/knowledge/status.htm http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/2260.htm http://www.std-lab.jp/

http://apps.who.int/gho/data/node.main.620 lang=en

http://www.foreignaffairsj.co.jp/essay/2011 /Garrett

http://redribbonlive.net/k-01.html http://www.unaids.org/en/aboutunaids/

http://www.unaids.org/en/aboutun http://www.mofairc.go.ip/link/kikan_unaids.html

http://www.nhk.or.jp/kaisetsublog/400/174537.html http://www.unicef.or.jp/special/africa/a_hiv.ht

アフリカンスタディース ~貧困~

10年飛鳥組 新井陽南乃



私は今年の夏、南アフリカ共和国と 私は今年の夏、南アフリカ共和国と ボックナ共和国を訪れ、 たくさんの場所に行き、 たくさんのことを学びました。 なかでも印象に残ったのは貧しい場所、 ケーブタウンの タウンシップとボックナで一番貧しい村の ーったされている。 つとされている ムシャニー村を訪れたことです。

ボツワナで最も貧しいと言われている村 ムシャニー村











タウンシップとは?



- ●アパルトヘイト時代の隔離政策で黒人たちが 強制的に住まわされていた居住区のこと
- 都市で働く労働者は隔離政策により強制的に このタウンシップに押し込められた。

ムシャニー村とタウンシップの違い

ケープタウンのタウンシップ



学校が隣の村にしかな 学校がある 車が見当たらず都市部 車がたくさん走っている から離れている

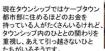
乾いた砂地 舗装された場所がある

ムシャニー村とタウンシップの 違いから気づいたこと



ムシャニー村のほうが経済的に厳しく、仕事がない。 一方タウンシップは、狭くはあるが南風しのげる家や 人とのつながり、またお店や教会、学校などがある。 そのため仕事が見つけやすい。

現在





デリングラドのいたととの関イングを 重視し、あえて引っ越さないひと たちがいるそうです。 一方ムシャニー村はとても貧しく、そのうえ大家族が多く、 政府や企業団体などから支援を受けているひとと受けていない人 がいて、この貧困から抜け出すことは困難だと思います。

今回の学びを通して

私はこの研修に参加する前、南アフリカに恐怖感を抱いたり、 偏見を持っていました。また、貧しい国の人、困っている人たちに 今すぐできることはなにかと聞かれたとき、"寄付"と答えて いましたが、この研修を終えて、偏見がななり、 いまじたが、この研修を終えて、幅をかなくなり、 今困っている人に対して、ものや お金などの番付ではなく、ほかに何かできることはないかと考えるように なりました。

今回、学んだこと見たこと思ったこと感じたことをただの思いでとして心に とどめておくのではなく、これからの自由研究やラウンドスクエア委員会 などにいかしていきたいと思います。

URL

http://www.pelican-travel.net/tourDetails_Opt.php?frCd=so uthafrica&tourCd=HDCPTTSAM14

JICAボツワナ支所を訪問して

11年木曽組 亀井 夏希

JICA(国際協力機構)とは

「すべての人々が恩恵を受けるダイナミックな開発」 というビジョンを掲げ、 開発途上国が抱える課題解決を支援し、 国際協力を行っている独立行政法人。

国内外で活動を行っており、 世界各地に拠点を置いている。



アフリカでのJICA拠点

- → ブルキナファソ事務所 → ベナン支所 → ベナン支所 → マダカスルト事務所 → マラウィ事務所 → マラウィ事務所 → 南スーダン事務所 → モザンピーク事務所 → モザンピーク事務所

ボツワナ支所

→研修中にJICAのボッワナ支所を訪れた

- ・青年海外協力隊を皮切りに 協力事業を開始
- ·技術協力3.69億円 円借款87.35億円 (2012年度)
- ・産業多角化と地方における貧困緩和を ニ本柱として事業を展開





ボツワナ支所が行っている技術協力

- 1.乾燥冷害地域ヤトロファ・バイオエネルギー生産システム開発(SATREPS)
- 2. 国家森林モニタリングシステム強化プロジェクト
- 3.HIV/エイズ対策プログラムのモニタリング評価システムと実施の強化
- 4.地上デジタル放送日本方式プロジェクト
- 5.南部アフリカ地域持続可能な森林資源管理・保全プロジェクト

6.OSBR(One-stop Border Post)フォローアップ専門家



青年海外協力隊

自分の持っている技術・知識や経験を 開発途上国の人々のために生かしたいと望む青年を派遣す るJICAの事業

応募資格: 満20歳~39歳の日本国籍を持つ人

ボツワナには青年海外協力隊が派遣されていて、 ボツワナ支所では彼らのサポートを全面的に行っている。

私たちは研修中に 実際に青年海外協力隊の活動を見たり、 隊員の方とお話しできる機会があった。



青年海外協力隊隊員 土井美希さん

土井 美希さん ボツワナではあまり馴染みのない 管理栄養士として、 病院で栄養指導を行っている。

(お話をした感想) 管理栄養士という仕事が 全く定着していない国で うまくいかないことがありながらも 考えながら工夫をして、 自分の技術を広める活動をしているのが 素晴らしいと思い、憧れを抱いた。





青年海外協力隊員 井坪圭祐さん

(活動している姿を見て・・・)
ポツワナの小学生が日本語を使って
来遠を行っている姿が動鮮であり、 日本文化が広まっていることを
とても嬉しな感じた。
英語も巧みに使いながら。
楽しそうに指導をしている井坪さんの
いきいきとした姿がとてもかっこよかった。



青年海外協力隊に対する認識の変化

見学前

#戸を掘ったり、 学校を建設したり、 現地の人が行っていることの 手助けとして 隊員が派遣される。 見学後

隊員一人一人が持っている スキルを応用して、 現地に広めて定着させていく形で 活動が行われている。

アフリカンスタディーズに参加して

普段の生活ではできない貴重な経験を通して、 いろいろなことを吸収することができた。 日本で生活しているだけではわからないことを学ぶことができ、 自分の視野が大きくひろがった11日間だった。

参考資料:生徒成果物② ドイツ・ゲーテ校研修参加生徒プレゼン資料



Reasons for choosing this topic:

- 1. Many people have different ideas about it
- 2. Discussed in the government(not solved yet)
- Some people believe Japan needs more immigrants to build a promising future and to deal with its decreasing birthrate and aging population.
- 4. Was reported on the local TV news on March this year



Positive

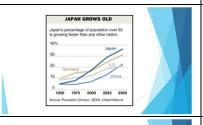
The cabinet office thinks by letting in about 20 thousand people into Japan every year prevent the population from declining for the next 100years. For that to happen, the total fertility rate should be where it's able to maintain the population Negative This immigration policy would create friction and also raise concerns about become poor public security

Now

The foreign workers are only opened for foreigners with highly specialized and academic skills.

Results

Letting in 20 thousand people only with high skills or academics would be really hard. Japan would need to let in unskilled workers to reach the amount of 20 thousand.



People's Doubts

- Who is going to take the responsibility
- ➤ Why does it have to be immigration?

People who need public assistance might increase to 20 thousand people.

Japanese people are having fewer children because raising them costs a lot of money

→ should change the system EX: the government to afford some money for education
and raising kids (maybe 0-3 years old)

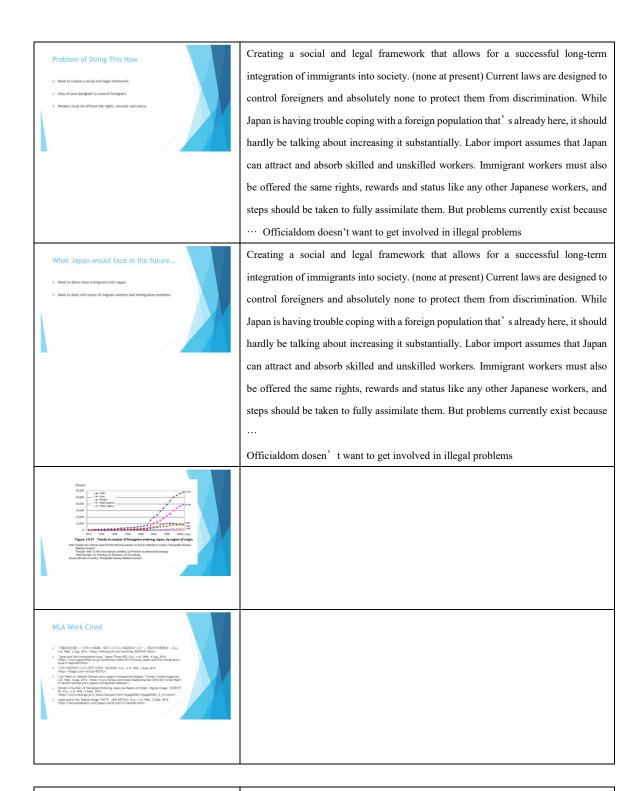
Immigration

There's a lot of failed examples in Europe and other countries as well.

For example \cdots .

If Japan is willing to let more foreigners in \cdots

Countries should be picked not indiscriminate their country's situation The need to maintain a higher value of the Japanese of yen. Should give favorable treatment to Japanese students, not foreign students Increase the citizen's rates of output Some people say that this is the worst crisis in Japanese history





Hello, I'm Genta Hara. I'm in 10^{th} grade at Tamagawa Academy. Today I would like to talk about how the ways of handling garbage has changed in Japan from the 16^{th} century.

Ways garbage were thrown away in the Edo Era

- * They threw the garbage on the road and into the river
- Used excrement as fertilizers for plants
- Landfill started
- Early days of Meiji...
- →Due to the Epidemic, the [Waste Sanitation Law] carried out and the condition improved.

First I would like to talk about how Japanese through garbage away in the Edo era which is from 16th to the mid 19th century. In the Edo era, people often through their garbage on the road or into the river. Although they have used excrement as fertilizer for plants. Japanese found out the way to make a site for the disposal of garbage, which is now called a landmill or a dump. This way continued until the early days of Meiji, in the Mid 19th century and the epidemic disease occurred. So the government carried out the Law to improve the condition.

The Turning Point

- Preparation for the Tokyo Olympics (1964):
 they started to use plastic buckets
- Although...
 Still did not separate the combustible and incombustible garbage.
 Harmful substances released.

The turning point of how we handle garbage was in the 1960s. In 1964, due to the preparation for the Tokyo Olympics, they started to use plastic buckets to collect garbage. Although at this time, we still did not have to separate the combustible and incombustible garbage. So a lot of harmful substances released. People did not think of ways to recycle at this time.

Ways We Handle Garbage Now

- Ways of separating garbage is different by area.
- rin Tokyo
- Inconbustible and Combustible garbage can be thrown away together.
- Plastic bottles, cans, beer bottles, glass, batteries have to be separated.
- In order to do this, we can recycle many of the things.

Now in Japan, the ways of handling garbage is different by where we live. I would like to explain how we have to separate garbage in Oota ward, in Tokyo where I live. We can throw both combustible and incombustible garbage together. Although we have to separate garbage that can be recycled. For example, plastic bottles, cans, beer bottles, glass, and batteries. In order to do this, we can recycle many of the things. During this exchange program I would like to know how garbage is separated and recycled in Germany. Thank you for listening.

References

http://www.shutoken-env.co.jp/special/ http://www.nishihara-corp.jp/nishihara/history.html http://www.nipponstyle.jp/column/nttr/column_13_html

http://www2u.biglobe.ne.jp/~kouhei-y/haikibutunorekisi-houseisi.htm

I' m Juri Minakuchi. I am a 10th grader at Tamagawa Academy.
 My presentation is about the new generation of Japanese Cars.

New generation of Japanese Cars

Tamagawa Academy 10^{th grade} Juri Minakuchi

1.

Today in my presentation, I would like to talk about the eco-friendly cars and hybrid **Major Motor Companies** cars from these 4 companies. · Germany/Audi, Volkswagen First, Audi and Volkswagen. I think you are familiar to these companies. Also I would like to talk to you about the hybrid cars from Japan. I will introduce Nissan and Toyota, the most popular companies in Japan. As I think you all know, the Latest hybrid car from Audi is the "A3 Sportsback e-From Audi and Volkwagen tron". "A3 Sportback e-tron" CO2 emissions 35g/km The CO2 emission is 35g/km and boasts good fuel economy in its model PHV. Boast the good fuel economy of typical in its model PHV [Prius PHV]. The ensure of the "Golf" the eco-friendly compact car by Volkswagen. "Golf" It has a significantly improved fuel as well as revamped Le ze Dee and gasoline, and The engine, was significantly improved for fuel economy as well as revamped both Le ze Dee and gasoline is standard equipped with a regenerative braking system and idle stopping. It is standard equipped with a regenerative braking system and idle stopping. This is the "Note", the most popular eco-car from Nissan. Nissan's Eco-car The number of sales ranks in third place, after "Prius" and "Aqua" from Toyota. "NOTE" It has 1.2 liter "Eco Supercharger Engine", and also has the top level as a fuel · Third place in number of sales • Equipped with an Eco supercharger efficient petrol engine car. • Equipped with a high level 1.2 liter eco supercharger engine. It' slow fuel consumption makes it a top-level light car. • Low fuel consumption makes it a top-level light car. TOYOTA' s hybrid car is the Prius. TOYOTA's Hybrid Car It has 1.8 liter engine with excellent fuel efficiency at high speeds and produces less "Prius" exhaust than regular cars. . It has a 1.8L engine with excellent fuel efficiency at high speeds. · Produces less exhaust than regular cars. Since 1997, 5million eco-friendly cars were sold worldwide. Sales of eco-friendly cars in Japan Little more than 2million of them were sold in Japan. Recently many of the eco-friendly cars are receiving the Car of the Year in Japan. I would like to learn more about eco-friendly cars in Germany. Thank you for listening.

5million eco-friendly cars are sold worldwide
 2million of them are sold in Japan

References

- https://www.google.co.jp/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&sourc d=rja&uact=8&docid=N0tMM1dWf5xSsM&tbnid=festQdPzx
- http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%AB%E3%82 AF%E3%82%B9%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%B2%E3%83%B3

http://car.watch.impress.co.jp/docs/longtermreview/nissan_note/20121227_580516 html

Waste Reduction in Japan

TAMAGAWA ACADEMY

9th Kaoruko Mizuno

I'm Kaoruko Mizuno. Today I would like to talk about waste reduction in Japan.

The reason I chose this topic was because recently I saw the news about food loss on

I' m interested in the differences between the way how Japan and Germany reduce waste.

In this presentation I will talk about food waste in particular.

About food waste in Japan and Germany



In Japan, waste of food is 2272 million tons per year. 500~900 million tons of them are food loss.

The 60% of the food waste, which is about 33.8million tons are from household

Germany waste food about 31 million tons per year and general household waste food about 660 million tons in total.

For each person waste food about 80kg per year.

Japan wastes more food than Germany.

Waste Reduction in Japan







- •Choose the menu previously before attending a party →Japanese Food / Western Food
- ·When you waste food at the buffet, pay some money
- ⇒By people being careful, leads to reduce food waste If we eat without waste, it can be used as food.

For example in Japan, when we attend a wedding party,

we can choose rather to have Japanese food or Western food when we get an

This action connects to reduce food waste. People can eat whichever they want to.

By saying something what you cannot eat beforehand, the cook can make the food without putting it in.

I think you are already familiar, but there is a way called "Deposit" in Germany.

Also at some buffet restaurants, you have to pay money if you have leftovers.

The amount of money is about 100yen, but still this connects to reduce waste.

Waste Reduction in Germany







- "Deposit": Get the bottle fee back when you return
- Beer bottle / About 2euros(300yen)→0.03euro(5yen) back

Bottle of water/1euro (140yen)→0.4euro(50yen) back

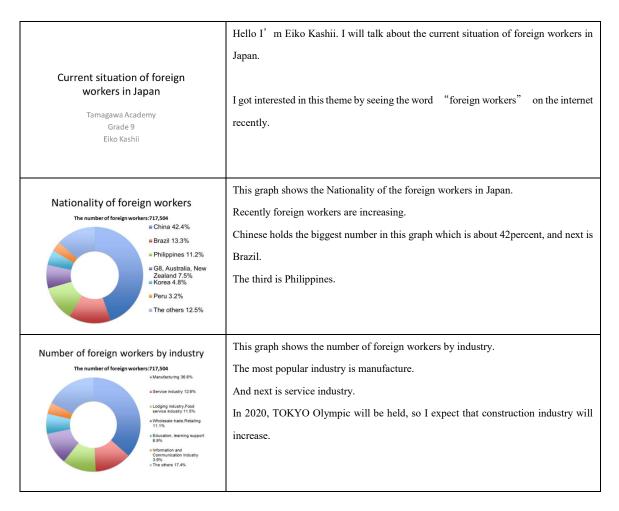
When you return the bottle, you can get the fee back. Often in Japan, people do not return the bottle.

For example if you buy a beer bottle for 2euros which is 300yen in Japan.

When you return the bottle, you only get 5yen back.

However, here in Germany, you can get the bottle of water with 1euro, and when you return the bottle, you get 40cents back.

Conclusion The difference of waste reduction between Japan and Germany ↓ Germany has a better system of reducing waste. Japanese people should be more aware of wasting food. ⇒There are many people around the world suffering because they don't have enough food.	If the Japanese companies had a deposit system more like Germany, I consider that more people will get involved more. Also if more of the restaurants make people pay when they have leftovers, many Japanese will feel more aware of wasting food. There are many people around the world suffering because they don't have enough food. I would like to know more about how Germany is working on with the Environmental problems throughout this trip. Thank you for listening.
References http://www.gov-online.go.la/usefu/artis/201308/4.html http://www.tv-tokyo.co.ja/tekoton/backnum/backnumber_216.html http://www.zov.nn.ja/life/lobas/shoku/3091.html http://www.zobina.ac.ja/un/ur/sesanch/sanken/32/wai.pdftsearch=%63%83%89%63%62%A d%63%83%84-%69%83%95%83%80%65%A6%88%63%81%92-%65%87%80%67%82%A d%63%83%84-%69%83%95%83%80%68%85%85%83%97%83%87%83%85%85%83%84%80% http://www.aberna.co.ja/7882 http://www.aberna.co.ja/7882 http://maga.saarch.yaboo.co.ja/search?ai=\UT- 88frstop_pa_1_s8&956697%A63%6699C%AC	



Employment policies of foreign workers

Expansion of the acceptance
Extension of the period of stay
Advanced talented people
Strengthening of support

From this April, the government decided to expand the number of assistance and extend the residence period for foreign workers.

This is for the revival from the Big earthquake in 2011 and for the Tokyo Olympics in 2020.

And, for the activation of the economy, Japan needs help from people will high skills. I think these policies will lead to the Activation of Japan in the future.

I would like to know about the foreign workers in Germany too.

Thank you for listening.

References

- http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200 0002ttea-att/2 r9852000002tthv.pdf
- http://www.asahi.com/articles/ASG444FH1G4 4ULFA012.html
- http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bu nya/koyou_roudou/koyou/gaikokujin/gaikokuji n18/index html

A System of Japanese National Diet and

Prime Minister of Japan

Tamagawa Academy 11th grade Tomohiro Higuchi I'm Tomohiro Higuchi. I will talk to you about the system of Japanese National Diet and the Prime Minister of Japan. I studied about Germany's politics in the history class and got interested. Throughout this trip, I want to know how the politic system is now and also if the system is similar to Japan or not.

National Diet of Japan is bicameral legislature

The house of representatives, lower house
The house of councillors, upper house



National Diet Building (Kokkai-gijido) ;built in 1936 The National Diet is Japan's <u>bicameral</u> legislature. It is composed of a lower house that is called the House of Representatives, and an upper house, called the House of Councilors. Both houses of the Diet are directly elected under a parallel voting system. In addition to passing laws, the Diet is formally responsible for selecting the Prime Minister. The National Diet Building is located in Nagatachō, Chiyoda, Tokyo.

National Diet of Japan

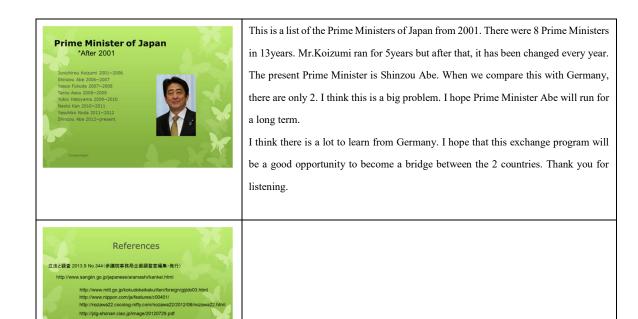
Seats; 722

The house of representatives, lower house Seats;480 four-year terms

The house of councillors, upper house



The house of representatives has 480 seats, and four-year terms. The house of councilors has 242 seats and six-year terms.



帰国後報告 ドイツ・ゲーテ研修 1















ゲーテ校研修

9年 三笠組 39番 水野 薫子

研究テーマ

・ゴミ処理について

私がドイツで発表したことは日本とドイツのゴミ処理の違いについてです。"ドイツではデポジットという制度がある"とかいてあり、実際にゲーテ校のカフェなどでも行われていました。私が調べたものには"1€に対して40を返ってくる"となっていましたが今は25をしか返ってこないそうです。



日本ではビール瓶などの一部でしかデポジットは使われていないので、もっと色々なもの(瓶)に活用することにより、日本中の人が瓶をちゃんと片付けたりして瓶のポイ捨てなども減ると思いま

研究テーマ

・もし日本の企業がドイツのようにデポジット制度をもっていた6日本 の食品ロスはもっと減ると思います。だか6日本にもこのデポジット 制度をより取り入れたほうがいいと思います。そして十分な食料がな く苦しむ人々が世界中にいることを知り、無駄にしないように意識す ると思います。そうすることにより、町・県・国が綺麗になり環境もよく なると思います。



ゲーテ校

この日は日本で用来していったプレゼンテーションを来表しました。ゲーツ校でミ本語を多れている生態を提加について発表していました。アージョンもしつかりしていました。私から記憶は「コンドで発力におした。ドインと日本に登画機が重要のである。本名では、私はいかに共通語の製造が大事なのかを実通しました。私はいかに共通語の製造が大事なのかを実通しました。



ゲーテ校

この目はクロイツァー先生にゲーラ校校を参奏内してもらいおした。 日本月はあがい、されずは安備の年後がいました。ゲーラ校にはは がないそうでき、上して、金金りよいの時間がありため、下の時間 は様まが入っていないの時か。といってはできばしたり、カフェテリアに しかし、任命を見かいですごく自由を構じがしました。 しかし、任命を見ずいてきてはなるおかでも集中していました。



この目は民意高級当で、ホスト生が民意を受けている間にあたらはドイツ版でスポーツを考え、練習「本した。 イツ版でスポーツを考え、練習「本した。 お記れ会からないたとかがイツの関いよれスピーデをした後、五川 の歌を扱い。前収表のアイト先生から第7番をもないるによっ このドイツの様で中人にとしたできる。いい場合がいたした。 私はアイツで学んだことを日本でも洗め、ていきたいです。



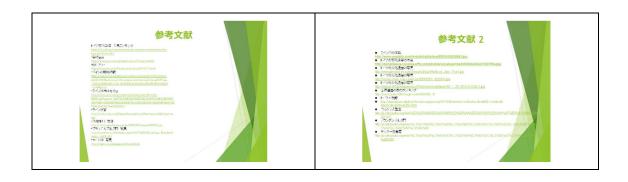
References http://www.milt.go.ph/okudokelkaku/itlen/foreigng/ijido03.html http://www.mippon.com/ja/featuresic00401/ http://nozawa22.coolog-nifty.com/nozawa222011208/nozawa22.html http://igo-shonan.ciao.jp/nimage/20120729.pdf http://www.iti.or.jp/kiho46/48tanakan.pdf



ドイツ・ゲーテ研修 2







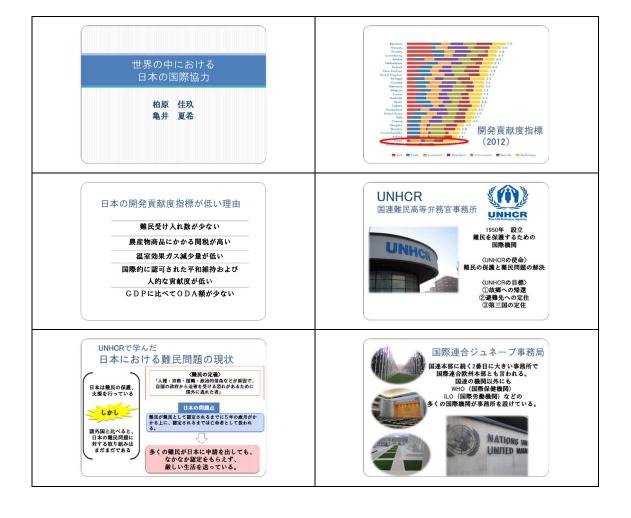














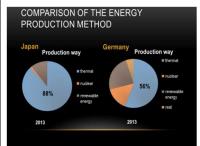
参考資料:生徒成果物③ ヨーロッパ国際機関&ドイツ・ゲーテ校研修参加生徒プレゼン資料



My name is Yoshiro Ngai, I am a second year high school student.

My name is Takashi Doi. I am a first year high school student.

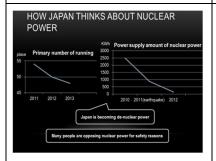
Our research question is " Do Japan and Germany have differences in energy problems?"



First ,this is a comparison of the two countries energy production methods

From the two pie graphs, We can see that Japan relies most on thermal power. But,

Germany has supplemented the about half with not only thermal power generation
but also nuclear power and renewable energy.



This is a Primary number of running graph. This graph shows the amount of energy supplied from nuclear power.

As you can see from these two graphs. 2011 or later, The power from Japanese nuclear power plant stopped, In September 2013, the nuclear power plant utilization rate was 0%. 2011 is the year that the Great East Japan Earthquake has occurred. In Japan, people have had a variety of opinions on the use of nuclear power. But, the Great East Japan Earthquake that occurred in March 2011, strengthened opposing views.



At first it is introduce about the wind power electricity

It turn a propeller using wind- force with the wind-generated electricity

The merit do not produce CO2(carbon dioxide)

And the demerit being controlled by wind



Next I introduce about the solar energy. The solar energy is generation to change to the electricity using solar panel. Recently we often see the solar panel in common places such as roof of houses, Schools, and company buildings. The merit is that it can generate electricity easily just to put a panel on. And does not produce CO2 But the demerit is that this is controlled by weather as well. Also it costs a lot of money.



newt Introduce about geothermal power

Generation using the power that groundwater is heated by volcanic activity and the steam spouts out

The merit is a little carbon dioxide and eco friendly

The demerit is costs dig the well and keep watch on the basement

Increases because Japan is volcanic islands

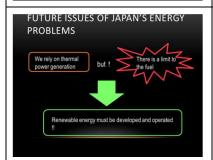


To spread new types of renewable energy, there is a way called feed in tariff

All the electricity that solar energy by fixed price wholesale purchase system revision was able to value the spread of light of the sun

In addition it became that a green investment reduction of taxes took effect and chose a depreciation rate of facilities.

It is expected to be able to spread other kinds of renewable energy as well.



Currently Japan relies on thermal power generation

But, it can only produce a limited amount of energy

Therefore, Renewable energy must be developed and become operational. We have to make improvements in "sustainable development".

Germany, which is an environmentally advanced country, What kind of ways are taken to increase its use of renewable energy?

Through out this program, We want to learn about the energy problems in Germany.



These are the homepages we used.

Thank you for listening.



Japan's Environmental issues



My name is Rio Okabe . My name is Takumi Usami .

Today we will talk about Japan's environmental issues.



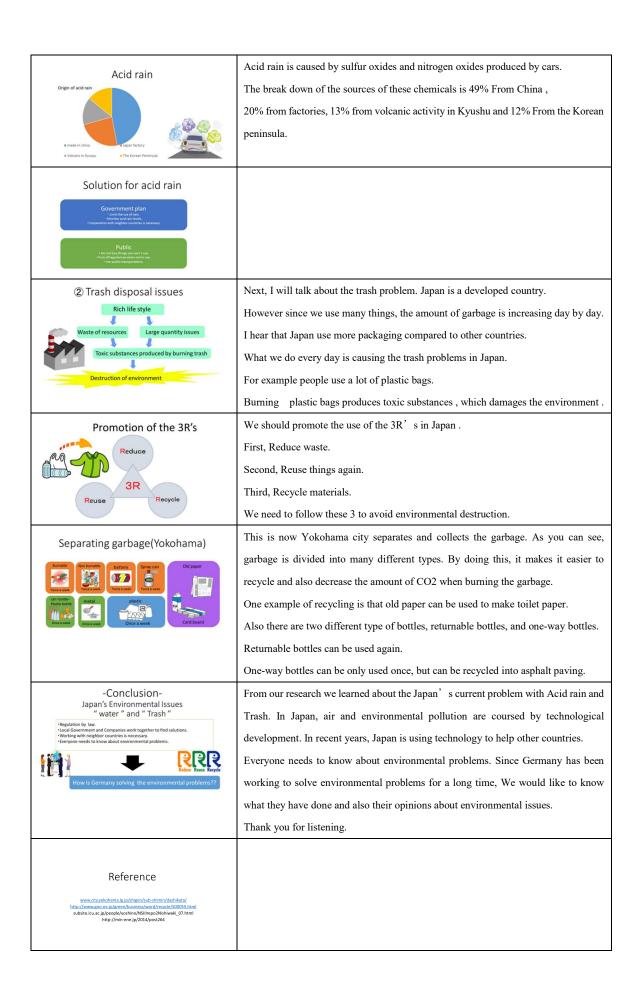


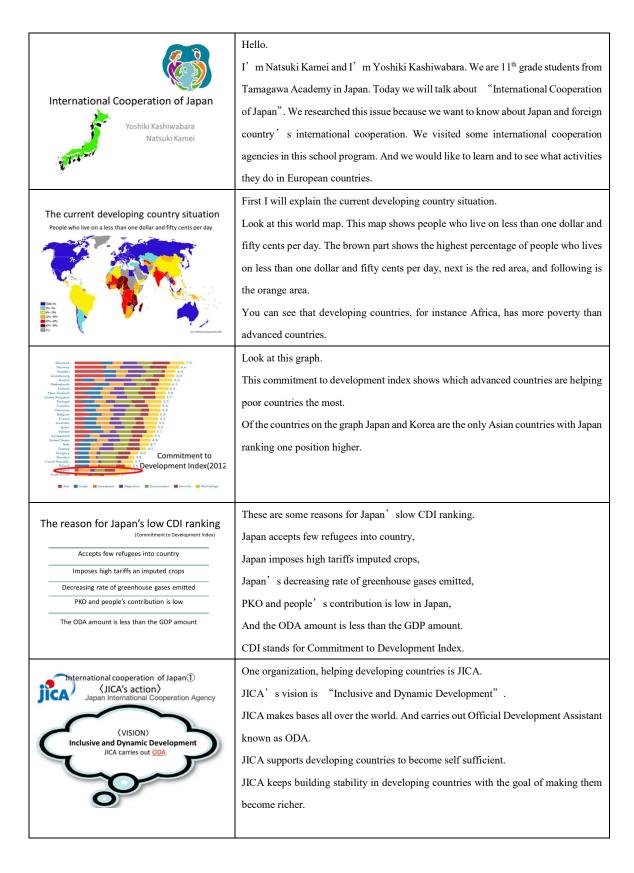


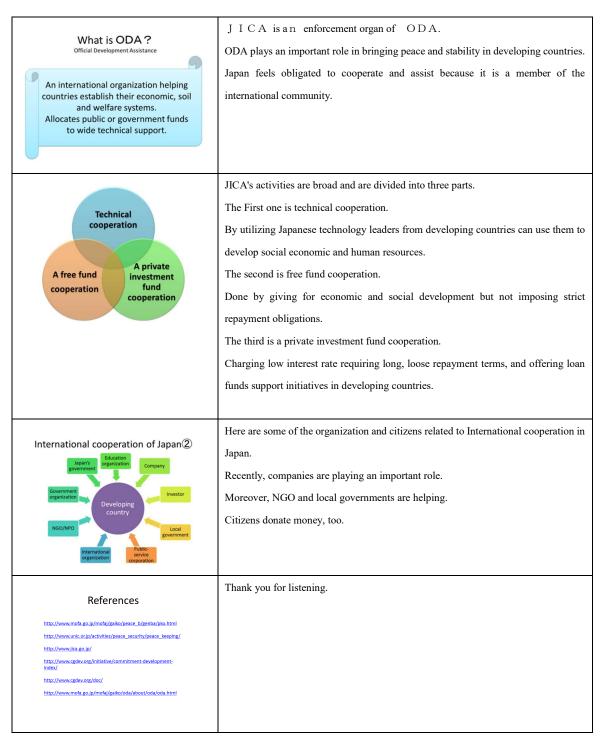
At this time we have two separate problems.

One with water and one with trash.

In Japan people are working together to solve these issues.











Firstly we are going to explain about the current world situation on sharing of cars. As you can see on the graph, the first place is Toyota. Then Mercedes Benz, BMW, Honda, and Volkswagen which shows German and Japanese car companies hold the top-5 places in the world, This means they have the strongest influences. Also, it shows both countries have top quality of the technology.



Next, we would like to introduce Japanese cars, which are made by some of the largest auto companies in the world, like TOYOTA and HONDA. Now, a brief Japanese car history.

In 1904, the first Japanese car called YAMABA STEAM AUTOMOBILE was built in OKAYAMA-city, Okayama prefecture, in the Chugoku region of Japan. In 1907, the first petrol vehicle in Japan was produced. OTOMO-GO by Hakuyou-sha, a Japanese car company, was the first official automobile producer in 1925. After WW2, Japanese companies learned new western technology to make cars. However TOYOTA was particular about the "JAPANESE MADE CARS" and released TOYOPET CROWN in 1955. After that, Japanese people began to buy big sports cars.

After a long depression, TOYOTA released the PRIUS as mass produced hybrid car which signified its advanced environmental technology. Since then in 2013, the "eco car" became the center of the automobile market.



Global warming is the one of the biggest social issues in Japan. Carbon dioxide accounts for the high concentration of CO2 in the atmosphere which contributes to about 60% of global warming.

The circulation of CO2 on earth is shown on this diagram. The concentration of CO2 in the atmosphere changes by the absorption and emission on land and sea. However, 780 billion tons of oxygen is stored all the time as CO2.

By burning of fossil fuels, 6.3 billion tons of CO2 is emitted annually and 1.7 billion tons is absorbed in to the sea, and 1.4 billion tons goes to the ground. Therefore 3.2 billion is absorbed to in the atmosphere every year.

If greenhouse gasses increase, the ground temperature will increase correspondingly. The amount of emitted radiation will also increase. Eventually, the bad circulation as shown in this diagram will be created.



Within the total of CO2 emission produced in Japan, about 20% is from transportation and half of it is produced by private automobiles.

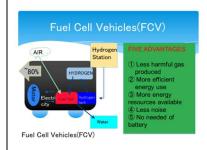


Petrol vehicles emit, CO2 which has a negative effect on the environment and people. On the other hand, an electric car's motor, is moved by electricity stored in the battery. Therefore although electric cars produce CO2 at power stations where electricity is generated to charge the battery",

They don't produce, as much gas as petrol cars do "while running."

A Petrol-car can transfer only 20% of its energy to run, whereas electric cars can transfer maximum of 80%. So, installing electric cars instead of petrol cars can reduce CO2 emissions in half.

In addition, by using electricity that was generated by renewable energy resources, such as solar or wind power, even more CO2 emissions can be reduced.



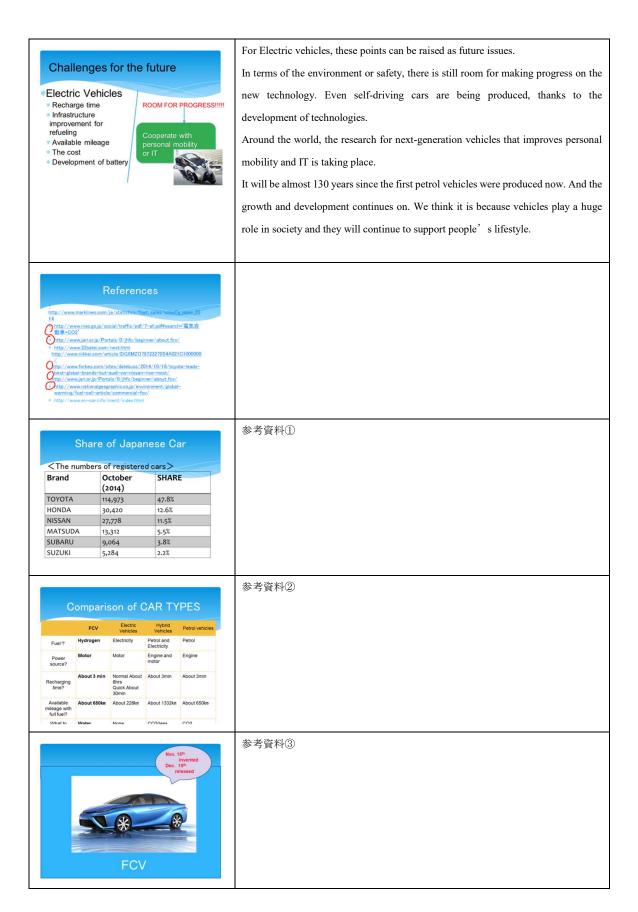
Another car type is FCV, which stands for Fuel cell Vehicles. A FCV uses electric energy generated from a chemical reaction of hydrogen and oxygen in fuel cells to run the motor. Just like petrol vehicles, it is charged by hydrogen, at a hydrogen

Its use has 5 advantages. First it produces less harmful gases. Because it produces only water, it doesn't' have a negative effect on the environment like petrol vehicles do. Second, its energy efficiency is better than any other car types. Third, it can use various types of energy resources. Fourth less noise is produced while running. Finally it is no necessary to charge the electricity.



We still have issues for spreading this revolutionary car in Japan. Mainly these things can be raised as current problems.

- *Existence of regulation obstruct the construct
- *The amount of supply for the hydrogen station
- *The cost of hydrogen fuel affecting consumers
- *The cost
- *The danger of hydrogen explosion









For Japan of natural heritage 4 cases and cultural heritage 14 cases.

In total 18 cases.

In world heritage ranking is 13/126.

We will introduce about Japan cultural heritage of Itsukushima temple, Mt Fuji, and intangible cultural heritage of Japanese paper it called "Washi".



It is One of the three most scenic spots in Japan.

It is exist from approximately 1185.

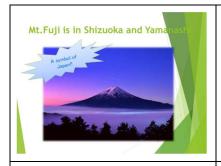
By tides, it shows different view.

In low tide, it is can go to the temple but, in high tide, it is can't go to the temple. It looks like floating on the ocean.



It is effect by tidal range.

Recently, the inland sea of Japan of ocean level is rising so, it is damaging the temple. In this temple is prevents of damage by disaster such as fire, high tide, by remove the floorboard, put heavy stone on the important spot, pull a roof, pillars of the main shrine.



Mt, Fuji was registration world cultural heritage in 2013.

Elevation 3776m the highest mountain in the Japan.

Japanese symbol.

Mountain climbing season July to August.



Before Mt Fuji registration world cultural heritage, it was very dirty mountain by garbage.

From 1960, tourist increased then it dispersed the garbage.

Dispersion garbage lead to be pollution, it takes bad influence to ecosystem.

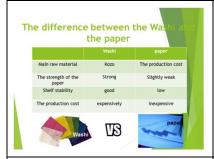
By local government and volunteer cleaned Mt Fuji, it decreased garbage.



Washi is Japanese traditional paper.

It is made from plant of Kozo.

It is good for environmentally.

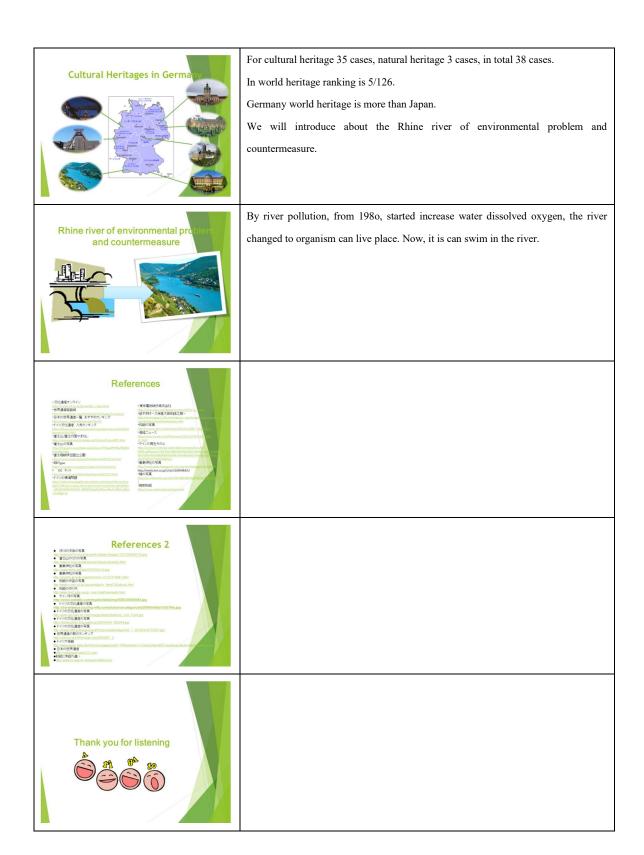




Recently, to make Washi, use the chemical medicine.

Recent of washi is very demand for foreign so, it is happened river pollution at eastern Asia.

To choose well for environment material, it is need good material.





参考資料

- 1. Cut the three of Kozo.
- 2. Steam the cut kozo.
- 3. Remove the skin it is called "Kurokawa".
- 4. Dry the kurokawa in sun.
- 5. Expose river water in 24 hours.
- 6. Remove the skin in knife.
- 7. Soak soda white ash.
- 8. Expose river water and dry in sun.



- 9. Remove the white ash by hands.
- 10. Hit that fiber of wood by wood stick.
- 11. Mix that fiber of wood with water grated yam.
- 12. Make paper.
- 13. Apply a pressure in the scheelite and lack to squeeze the water.
- 14. Remove the paper
- 15. Stick the board.
- 16. Dry the paper.
- 17. 17. Inspection.



参考資料

平成 26 年度 K12 国際交流 実績 (上半期・下半期)

学園国際交流センター 2015年2月12日記録

	受入/派遣	囯	学校名/プログラム名	期間	学年・人数 (引 卒制) : 治まず
4月	受入	豪州	International Grammar School	1日間	中高 27 名
	受入	豪州	Billanook 校	2ヶ月	IB11年1名
	受入	米国	Punahou 校	5日間	8年16名
	派遣	豪州	Essington 校	10ヶ月間	11年1名
	派遣	ニューシ゛ーラント゛	Round Square Junior 会議	9 日間	9年5名
	派遣	カナダ	カナダ研修 第1グループ	12 日間	8年24名
5月	受入	台湾	稲江校 総合科オンキャンパス	3週間	高 18 名
	受入	米国	Harker 校	5日間	6年23名
6月	受入		1 カ月交換研修	4週間	高9名
		米国	Bolles 校 (2名)、St.Andrew's 校 (1名)、Hackley		
			校(1名)、The Athenian School(1名)、Campbell		
			Hall 校 (1 名)		
		台湾	稲江校(2名)		
		シンカ゛ホ゜ール	UWC校 (1名)		
	受入	シンカ゛ホ゛ール	UWC 校	3週間	IB9年1名
	派遣	米国	Advanced Biotechnology Institute	3週間	IB 10 年 1 名
7月	受入	豪州	Westminster 校	1日間	高 10 名
	受入	ブラジル	松柏・大志万学院	1週間	7・8年16名
	派遣	カナダ	カナダ研修 第2グループ	12 日間	8年25名
	派遣	カナダ	カナダ研修 第3グループ	10 日間	8年19名
	派遣	米国	Bolles 校	10ヶ月間	11年1名
	派遣	豪州	Essington 校熱帯環境学習プログラム	9日間	11年6名
	派遣	南7・ボツワナ	アフリカン・スタディーズ 2014	11 日間	高 13 名
8月	派遣	タイ・カンボジア	国際サービスプロジェクト	10 日間	高5名
	派遣	カナダ	Appleby 校夏期英語研修	4週間	高5名
	派遣	カナダ	カナダ研修 第4グループ	10 日間	8年15名
	派遣	豪州	エシントン校訪問研修	9日間	6年12名
	派遣	ブラジル	松柏・大志万学院派遣プログラム	12 日間	高5名
	派遣	カナダ	Aspengrove 校	3ヶ月間	IB10年1名
9月	派遣	インド	Round Square 国際会議	10 日間	高5名
	派遣	ドイツ	Goethe 校交換プログラム	12 日間	高6名

平成 26 年度 K12 国際交流 実績 (上半期・下半期)

学園国際交流センター 2015年2月12日記録

	受入/ 派遣	E	学校名/プログラム名	期間	学年・人数 (6 字教員) さ ます)
10 月	受入	ドイツ	Goethe 校	3週間	高12名
	受入	豪州	Westminster 校	1日間	中 13 名
	受入	豪州	Essington 校	3日間	中12名
	受入	カナダ	Aspengrove 校	1ヶ月	IB10年1名
	受入	台湾	稲江校 日本語科オンキャンパス	3週間	高 18 名
	派遣	豪州	12 年生派遣プログラム St. Philips 校	7週間	12年1名
	派遣	米国	Harker 校	11 日間	5年28名
	派遣	米国	Punahou 校	12 日間	8年19名
	派遣	米国	アメリカ東部研修	10 日間	8年23名
	派遣	カナダ	IB カナダ研修	12 日間	8年21名
11 月	受入	カナダ	Stratford 校	5日間	8年23名
1月	受入		1 カ月交換研修	1ヶ月	高9名
		豪州	Westminster 校(1名)、Ivanhoe 校(1名)、		
			Bunbury校(1名)、St. Philips校(2名)		
		ブ゛ラジ゛ル	松柏学院 (3名)		
		デ゛ンマーク	Herlufsholm 校 (1名)		
	受入	ブラジル	松柏・大志万 第二十回訪日使節団	3日間	高 26 名
	受入	スイス	Inter Community School Zurich	2ヶ月	IB9年1名
	派遣	ドイツ	ヨーロッパ国際機関・ゲーテ校訪問プログラム	16 日間	高 10 名
e.	派遣	米国	Chadwick 校	2ヶ月	IB10年1名
2月	派遣	テ゛ンマーク	12年生派遣プログラム Herlufsholm 校	1ヶ月	12年1名
	派遣	豪州	12 年生派遣プログラム Westminster 校	1ヶ月	12年1名
	派遣	豪州	12 年生派遣プログラム Ivanhoe 校	3週間	12年1名
	派遣	シンカ゛ホ゛ール	UWC 校	1ヶ月	IB9年1名
	派遣	カナダ	Aspengrove 校	1ヶ月	IB10年1名

H26 年度 年間受入… 9ヶ国 236 名

H26 年度 年間派遣… 12 ヶ国 257 名

*号摩教員や学校規察のみの受入れなどは人数に含んでいません

*任意留学者は人数に含んでいません

◆執筆担当 玉川学園 SGH 常任委員会教諭および担当

		項目	担当者(教科)	
課	1) /	「ローバルキャリア講座	硤合 宗隆 (社公)	
題研	2 1	Tamagawa Super Global Leader 48」認定制度への登録	登本 洋子 (情報)	
究	③12年公民科選択科目「ワールド・スタディーズ」「World Studies in		硤合 宗隆(社公)	
		lish		
		フリカン・スタディーズ(現地研修)への参加	上村 雅明(英語)	
	⑤自	由研究「グローバル・スタディーズ」の履修	坪井 佑夏(英語)	
	⑥ラ	ウンドスクエア玉川国際会議の企画・運営・参加	森本 信雄 (IB・体育)	
	0 /		横山 絢美(数学)	
	(7) K	イツ・ゲーテ研修への参加	大原 健(地歴)	
			木内 美紀子 (理科)	
	8模	擬国連の実践を通した外交・国際協力の理解	後藤 芳文 (国語)	
	⑨A. 学内 LAN による広報		登本 洋子 (情報)	
	⑩B. 日本語および英文ホームページの作成による広報			
	①C. 研修参加生徒による生徒発表会や展示発表の実施		大原 健 (地歴)	
		ペガサス祭、ゲーテ、IBフォーラム		
課題	1. 評	A. 生徒・教師・保護者の意識変化調査		
題研究外	価	B. 国際教育 NGO サスティナビリティー・フロンティアーズによる効	硤合 宗隆(社公)	
外	検証	果測定および定期評価 C. SGH 運営指導委員会(ハイパネルチーム)の設置		
	2. 英語	A. 英語検定と TOEIC 受検の奨励を行い、GTEC(ベネッセ)導入を検 討		
	語力	B.11 年生選択科目「英会話Ⅰ」、12 年生選択科目「英会話Ⅱ」のコ	前田 則文(英語)	
	ンテンツグローバル化			
		C. 学内レシテーションコンテストの実施		
		D. アカデミック・スキル・キャンプ		
	3. 大学とのグローバルな高大連携科目の設定		硤合 宗隆(社公)	
	4. グラハム・パイク氏による教員研修			
	5. ダイアローグ・イン・ザ・ダークを通した関係性(エコロジー)の探究		小林 智子 (体育)	
	6. 海外トップ大学生たちとの交流		硤合 宗隆 (社公)	
	7.10年次「玉川アドベンチャープログラム (tap) 」の必修化および自由		亚山 联合 (粉学)	
	研究「リーダーシップ(tap)」の履修		平山 雅行(数学)	
目標の進捗状況、成果、評価				
デーム	7 答 押	・運営補助 玉川学園 SGH 事務局 濱野あずさ・	由自己, 北村唯	

データ管理・運営補助

玉川学園 SGH 事務局 濱野あずさ・中島良子・北村唯

【担当者】

<u> </u>	<u> </u>			_
担当課		学園教学部学園教学課	TEL	042-739-8928
H	- 名	五十嵐麻子	FAX	042-739-8929
聙	哉 名	学園教学課長補佐	e-mail	k12affairs@tamagawa.ed.jp

